

本  
文  
編



A 盤珪『白引歌』（略称：白）

- 1 生まれ来たりし、いにしへ問へば、何も思はぬ、この心
- 2 来たるごとくに、心を持てば、すぐにこの身が、みな仏（生き仏）
- 3 不生不滅の、この心なれば、地水火風は、仮の宿
- 4 仮の火宅に、心をとめて、我と燃やして（修羅と燃やして）、身を焦がす
- 5 過去も未来も（穢土も浄土も）、ただ今ばかり、心とめよより、ただうたへ
- 6 心とめずば、憂き世もあらじ（憂き世もあだし）、何も無いこそ（何もなくてぞ）、生き如来
- 7 恋しゆかしも、ただ今ばかり、逢はぬ昔が、ある故に
- 8 昔思へば、ゆふべの夢よ、とかく思へば、みな嘘ぢや
- 9 夢と思へば、憂き世の中に、憂きも辛きも、なきものを
- 10 因果歴然、我がなす事と、知らで迷ふは、身のひいき
- 11 有為の転変、身にならして、それに迷はば、おのれが損よ
- 12 無為の心は、もとより不生、有為がなき故（種がなき故）、迷ひなし
- 13 惜しや欲しやと、思はぬ故に、今は世界が（いはば世界が）、みな我がものぢや
- 14 奇妙不思議は、ひとつもないぞ、知らにや世界が、みな不思議
- 15 金を持ちたりや、貧者が賤し、持たぬ昔を、忘れたか

16 後世ごせいを願ふと、ひいきを願ふ、いとど我慢に、添へかけて

17 悪を嫌ふを、善ぢやと思ふ、嫌ふ心が、悪ぢやもの  
18 年は寄れども、心は寄らじ、いつも変はらぬ、この心

19 嬉しめでたや、老いせぬ君に（老いせぬ宿に）、訪ね逢うたりや、我ひとり

20 我と作れる、心の鬼が、せめて苦しむ、身の咎とがを

21 安く養ふ（五万五万の）、浄土じやうどはここよ（億もなし）、五万五万の（安養浄土あんやうじやうど）、おくもなし（爰こゝぢやもの）

22 後あとや先まへやと、案ずる中に、今日けふもむなく、日を暮らす

23 悟ろ悟ると、この頃せねば、朝の寝起きに、気が軽い

24 髪は剃るとも、心は剃らぬ、剃らぬ心を、撫でてみよ

25 たとへ百まで、憂き世に住むも、ただしばらくの、

市の茶屋

26 是非ぜひと名利みやうりの、四人の鬼に、今日も明日も、責めらるる

27 鬼の住家すまかを、よくよく見れば、おのが心が、鬼ぢやもの

28 地獄どこぢやと、あの黒牛くろうしに、問へば車を、動かしやる

29 浄土どこぢやと、如来に問へば、知らぬ顔して、ただござる

30 迷ひ悟りの、もとないものを、我と我が手に、仕し拵こしらへ

31 人にかたきは、もとないものぢや、是非を争ふ、我われがなる

32 善きも悪しきも、思ひしことは、おのがこの身の、ある故ぞ

33 冬の頃しも、喜ぶたき火、夏の来るほど、あら嫌いやや  
34 夏の頃しも、恋しき風も、秋の果てぬに、はや憎む

35 鬼の心で、集めた金を、餓鬼がきに取られて、目がまう

た

- 36 金が欲しさに、命を捨てて、捨ててみたれば、金要  
らず
- 37 思ひ出だすは、忘れぬ故に、思ひ出さねば、忘れぬ  
よ
- 38 辛<sup>つら</sup>き憂<sup>うれ</sup>き世と、恨<sup>うら</sup>むる人は、夢に心を、苦しむる
- 39 とかく憂<sup>うれ</sup>き世は、もとなないものぢや、心とめよより、  
ただうたへ
- 40 悪を作れば、心が鬼ぢや、外<sup>ほか</sup>に地獄は、なきものを
- 41 地獄<sup>ぢやく</sup>嫌<sup>きら</sup>ひの、極楽好きで、楽な世界に、苦を受けた
- 42 善をしたこと、善ぢやとうじやる、うじやる心が、  
悪ぢやわい
- 43 善きも悪しきも、ひとつにまるめ、紙に包んで、捨  
てておけ
- 44 嘘の世界を、誠のやうに、化かし化かさる、化物ぢ  
や
- 45 いつか五欲を、身にならはして、それに習うて、日  
を暮らす
- 46 人に教へは、もとなないものぢや、是非を争ふ、我が  
やならぬ
- 47 仏道修行を、勤めし後は、何もかはりは、得ぬもの  
を
- 48 迷ひ悟りは、もとなないものぢや、親も教へぬ、習ひ  
もの
- 49 悟る心は、我ぢやと思へ、念と念とが、相<sup>あ</sup>撲<sup>ま</sup>とる
- 50 後<sup>こう</sup>世<sup>せ</sup>勤<sup>べん</sup>めも、この頃<sup>い</sup>嫌<sup>いや</sup>と、出入りの息の、あり次第
- 51 死んで世界に、夜<sup>よる</sup>昼<sup>ひる</sup>暮らせ、それで世界が、手に入  
るぞ
- 52 仏様こそ、おいとしござる、外<sup>そと</sup>の飾<sup>かざり</sup>りが、まばゆか  
ろ
- 53 内の仏にや、そりやまだ早い、門<sup>もん</sup>の仁<sup>に</sup>王<sup>わう</sup>に、まづな  
りやれ
- 54 我と浄土を、訪ねてみたら、結句<sup>けつご</sup>仏に、嫌はれた
- 55 人が茶碗を、からりと投げば、我は機<sup>き</sup>用<sup>よう</sup>の、綿<sup>わた</sup>で受  
けよ
- 56 思うて思はぬ、振しよとすれば、思うて思はぬ、振  
やならぬ

57  
心を  
心大和に、身は摂津の国に、忘れまいぞや、かのこ

B 盤珪『麦春歌』（略称：麦）

- 1 仏なりたか、仏なりやれ、生まれ付いたる、いき仏  
 2 地獄いやなら、地ごくをやめやれ、にくやほしやが、  
 それ地獄
- 3 仏々と、あなかしましや、たれも生まれた、時仏
- 4 なんの遠かろ、にんにく慈悲が、すぐに如来の、御座ござ所
- 5 金がほしくば、ほしいをのけて、むねの金仏かねぶつ、ただ  
 をがめ
- 6 楽がしたくば、今でもしやれ、人はもとより、楽な  
 もの
- 7 ほしいをしいの、よく赤鬼よ、おにが地獄に、すむ
- 8 南む阿みだぶつ、南無阿みだ仏と、いはずとおきや  
 れ、慈悲の心が、弥陀如来
- 9 人をかはゆく、おもふが仏、仏そりやくに、人ぜせ  
 り
- 10 人のよしあし、なにしいはうぞ、むねの如来の、  
 ばちこはや（はぢこはや）
- 11 がまんひいきに、ふくりんかけて、願ふ浄土は、皆  
 地獄
- 12 ぢごくいやなら、我が親をがめ、我をうんだる、親  
 仏
- 13 親ををがまず、我が身ををがめ、心すなほに、やさ  
 しくて
- 14 たらやくやは、ただ火に油、もゆる思ひも、増す  
 ばかり
- 15 うらみねたまは、皆我がひいき（そりや我がひい  
 き）、ひいきひいきは、そりや地ごく
- 16 人にうらみが、何しにあるに、なさけないのが、我

がこころ

17 ふしやうふめつの、心をみれば、いつも月夜に、米のめし

18 いかういかうと、極楽ねがふ、願ふ心に、鬼が有る

19 鬼がむかへに（鬼がどこから）、どこからくるぞ（迎へにくるぞ）、にくやつらやが、火の車

20 生まれくるから、そりやしぬる筈、なんのなげきが、あろぞいの

21 しんで行かうと（しして行かうと）、ねがふは迷ひ、けふも浄土ぢや、はやいそげ

22 あすはしられず、きのふは過ぐる、けふのしあんが、  
一大事

23 いきた如来が、心の内に、やすい浄土が（安養浄土あんやうじやうどが）、身のうへに

24 よくをへらせば、浮世は浄土、人はのこらず、皆仏

C 延享五年小哥しやうが集 (略称: 延)

- 1 思ひ入りその、山ならござれ、ひとり待つ夜の、ほとと  
公きみ
- 2 山に成りたや、朝来あさきこの山に、秋は紅葉もみぢの、たじま鋪ひら着る
- 3 雪の白浜、白いやうで黒い、帰る雁がね、くる燕
- 4 恋にもろいぞ、諸崎もろさき川の、水に心が、移るやら
- 5 君といつしか、五師いつしの宮の、神の駒とも、引かれゆ  
く
- 6 やるぞ文箱ふみばこ、二見ふたみの浦の、明けて心の、内を見よ
- 7 君を思へば、琴引山ことびきやまで、爪つめのおちたも、知らぬ恋
- 8 故郷こきやう恋しや、我が古里ふるさとの、柴の庵いほが、なつかしや
- 9 夢になりとも、高麗かうらい国の、城しろが落ちたと、言てござ
- 10 袖ゆきの裾すそこそ、長いがよけれ、嫌きらなお江戸えどの、長の留りゆう  
れ
- 11 出石いづし諸もろ杉すぎ、宮内みやうち観音くわんおん、申し籠かごめたよ、我が願ねがひ  
守
- 12 おれが育うちは、竹の子育たけのこち、親おやの仕着しやくせを、皆ぬい  
で
- 13 おれと其方そなたは、板屋いただの霰あられ、転まび合あへとの、縁ゆかりぢやげ  
な
- 14 夜中夜念よなや仏ぶつ、誰たれが身の為ためぞ、若わかうて離わかれた、夫つまのた  
め
- 15 池田伊丹いけだの、新諸しんもろ白はくも、銭ぜにがなければ、見みて通とほる
- 16 酒は飲のまねど、酒屋かどの門かどで、足あしがしどろで、歩あまれ  
ん
- 17 これのお背戸せうこに、若荷わかかや路みちや、みやうが目出めだたや、  
ふき繁はん昌じやう
- 18 これのお庭にわに、三股みつまた榎えの木、榎えの実生みらいで、銭ぜにが  
生なる
- 19 祝いわひ目出めだたの、若松わかまつ様さまよ、末すえは鶴亀つるかめ (枝えだもさかゆ

る)、五葉ごえふの松(葉もしげる)

20 こよひ天満てんまの、やれ橋はしに寝て、声をとられた、川風がわかぜに

21 心がらよの、もしからゑもぎ、人を恨うらみな、身を恨

み

22 愛宕あたごま参りに、袖そでを引かれた、是こゝも愛宕あたごの、御利生ごりうかうか

や

23 愛宕山あたごやまから、豊岡とよおかを見れば、帯おびの幅ひろほど、有る町まちを

24 髪かみを島田しまだに、結いはうより女をんな、心島田こゝしまだに、持もて女子むすめ

25 豊岡とよおかしもへ出いでて、二見ふたみの御水みづ、のめば気きもよや、

涼すずやかや

26 心細こゝろこいは、一日市いちにちいちの繩手なはで、いつか行き着きこ、湯ゆの島

へ

27 湯ゆの島しま通とほひが、辛からいかいの客衆きやくしゆ、何なにが辛からかろ、御料ごれう

ぢやもの

28 瀬戸せとや津山つやまにや、船ふねさへ着きくに、あじきじきなの、

桃島ももじまや

29 豊岡とよおか豊岡とよおかと、みな云いやれども、船ふねが着ききやこそ、豊

岡おかなれ

30 豊岡とよおか一番いちばん、丹後屋たんごやなれど、味噌水みそみづ喰くはしやる、六尺むさし

よ

31 一季いっせきをりたや、出石いっせしの町まちの、回まりかどやの、龍野屋りゅうのや

に

32 水みづは懸かり水みづ、身みは楽たのなれど、御方おかた悟ご気きに、ほど厭あい

た

33 丹波田たんぱだ所ところ、よい畑はたけ所ところ、娘遣むすめはなりたや、躰むこほしや

34 さても見事みごとな、福知ふくちの城しろや、前まへは大川おほがわ、蛇じやが鼻はなよ

35 福知ふくち出いてから、長田野ながのの越こえて、いつか行き着きこ(こ

まをはやめて)、亀山かめやまへ、

36 瀬田せだへ回まれば、三里さんりの回まり、ござれ矢橋やばしの、舟ふねに乗

ろ

37 お伊勢いせ参まりに、此こゝの子こが出来できて、名なをば伊勢松いせまつ、子

伊勢松いせまつ

38 笠かさを忘われた、伊勢路いせぢの茶屋ちやに、空そらが曇くもれば、思おもひ出

す

39 坂さかは照ある照ある、鈴鹿すずかは曇くもる、間まの土山つちやま、雨あめが降ふる

- 40 伊勢の津の津の、大学様も、奉公なさるる、上様へ  
 41 晩の泊りは、五井赤坂よ、あすは遠州の、浜松よ  
 42 箱根八里は、馬でも越すが、越すに越されぬ、大井川  
 43 そなた百迄、おりや九十九迄、共に白髪、生ゆる迄  
 44 行けばはじめかみ、戻れば目坂、道の悪いは、八代谷  
 45 八代百姓や、河江の者や、公事は大岡の、利と成りた  
 46 文はやりたし、書く手は持たず、やるぞ白紙、文と見よ(文とよめ)  
 47 忍ぶ小部屋、連子の窓に、月と書いたは、待てとかや  
 48 来るか来るかと、回れや車、おれが願ひの、御所車  
 49 宮津原くりや、牡丹の花よ、昼は萎れて、夜開く  
 50 お台所にや、まだ火が見ゆる、様はかはいや、夜詰めする  
 51 いとしのごを、山へ遣るほどに、吹けよおろせよ、あいの風  
 52 竹の切り口、二度はれすとも、忍び返しに、せまいもの  
 53 長い刀にや、差し様がござる、うしろ下がり、前高に  
 54 さても可愛や、蛍の虫よ、忍ぶ縄手に、火をとます  
 55 とろりとろりと、沖行く船も、女郎が招けば、磯に寄る  
 56 梅に鶯、とまるはよいが、花を散らす、憎うござる  
 57 丹波老の坂、子安の地藏、都上臈衆の、守り神  
 58 丹後成相、切戸の文殊、あひに桂の、男やま  
 59 宮津糸繰り、将棋の駒よ、銀がなければ、無相言  
 60 大津出てから、七浦八浦、どこが大津の、浦ぢやや  
 61 伊勢の大夫殿、心きき目きき、諸国配りやる、御祓

62 若い折とて、二たびあるか、枯れ木に花が、二度咲

くか

63 長い煙管に、煙草をついで、是が届こか、お江戸迄

64 加賀の金沢の、安防殿町の、黒い羽織は、群鳥

65 安芸の宮島、まはれば七里、浦は七浦、七ゑびす

66 心短気な、殿御を持てば、烏鳴きさへ、気にかか  
る

67 心よう持て、をなごの子なら、一期親には、添はぬ  
もの

68 淀の川瀬の、若し水車、何を待つやら、くるくる  
と

69 淀の川瀬に、立つ白波は、近江水かや、懐しや

70 あれが田辺の、長棟殿か、音に聞こえし、程もなや

71 田舎なれども、伏見は名所、松に花咲く、藤が森

72 娘やるまい、陰福所へは、野田の日焼けの、水をと  
る

73 豊岡豊岡と、名は高砂の、松に吹く風、音ばかり

74 美濃に妻持ち、尾張に住めば、雨は降らねど、簑恋

し

75 心河内に、身は轟に、花は須谷の、円通寺よ

76 雨が降るとて、西から曇る、娘去るとて、髻が来ぬ

77 奈良で名所は、猿沢の池、水に影さす、三笠山

78 四方白壁、八つ棟作り、前は大川、蛇が鼻よ

79 さても見事な、亀山の城、西へかたむく、北へよる

80 さても見事な、亀山の城、七十五尋の、縄釣瓶

81 瀬田の唐橋、唐金擬宝珠、水に影さす、膳所の城

82 いかな江戸行きも、箱根で涙、跡を見戻す、踏み戻  
す

83 さても見事な、箱根の躑躅、花に見とれて、日を暮  
らす

84 松に成りたや、有馬の松に、藤に巻かれて、寝とご  
ざる

85 面白いぞや、春日の森は、鹿が紅葉に、戯れて

86 金が出るやら、河谷山に、茜袴で、金ゆりやる

87 来いと云たとて、行かれたものか、道は四十五里、  
海の上

- 88 沖を馳はるは、丸屋の船か、丸に屋の字の、帆が見ゆる
- 89 何も職々、小原せはらの女郎は、花の都へ、木を売りに
- 90 田辺出る時、涙で出たが、今は田辺の、風もいや
- 91 小出伊勢様、園部をとりやる（園部にござる）、それで園部が、繁昌はんじやうする
- 92 鈍どんな男おとこに、どん笠かさ着せて、うしろから見りや、なほ鈍どんな
- 93 忍しのび夜夫よづめに、医者殿いしやでんもてば、葉や手のもの、持病ぢびやうすき
- 94 おれは不産ふさんで、子がない程に、野辺のべの送りが、淋しみしかろ
- 95 天下泰平、思ふ事叶うた、末は鶴亀、五葉の松
- 96 思ひ夜夫よづめに、漉酌ろしやくもてば、蔵の窓から、糟かすくれた
- 97 心短気で、我が国を出て、今は習はぬ、職しやくをする
- 98 百夜通はば、一夜は落ちやれ、小野小町を、見よ聞きけよ
- 99 下手へたな殿御でんごや、忍しのびに雪駄せつた、草履ぞうりがよいもの、奈良
- 100 草履ぞうりが  
様の力りきなら、無間むげんの鐘を、撞ついて奈落ならくへ、沈しづむとも
- 101 なんば此方こなたが、今よいとても、なんで無間むげんの、鐘撞かねついた
- 102 人が茶碗と、投げかきよならば、おれは極上の、綿わたで受きよ
- 103 枕取る間に、はや夜が明けた、是ひとよが一夜と、たてらりよか
- 104 流石さすが侍、喰はねど楊枝やなぎ、鷹たかは死ねども、穂はつまぬ
- 105 とてもしよならば、大きな事しよやれ、奈良の大仏の、修理しよやれ
- 106 縁で連れれば、座頭の坊も愛し、さらば負ひまじよ、琵琶箱を
- 107 荒い風にも、当てまい殿を、やろか信濃の、雪国へ
- 108 与作丹波の、馬追うまおひなれど、今はお江戸の、刀差しぢや
- 109 うらら旅へ出て、呑気のんきもやるが、内の嬬むからは、淋しみしかろ

- 110 色の黒いが、弁慶ならば、鍋も茶釜も、弁慶か  
 111 面白いぞや、出合ひは招く、向かひ合はせに、妻も  
 ちて  
 112 面白いぞや、上方かみかた辺は、松に柳を、植ゑ交せて  
 113 さても見事な、柘榴ざくろの花よ、花は千咲く、実は一つ  
 114 おちよおちよと、落としておいて、壁に蔦の葉、の  
 き心  
 115 逢ひた見たさは、飛び立つばかり、籠かごの鳥かや、恨  
 めしや  
 116 槿花きんか露命るめいの、身を持ちながら、おきやれ其方の、自  
 慢顔  
 117 木曾の懸け橋、太田の渡し、碓氷峠うすひなげが、無かよかる  
 118 様に貰ひたる、邯鄲かんたんの枕、なれど手枕、ほどはない  
 119 今朝の嵐は、西から出るぞ、暁にや嵐が、来と思ふ  
 120 因幡七坂いなばななさか、あれ越え見れば、広い但馬たぢまに、親ないか  
 121 玉木善兵衛は、春来てまけて、もはや御前ごぜんにや、出  
 られまい  
 122 因幡兩國、鬼のやうに言へど、出石唐糸いげしからいとに、投げら  
 123 れた  
 124 奈良の大仏、建てたる大工、弥陀の浄土は、此の世  
 果てるとも  
 125 おれが思ふほど、其方そなたが思や、七つ遣る文や、八つ  
 も遣る  
 126 おれはお伊勢の、お祓箱はらひばこで、どこが何処いづくと、定め  
 なや  
 127 爰こゝに居りたや、此の湯の島に、諸国諸人の、振を見  
 て  
 128 爰こゝは何処どこぞと、船頭衆に問へば、是は三国みくにの、川裾  
 よ  
 129 お江戸下りの、浴衣ゆかたを縫へば、涙染なみじめりて、糸がこ  
 んぬ  
 130 恋しゆかしの、雪駄せつたの音おとよ、主は誰とも、知らねど  
 も  
 131 殿の寝姿、今朝こそ見たれ、五月野まつきののに咲く、百合ゆりの

- 花
- 132 おせん何処へ行きやる、手に花据ゑて、明日は長  
三郎の、四十九日しじゅうくにち
- 133 向かひ通るは、清十郎ぢやないか、笠がよく似た、  
菅笠が
- 134 破れ菅笠、真紅の締結しんくわ、さらば着もせず、捨てもせ  
ず
- 135 思ひ出いつれや、夜も寝られずや、起きて行こかと、  
夜に三度
- 136 おれと其方と、等閑なほざりするも、優曇華うどうげの花、今ばかり  
相模横山さがみよこやま、照手の姫は、夫のためとて、車引く
- 138 阿波の鳴門に、身は沈むとも、様の御言おことなら、背く  
まい
- 139 心良う持て、昔と今は、めぐる因果も、箸の先  
及びまいとて、惚れまいものか、賤が伏屋の、月を  
見よ
- 141 爰は一の谷、敦盛様の、御墓所か、おいとしや  
其方いにやるか、俺振り捨てて、後に思ひの、種蒔
- 142
- 143 つつじ椿は、岩山照らす、城の小姓衆は、町照らす  
いて
- 144 城の小姓衆は、茶碗の湯漬、色は白いが、水くさい
- 145 誰が横矢を、いりやうとままよ、したる約束、無に  
やすまい
- 146 なんば責めても、景清かげよの行方ゆくへ、水の底迄、知りませ  
ぬ
- 147 兄に十郎、弟に五郎、親の敵かたきを、討ち取つた
- 148 さても愛しや、継信つぎのぶ様は、能登の大矢を、胸に受く
- 149 名立て話は、必ず無用、壁に耳ある、浮世ぞや
- 150 麻を蒔きやらば、大岡山見やれ、雪の残りが、七ま  
だら
- 151 麻を蒔くのは、辛夷こやしの花の、咲いた時こそ、作らう  
ぞや
- 152 後生願やれ、女郎屋の亭主、女郎の施物せもつは、なとし  
やる
- 153 沖の渡中となかの、三本の小竹、産まざ竹やら、子がさか  
ぬ

- 154 白髪頭しらげあたまは、見苦しけれど、祝ひごとには、尉じょうと姥うば
- 155 鳥は八番、八声のものよ、起きて往いにやれよ、忍び妻
- 156 なんぼ嫌でも、悪ても一度いちど、行ゆかにや叶はぬ、風が来る
- 157 源氏見物や、首や強けれど、鉦しやう取られた、景清かげきよに
- 158 今年世が良て、穂に穂が咲いて、道の小草に、銭が生なる
- 159 水は出て来る、山吹しげる、夜の寢覚に、鹿の声
- 160 水は出て来る、山伏や逃げる、夜の寢覚に、法螺ほらの貝
- 161 瀬田せじかの鰍かじかに、源五郎鮒たぢまや、鮎あぢまは但馬の、八木太郎
- 162 佐野の大根、土測つちそく午莠ごんぼう、味の良いのは、蒔まきかぶら
- 163 思おもうて来たのに、お虎は寝ねごや、ねごのお虎よ、目を覚ませ
- 164 ござるござると、浮き名は立ちて、浜の松風、音ばかり
- 165 恋し恋しと、書きやる文も、風は由無や、吹き戻す
- 166 宵よにや来もせで、今夜中なかに、何処どこの忍びの、戻りやら
- 167 よるも夜中も、出てくる妻は、深山みやま天狗か、恐ろしや
- 168 辛気しんきさましに、一節ひとしじやれば、人は栄耀えいようちやと、思ふげな
- 169 奈佐なさで名物、一の宮ほふし、亀が崎では、芹せりでんす
- 170 一におさ稲、二八代の米、三に府中の、菜大根
- 171 阿瀬あせのかなやの、源大夫げんたいふ戻し、今いまにござるよ、蛇じゃの骨ほねが
- 172 大津馬方おほつうまたた、とろりとやりやれ、上のぼり下くだりの、じよや節ぶしを
- 173 大工だいこう殿どのよりや、木挽こびきは僧そうや、思おもふ仲なつをも、引き分けやる
- 174 寒かんの節走しはすも、火ひの六月むつきも、駒こまの手繩てなはで、日ひを暮くらす
- 175 是非ぜひに泊とまりやれ、尾入おいらの宿やどに、夜よは越こされぬ、金かねが坂さか
- 176 其方そなたどこ衆しゅうぢや、おりや柏原かしはらぢや、おれも丹波たんばぢや、

- 177 連れになる  
五尺手拭、中端染めて、おれに呉りよより、宿に置  
け
- 178 たすき貰うたが、返そか掛けよか、忍ぶ繩手に、切  
り捨てふか
- 179 其方愛しで、泣くではないが、縞の財布の、銀欲し  
や
- 180 楊枝くはへて、手に鷹据多て、城を廻るは、おれが  
殿
- 181 流れ大川、男の心、暮るるものかや、夜の間にも
- 182 山で山雀、四十雀小鷹、里で鶯、群雀
- 183 雨が降るとて、天王寺山の、松の緑が、ゆらゆらと
- 184 五月水程、恋忍ばれて、今は秋田の、落とし水
- 185 貧乏したかて、駿河を見たれ、身上よてなら、何  
がみよ
- 186 立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は、百合の花
- 187 佐渡と越後は、それ筋向かひ、橋を掛きよやれ、舟  
橋を
- 188 君に盃、見こめてさすで、受けてこぼすな、露ほど  
も
- 189 野辺の蛙の、鳴く声聞けば、在りし昔が、思はるる
- 190 さても優しの、螢の虫よ、忍ぶ繩手に、火を点す
- 191 様の心は、行燈の中の、油火のやうに、とろとろと
- 192 親と頼みの、親方様も、えんが他人なりや、惨ござ  
る
- 193 一夜寝たとて、金下された、さすが庄屋の子は、わ  
き捌く
- 194 吉野初瀬の、花紅葉より、様の白歯で、笑ひ顔
- 195 親に隠して、はや鉄漿付けて、笹に降る雪、葉を隠  
す
- 196 添うて添はいで、又来て添へば、花の縁かや、面白  
や
- 197 様を待つとて、宵から爰に、髪のだぶさに、露が浮  
く
- 198 おれが心は、篠焚松で、様に云はれて、身を燃やす
- 199 廿三夜の、月待つおれを、様を待つとは、誰が言う

た

200 月と一度に、出たおれなれど、月は山端やまはな、おりや此こ

処こに

201 月夜鳥がらすは、若もしいつも啼なく、起きて月見て、又ご

ざれ

202 子持ちや子やつれ、三日月様は、何にやつれて、臃おぼろ

なぞ

203 様の三日月、宵々ござる、せめて一夜は、有明に

204 辛苦いやと云いうて、語れば親達の（語れば親の）、心

がらよと、勿はねられた

205 親のない子に、親はと問へば、親はござれど、極楽

に

206 加賀の菅笠、白いといへど、君の顔には、及ぶまい

207 紅葉踏む鹿、憎いといへど、恋の文書く、筆となる

208 浅黄あさぎ着りやよし、縞着りや似合ふ、褐前垂かちんまなね、弱腰

に

209 様は沈ぐんの木、枯れても匂ふ、萎しなれてもようや、我が

夫は

210 関の地藏より、松坂よりも、心とまるは、姉の津よ

211 親に孝行して、世に住めば、此の土ばかりか、後世

もよい

212 喰ふや喰はずの、所帯をせうと、悪い心は、持たぬ

はず

213 江戸へござらば、俺おれには暇いとま、江戸でや江戸女郎、め

さるもの

214 京や大坂や、伏見や淀や、流行るものかや、半襟が

215 悍おぞい子供等や、長三郎と寝たと、長三見もせにや、

逢あひもせぬ

216 歌の出所は、養父内垣屋やぶうちかきやよ、後でなかすは、小田網

場

217 おれは飼ひ鳥、餌えにつらされて、明障子の、内に

住む

218 今日の日も又、はや晩となる、忍び夜夫よづめも、近寄り

やる

219 さても見事な、お葛籠馬つづらうまよ、七つ蒲団ふとんに、曲まが□不明で

220 大坂衆と云いや、ほど懐しや、俺も大坂の、者ぢやも

- 230 見目がよいとて、根性が人か、大坂木偶の坊で、面ばかり
- 229 おれの殿御は、吉原通ひ、金の雪駄も、たまるまい  
女子様ぢや、みなどれども、生まれ在所を、余所に見て
- 228 案橋
- 227 橋の上から、女郎屋を見れば、行かうか戻るか、思  
や
- 226 及びなけれど、中野の治部の、朝の御膳に、居りた  
よもの
- 225 今朝の麻糸、我が親ならば、ないそ戻れと、呼ばれ  
よもの
- 224 鉦を叩いて、仏にならば、鍛冶や鋳物師は、みな仏
- 223 とんと凭れて、顔打ち眺め、ほろと泣いたを、いつ  
忘りよ
- 222 行けば亀山、戻れば八かべ、道の悪いは、杉倉よ  
ござる
- 221 一夜泊りの、商人様も、去にやりや名残が、惜しゆ  
の
- 231 咲いた桜に、なぜ駒繫いだ、駒が勇めば、花が散る
- 232 思ひ参らせ、候べく候よ、末は御見と、書き留めた  
様のござるは、宵から知れる、駒がいなく、おき  
駒が
- 234 夕べ忍んだを、猫ぢやと云へば、猫が刀差いて、来  
るものか
- 235 伊勢へ七たび、熊野へ三度、愛宕様へは、月参り
- 236 こいでこいでと、思ふ様来いで、さほど思はぬ、様  
が来た
- 237 梅に鶯、とまるはよいが、花を散らす、にくうご  
ざる
- 238 爰に寝ましょか、三味原に、五輪枕に、高々と
- 239 何を云ふとも、ゆひ聞かせても、水の上なる、泡ぢ  
やもの
- 240 後生願やる、其の人々は、人の使ひやうも、うら  
やかな
- 241 旦那様より、子旦那様が、人の使ひが、惨ござる
- 242 音頭出すまい、身のやつれるに、今朝も殿御に、叱

- 245 麻の中にも、なんぼか寝つろ、麻物言はにや、名も  
 立たん  
 246 心許すな、丹波の者に、文殊近くて、智恵深い  
 247 知らぬ旅へ出て、物言ふな女、どれが何方の、類ひ  
 ぢややら  
 248 雨は降れども、身は濡りやしよまい、様の情を、笠  
 に着て  
 249 様のつけざし、名残の煙草、思ひ増すやら、火がつかぬ  
 250 目出た目出たが、たび重なりて、鶴が御門に、巢を  
 かけた  
 251 鶴が御門に、巢をかきよならば、亀はお庭に、甲を  
 乾そ  
 252 亀が御庭に、甲ほすならば、松と竹とも、繁昌する  
 253 松と竹とが、繁昌するで、尉と姥とが、舞ひ遊ぶ  
 254 尉と姥とが、舞ひ遊ぶゆゑ、孫や子供は、囃子方  
 255 但馬のちんに、因幡のけによ、丹後のどいも、はゆる事  
 256 弥生三月、五月は端午、九月重陽と、心やれ  
 257 おれは小池の、鯉鮒なれど、鯰男は、いやで候  
 258 親に放れた、もし其の時は、岩に立つ藤、便りなや  
 259 岩に立つ藤、便りもあるが、便りないとは、俺が事  
 260 去年や一昨年や、蚊に食はれたが、今年や萌黄の、  
 蚊帳に寝る  
 261 吉田通れば、二階から招く、しかも鹿の子の、振袖  
 が  
 262 今年爰風、又来年は、どこの風にか、吹かりよぞや  
 263 牛を引き出す、清行まれよ、蟬丸様を、乗せまして  
 264 待てと云うてから、寝もせで待つぞ、将棋碁盤に、  
 腰かけて  
 265 花が見たくば、小室にござれ、今は小室が、花盛り

- 276 身上しんしやうならねば、人目も恥も、義理も仁義も、思は  
れぬ
- 275 銭や金をば、穢あまつた多も持つぞ、兎角心を、善う持ちや  
れ
- 274 心細かに、善う働きやれ、貧乏したとて、人褒めぬ
- 273 草履ぞうりを取る
- 272 人の心が、のう花染めで、裏や表が、無かよかる
- 271 貧乏すりやこそ、伯父おぢ子にかかり、同じ従兄弟いとこの、  
てたもれ
- 270 何をなげくぞ、若し川柳、水の出花を、なげき候
- 269 大津米屋も、利が無かしよまい、四六廿四しうそじじしは、御米  
四九しし
- 268 忍び夜妻にや、二度思ひする、ならふならじと、離  
ればと
- 267 せまい心や、松の葉心、広い芭蕉葉の、気を持ちや  
れ
- 266 空の七夕たなばた、真実いとし、川を隔てて、恋をめす
- 277 忍び夜妻が、世に出た見やれ、破れ衣で、鉢ひらく
- 278 なんぼ隠いても、色外に出る、内に思ひの、有る故  
に
- 279 思うて来たのか、思はで来たか、又は男の、がて来  
たか
- 280 おれは野に咲く、主ない花よ、折らば疾く折れ、散  
らぬ間に
- 281 頭合はずの、あの男めに、入れてやりたや、金の輪  
を
- 282 思うて見やれの、せくまいものか、忍び夜妻の、二  
道を
- 283 恋し恋しと、鳴く蟬よりも、鳴かぬ螢が、身を焦が  
す
- 284 堅田落雁かたたそが、船さし寄せて、志賀唐崎の、一つ松
- 285 奈良の大仏、建てたる大工、大工手柄か、かねせぎ  
か
- 286 何がよかろぞ、淀とる殿が、八はた八幡はちまん、下に見て
- 287 案じまいもの、今朝出た船が、帆かけ風が、よいも

のを

288 寺に天蓋、女郎屋に簾、かけてよいのは、人情

289 急くな嘆くな、叶はぬとても、縁と命の、末を待て

290 親に放れば、もし智恵もつけ、二葉草とは、松の葉よ

291 紺の袷紗に、松葉を包み、待つに來んと、知らせかな

292 思ひ合へとや、母良の山の、夫婦杉ほど、思ひ合へ

293 松の葉色や、色変はらずや、様の心も、松に似よ

294 さんさ伽羅様、せかずと見やれ、人の花なりや、見たばかり

295 いとし殿御が、京へ行くほどに、水は出まいか、まき川に

296 雨が降りやこそ、小野原泊り、降らにや久畑の、町泊り

297 忍び夜妻が、異な物くれた、下りいちごに、松添へて

298 何としたやら、此の四五日は、生木筏や、気が浮か

ぬ

299 てんぼ八木の町、裸で走れ、女郎が見たとて、苦にやならぬ

300 中瀬通ひが、八木こそ通れ、八木に心が、皆残る

301 山家よいやら、下賤の女郎が、結びさげたよ、もうるの帯

302 滝と一瀬の、長い髪なれど、こなた思ひて、皆ぬけた

303 おれは思へど、若しこなさんは、芋の葉の露、ぶり

しやりと

304 御台所と、若し川の瀬は、いつもどんどど、鳴るが

よい

305 歌ひ止めたは、庄屋政所が、聞けば廿二の、声も

する

306 様と合図の、尺八めいで、何を合図に、出会ふやら

307 一の門から、二の門迄は、忍び出いたが、宿がない

308 書いた文さへ、得読まぬ俺が、書かぬ白紙、何と読

も

- 319 心ないとは、此方の犬や、忍び得たもの、追ひ戻す
- 318 甘二有る  
あまり辛さに、数へて見たりや、庄屋のきざはし、
- 317 葉の松  
おれは此方に、一期と想着て、植ゑて置いたよ、五
- 316 松の葉にさよ、書きたるおれも、殿に去られて、手  
も下る
- 315 龍田川には、紅葉を流す、おれは世間へ、名を流す
- 314 御台所にや、切籠の燈籠、おれを思はば、消えてく  
れ
- 313 嫌と思へば、其の傍らの、そよと吹き来る、風も嫌
- 312 忍び妻ほど、親思ふなら、親の不孝は、得まいもの
- 311 切れた切れたと、音頭が切れた、腐れ縄やら、又切  
れた
- 310 音頭出いても、付けてもくれぬ、側の友達、曲もな  
い
- 309 音頭出しやらば、地声でしやんと、爰は四つ辻、人  
が聞く
- 320 忍び得たとも、油断をするな、忍び得た夜は、猶大  
事
- 321 心ないとは、此方の事よ、冴えた月夜に、白紬
- 322 駒に蹴られた、道芝草も、露に一夜の、宿は貸す
- 323 船は帆かけて、よい風を待つ、おれは娘の、文を待  
つ
- 324 様の船なら、艀が四挺だと、様でないやら、艀が六  
丁
- 325 笠をたもらば、三蓋たもれ、雨の降り笠、日照り笠
- 326 雨の降り笠、いよ日照り笠、又は此方に、通ひ笠
- 327 笠は編笠、お顔は見えず、心辛苦に、物思ふ
- 328 沖に見ゆるは、漁師か月か、月の光か、有難や
- 329 沖の鷗に、ちよと物問へば、おれは立つ鳥、波に問  
へ
- 330 面白いぞや、三条の橋は、上は紵の、森見ゆる
- 331 三条小橋に、待てとは云へど、どこが三条の、小橋  
やら
- 332 船は出て行く、帆かけて馳せる、宿の小娘は、出て

招く

333 旅の装束、仕立ててみれば、よいよ我が殿、旅なれ

て

334 幼けれど、都の薦は、君の小襖に、這ひかかる

335 恋しさに又、ちよと出て見たりや、笠の尖りが、見

え隠れ

336 心拝気や、気がうかうかと、叱る殿御が、ないから

よ

337 今朝の言葉が、齒にはざかりて、楊枝恋しや、桜柳

338 京や大坂に、持つたる妻も、有ると思へば、頼もし

や

339 加茂ぢや加茂ぢやと、今迄思うた、爰は岩倉、かも

ぢやもの

340 文を遣りたや、四条から五条へ、扇折りやの、御影

堂

341 病見たくば、湯の島へござれ、瘡や皮癬の、寄りど

ころ

342 おれは縁無うて、出て行く程に、縁の有る人、来て

ござれ

343 手辺龍野や、唐破風作り、末は遂げまい、神の真似

344 思ひ念ざし、岩さへ通す、是がいがかぎ、世も不思

議

345 今宵一夜の、お手枕ぞや、明日は出船の、波枕

346 様と寝た夜は、枕も要らぬ、互ひ違ひの、お手枕

347 見れば見渡す、竿さしや届く、何故に届かぬ、我が

思ひ

348 相が遠けりや、おもへどならぬ、今は嬉しや、御前

へ

349 様は川上、おりや川下よ、書いて流しやれ、思ふ事

350 様は真紅の、むすばれ糸よ、解けぬ心は、憎うござ

る

351 心掛きやれよ、おや親方へ、月に三度の、御礼日を

352 新茶飲もより、古茶貰うて飲みやれ、いやの新茶や、

こちや知らぬ

353 独り女と、水戸の水は、使ひほされて、出るを待つ

354 昨日けふ迄、水汲んだ女、今は高三屋、蔵の主

- 355 竹と名が付きや、野竹も愛し、忍び夜妻が、竹なれ  
ば
- 356 瘡おこりぶるひに、山椒は毒よ、七十五日の、過ぎる迄
- 357 起きて往なんせ、小田井おだゐの森の、夜明け鳥がらすの、啼なかぬ間に
- 358 音頭おんど出す子が、橋から落ちて、橋の下から、ずんと出す
- 359 黒い羽織うぎが、群鳥むらからすなら、白い浴衣ゆかたは、白鷺しろさぎよ
- 360 様の船ふねやら、神崎かみさき沖に、霞隠かすみかくれに、帆が見ゆる
- 361 親は此の世の、油灯あぶらひ候や、親がなければ、光なや
- 362 とても籠かごらば、清水寺しみずでらに、花の都を、見おろいて
- 363 天の岩戸あまのいわとの、油灯あぶらひ候も、油つけども、火はつかぬ
- 364 小出様こいでさまでは、芳園よしづのの三太さんた、扱あり本もと、南部なんぶ殿どの
- 365 出石いづしめ茜あかねに、諸寄もろよの川、山を照らすは、朝来山あさき
- 366 丹波松茸たんぱまけ、但馬たにまは山椒、丹後伊禰いね鱒ます、名物なぶつぢや
- 367 お江戸戻りか、お色が黒い、麻の布あしなら、晒さらそもの鹿の巻筆まきふで、米子の水で、書いてやるもの、手結文てゆいぶみを
- 369 よいと思へば、欲目よくめかなれど、よいはよいもの、我が殿がどのは
- 370 白は引きがら、野山は地がら、人の娘は、仕立てがら
- 371 心こころばせとて、下されたれど、手にも取るまい、見もすまい
- 372 丹生にぶの間と聞きや、夢にも嫌よ、男とられた、芝山しばやまへ
- 373 三国みくに女郎ぢやうらう衆しゆは、猿猴えんこうの生まれ、足は短うて、手が長い
- 374 暮れるものかや、男の心、さては川の瀬、夜の間にも
- 375 誰か掛かるも、知らぬは女、自在じざい鍵かぎとは、よう云うた
- 376 盆ぼんが来たりやこそ、米の飯めし喰くたれ、かねに八橋やちばしの、鱒ます添そへて
- 377 蟻あまも暑いに、かせぐを見やれ、夏の内から、冬用意
- 378 兎角とがく物事ものごと、せかぬがよいぞ、後の鳥かきすも、先になる
- 379 酒は酒屋さかやに、よい茶は茶屋ちやに、女郎ぢやうらうは都の、島原しまはらに

- 380 お前ついでしやう追従しやうや、陰言かげごと云ふや、お茶を荒らしに、又う  
せた
- 381 ござれ行きましょ、能登のとぎほ鱒買とまひに、鱒はかこつけ、  
女郎買にやうがひひに
- 382 一期いちご連りやらば、それや供せうが、とらば花なりや、  
まづ成らん
- 383 一ななに成相なりあひ、切戸きりどの文殊もんじゆ、三さんに橋立はしだて、磯清水
- 384 忍しのび夜妻よつまの、とい訪まれは、其そのの身来みきもせて、文ふみが来  
た
- 385 伊勢いせへ参まゐらりやば、八やはたへ寄よりやれ、八やはた八幡はちまん、  
絵皮えひだ茸しほき
- 386 伊勢いせよ伊勢いせよと、いせ茸しほきはやす、伊勢いせは茅かやぶき、  
片破かたはぶき
- 387 山家やまが者ものぢやと、里衆りしゆは云やる、色のよい花、山やまに咲  
く
- 388 なんぼ色いろよい、椿つばきの花も、物を思おもへば、色いろがない  
松まつは祝いわひの、ものではあれど、松まつも憂うれいぞや、人待ひとまち  
つは
- 389
- 390 おれおれと此方こなたと、合図あひづのつはり、ござれ高木たかぎの、梅うめを  
折おろ
- 391 死しなば夏死なつしね、あぶ蚊あぶがもなくに、螢火あぶらともす、蟬せみも  
鳴なく
- 392 いとし可愛こひと、云いやるは嘘うそよ、死出ししゆの山路さんぢは、ひと  
り越こす
- 393 薩摩さつま薩摩さつまと、指さいては行いけど、指さいた薩摩さつまにや、妻  
がな
- 394 様さまに逢あふとて、朝水あさみづくめど、水みづは七桶ななおけ、まだ逢あはぬ
- 395 様さまに逢あふとて、篠山ささやま越こえて、露つゆに小褌こぶまが、皆みなぬれた
- 396 陣ちんに行いきても、死しなねば戻かへる、女大事おんなこづまは、産うの道
- 397 忍しのび夜妻よつまに、前髪まへかみもてば、花はなに短冊たんさふ、得えた心
- 398 竹たけの切きり節ふしの、もし溜たまる水みづ、澄すみまづ濁にごらず、出でず  
入いらず
- 399 おれおれと此方こなたと、未遂みすいげたなら、竹たけの二股ふたまた、世よも不思  
議ぎ
- 400 こなた刺鳥さいとり差さ、おりや百舌ももぢの鳥とり、御縁ごゑんござらば、又  
ござれ

- 401 知らぬ他国の、住居すりや殿御、知らぬ事こそ、繁  
うござる
- 402 余りわが身の、辛いにつけて、思ひ出すぞや、親達  
を
- 403 髪を島田に、結はうより女、心島田に、よう持ちや  
れ
- 404 髪も結はずに、さんばい髪で、仕事嫌ひを、する女
- 405 なんぼいはるる、紺屋の虎落、紺の出花も、一盛り
- 406 鬢のそそけは、枕の科よ、曇りない身を、疑ひやる  
見目にや迷はぬ、姿にや惚れぬ、心ばせにぞ、諸事  
迷ふ
- 407 奉公仕やらば、朝起き夜詰め、昼の仕事は、程があ  
る
- 408 連れて往なんせ、播磨の方へ、塩を汲むとも、苦に  
やすまい
- 409 空の星様、かぞへて見れば、九千九つ、八つ壱つ
- 410 人にすぐれた、娘を待てば、背戸に細道、つけられ  
た
- 411 一人娘に、掣取りかねて、やうやう山家の、炭焼き  
を
- 412 嫌な山家の、炭焼きしよより、頭こそげて、鉢ひら  
け
- 413 山田稻こそ、すぎたがよけれ、是の娘は、時過ぎた  
杉や桧木の、匂ひこそよけれ、五月男は、泥くさ  
い
- 414 人に勝れて、利口なも悪い、人がそねくむ、憎むげ  
な
- 415 人の事をば、上げ下げ言やる、なんぼ其の身が、器  
用なとて
- 416 忘れ草がな、一本欲しや、植ゑて育てて、見て忘り  
よ
- 417 豊岡若い衆に、物いふ事は、籠に水いれて、漏るご  
とく
- 418 出石商人は、城山烏、銭も持たずに、かをかをと
- 419 鳥も鳴かぬに、鐘つくお坊、恋の意気地を、知らせ  
たや

- 422 様は立つ波、おれや浮き草で、波にうたれて、磯に  
寄る
- 423 ござりや一度に、どんどと御座る、夜さりや白壁、  
見てござれ
- 424 後世願ふとて、鼻屑を願ふ、いとど我慢に、そへか  
けて
- 425 伽羅の焼きさし、藻塩の煙、膚をもらすな、露ほど  
も
- 426 思ひ出すとは、忘るるからよ、思ひ出さずや、忘れ  
ずや
- 427 三島暦ほど、かき下された、便りいたらば、返事し  
よや
- 428 宵田江原に、あく事ないが、水にあいたよ、寺じた  
の
- 429 奉公仕やらば、喜多垣甚兵衛、水は山から、樋がか  
り
- 430 縁と板橋、はなれの物よ、離れたいぞや、今なりと  
今宵はじめて、御見の契り、嬉し恥づかし、床の内
- 431 今宵はじめて、御見の契り、嬉し恥づかし、床の内
- 432 なんぼ広ても、広谷いやよ、狭いせまどの、八木が  
よい
- 433 大屋出てから、かほ坂越えて、駒を早めて、関の宮  
大屋出てから、たわのかき越えて、夏梅たんぼや、  
ゆるゆらと
- 434 おれは浅黄の、一しほ染よ、濡れて通へど、ある足  
らぬ
- 435 おつな出てゆく、山吹死する、あとに残るは、麻ば  
かり
- 436 たばこ一葉が、千両しやうとままよ、裏の菊女に、  
買うてのましよ
- 437 おれが死んだら、新田たばこで、焼いても、煙管  
卒塔婆に、立ててくりやれ
- 438 雁が喰ひたか、お乞食めされ、今朝も雁汁、二度喰  
うた
- 439 濡れぬさきこそ、露をも厭へ、濡れてから又、兎に  
角に
- 440 二見清水は、底から出るが、様の心も、底からか
- 441 二見清水は、底から出るが、様の心も、底からか

- 442 谷の清水が、尾に出るならば、妻の別れは、すまいもの
- 443 をれた古筆、もし紙なれて、上りたいぞや、上方へ
- 444 一人娘と、もし春の日は、くれるくれるで、まだくれぬ
- 445 およし見るとて、葦で目を突いた、とかくおよしは、目の毒ぢや
- 446 ひとり取りやるか、広田の草を、心あれかし、なぎのねよ
- 447 広い信田しのだの、森にも住むが、夜はこいがな、子の親の
- 448 まるれお大黒、歌はうぞ恵比寿あひす、あひの酌取りしやくや、福の神
- 449 ござりやその辺、ござらぬとても、おれがかたから、手はすらぬ
- 450 通かよや名が立つ、通はにやござる、とかく君様、ないが良や
- 451 縁のない子は、茶山へ遣りやれ、宇治は縁どこ、茶
- 452 親が親なり、世が世であれば、宇治の茶摘みは、す園まどこ
- 453 親にまさりし、子はなけれども、舟木左衛門ふねぎさゑもん、親ま
- 454 縁は異なるもの、太神楽たががらに惚れて、行かざるまい、お伊勢まで
- 455 去年こぞの暦で、のうおれが身は、見捨てられたり、古暦
- 456 紫竹寒竹しちくかんちく、のう唐の竹、末は女郎衆やうらうしゆの、筆の軸
- 457 紫檀黒檀したんくたん、唐木の根より、様の寝声ねこゑが、面白や
- 458 森に妻持ち、野上に住めば、日暮れ烏がらすや、森恐し
- 459 おれと此方こなたと、染めたる中へ、誰が横矢よこやを、入れたやら
- 460 こなたばかりが、照る日か月か、おれが行き先や、闇の夜か
- 461 親にまさりし、子はなけれども、舟木左衛門ふねぎさゑもん、親ま
- 462 親は子と云うて、尋ねもするが、親を尋ぬる、子はさり

持たぬ

- 463 油竹とや、世は逆様に、親は問はいで、子を問やる
- 464 出石宗鏡寺の、沢庵様は、現世からして、生き仏
- 465 心を任やらば、心に問やれ、心良い時、すべて良し
- 466 灸で病が、直りはせねど、灸は病を、出さぬもの
- 467 親の諫めは、病に灸よ、心静めて、よう聞きやれ
- 468 針は当座の、病をおさゆ、未を遂げては、利かぬもの
- 469 薬飲みやらば、大事にかけて、煎じ水にも、気をつけやれ
- 470 医者に上手と、下手とはないぞ、とかく病人、運次第
- 471 地獄極楽、此の世にもある、とかく心に、問うてみやれ
- 472 春は見事に、咲く梅の花、秋は皺よる、梅ぼうし
- 473 水に成りたや、化粧の水に、諸国娘の、手に渡り
- 474 締めて鳴るのは、太鼓や鼓、なんぼ締めても、わしやならぬ
- 485 染めてくやし、似せ紫よ、もとの白地が、ましぢ
- 484 歌は真実、所で変はる、付けて歌やれ、字はひとつ
- 483 紗綾の丸紵、たすきに掛けて、是の表で、金量る
- 482 山椒胡椒より、お手まやかるて、身をば豊かに、持ちたがる
- 481 闇の夜に来て、打たりよとままよ、様に命は、惜しからん
- 480 月夜なら来い、闇なら来るな、闇の夜に来て、打たれるな
- 479 無しや
- 478 紫竹小竹の、節よんでみれば、節は九つ、よは七つ
- 477 腹の立つ時、背戸へ出て見やれ、紫竹小竹の、節よ見やれ
- 476 団子串にさいて、待つ夜は来いで、貧乏男や、喉すばり
- 475 おれが思ふ様に、浮世がならば、水に絵を書き、あそぼもの

- 495 恋しゆかしも、只今ばかり、逢はぬ昔が、あるもの
- 494 有為うゐの転てん変へん、身みにならほせて、我わがと燃もやして、身みを  
 仏ぶつ焦あせがす
- 493 きたる如ごとくに、心こころを持もてば、ぢきに此こゝの身みが、生なき
- 492 生うまれ来きたりし、古いにしへ問とへば、何なにも思おもはぬ、此こゝのこ  
 ころ 島しまへ
- 491 是こゝのおばおばの、事ことではなないが、おばおばやりたたや、広ひろ
- 490 思おもひ切きれとは、死しねとの事ことか、死しななにや思おもひの、根ね  
 は切きれぬ
- 489 達たつ磨ま大師だいしは、九く年の座ざ禪ぜん、夢ゆめの浮う世せに、損とんぢやもの
- 488 とかく女には、自じ在ざいの鉤かぎで、あがり下さがりは、殿どの次第だい
- 487 君きみに逢あふ夜よは、適あた々ななれば、締しめつ緩ゆるめつ、放はなしや  
 らん（よもすがら）
- 486 出い石し七なな町まち、広ひろいやうで狭せまい、我わがに似に合あひたる、妻つまも  
 なや やもの
- 496 過か去こも未み来きも、只ただ今いまばかり、心こころとめとめずに、只ただ歌うたへ  
 を
- 497 心こころとめとめずば、浮う世せはああららじ、何なにもなないこそ、生なき如ごとく
- 498 来き むかし思おもへば、夕ゆふべの夢ゆめよ、兎う角かく思おもへば、みみな嘘うそぢ  
 や
- 499 人ひとに敵かたみは、ももと無ないものよ、是こゝ非ひの争まひ、己おのがななす
- 500 我わがとつつくりし、心こころの鬼おにが、責せめて苦くるしむ、身みの科かを  
 寺てらへ参まりて、鼻ひな屑くを願ねがふ、いとど我わが慢まんに、そへかけ  
 て
- 502 やすく養やしなふ、浄じやう土どは愛あいよ、五ご万まん五ご万まんに、おおくもななや
- 503 惜おぼしや欲ほしやと、思おもはぬ故ゆゑに、今いまは世よ界かいが、我わがが物もの  
 ぢや
- 504 奇き妙めう不ふ思し議ぎは、一ひとつも無ないぞ、知しららにや世よ界かいが、み  
 な不ふ思し議ぎ
- 505 悪あくを嫌きらへば、善ぜんぢやと思おもふ、嫌きらふ心こころが、悪あくぢやもの
- 506 君きみを思おもへば、結むすばれ糸いとの、とけぬ心こころが、辛くるごござる
- 507 四よ十じぢや四よ十じぢやと、思おもふたは違ちがひ、三さん十じ九くぢやも

- の、花ぢやもの  
 508 思ひ出さずに、忘れてをれば、来ては思ひを、又か  
 きやる  
 509 なんぼ物の下の、博勞ぼくろうの子でも、心器用なりや、庄  
 屋の嫁  
 510 なんぼ隠ひそいても、うどん屋の娘、顔に粉がつく、麦  
 の粉が  
 511 伽羅きやらの焚たきさし、藻塩けぶりの煙、水も漏らさず、露ほど  
 も  
 512 手近てぢかきと里ぢやと、皆い云やれども、猿と歌舞伎は、山家やまが  
 なれ  
 513 死出の山路を、越えぬる時は、常に頼まぬ、弥陀恋  
 し  
 514 奉公しよならば、小所こじころいやよ、嫌いやな小所、名は立ち  
 て  
 515 真しんの深山みやまの、ひとどい鳥からどり、ござれとまろよ、此の森  
 に  
 516 鹿の巻筆、米子よなごの水で、書いて流しやれ、痴話を  
 517 踊りおどらば、御寺の庭で、おどる片手に、後生願  
 へ  
 518 今宵は暮の、もう十五日、遊ばせ給へ、釈迦如来  
 519 歌も念仏も、碁も双六も、髪に油も、若い時  
 520 様に怨みは、三島の曆、云いうて何しよぞ、添つはぬか  
 ら  
 521 月の八日と、日の九日は、親の日で候、二親の  
 522 頭かぶこさげて、白いもの着せて、又と帰らぬ、旅をさ  
 しよ  
 523 物を知らずば、小歌を聞けよ、歌は苦界くがいの、理を分  
 ける  
 524 陰ぢや陰ぢやと、思うたりや日向ひなた、陰の日向へ、回ま  
 るもの  
 525 瀬田の唐橋、太田の渡し、碓氷峠うすひらたけか、無かよかる  
 526 人はよけれど、兎に角我は、破れ車や、わが悪い  
 527 思うて想はぬ、振しよとすれば、思うて思はぬ、振  
 やならぬ  
 528 心大和に、身は津の国に、忘れまいぞや、彼の事を

- 529 おれは此の町の、軒端の雀、声で聞き知れ、名を呼ぶな
- 530 さてまいとしや、芝田のお客、いつも夜で来て、夜で戻る
- 531 おれは此の町に、用はなけれども、顔が見たさに、逢ひに来た
- 532 恋は今町、つらいはみまた、なさけかけるは、出雲崎
- 533 三俣出るときや、涙で出たが、弥彦回れば、懺悔する
- 534 なんぼ思うても、思うた振やならぬ、碁盤面や、目が繁や
- 535 思ふまいとは、のや思へども、回りつがひに、思ひ出す
- 536 思ひ出いては、夜も寝られずや、そ云て門にも、ただねずや
- 537 こなた思ひに、目を泣きはらし、涙座頭の、坊にならうとした
- 538 俄か座頭に、成りたかなりやれ、琴や三味線、買うてまじよ
- 539 変はるまいとの、二世迄かけて、結び合はせし、袖と袖
- 540 松の葉越しの、磯辺の月は、千歳経るとも、かはるまい
- 541 幾夜ねざめの、涙の淵瀬、波のうねうね、うき枕
- 542 人にかかると、思へば無益、五尺たらずの、身にかかる
- 543 鮎は瀬に住む、鳥木にとまる、人は情の、下に住む
- 544 大工職人に、目かけな女、笠を手に持ち、さらばやと
- 545 あけて見たぞや、二見の浦で、様の文箱、そこ知らぬ
- 546 一期連りよとの、起請迄書いて、様の一期は、はや来たか
- 547 人の振見て、我が振直せ、二度と見られぬ、振をする

- 548 親が親なり、世が世でならば、人のかまどに、まは  
るまい
- 549 一度二度さや、二度三度迄、天の編笠、のがれまい
- 550 おれは野に咲く、主ない花よ、散るを哀れと、思し  
召せ
- 551 笠を着たのが、清十郎であれば、お伊勢参りは、皆  
清十郎
- 552 龍田川には、紅葉を流す、わしは君故、名を流す
- 553 おれと此方は、硯の墨よ、誰が水さす、名を流す
- 554 酒のさの字の、酒屋のさの字、飲んで明かしの、色  
に出る
- 555 鶴の盃、おさへて亀よ、足を揃へて、稚児の舞
- 556 咲いて悔しの、千余の椿、人も通はぬ、山中に
- 557 同じ従兄弟に、傘さしかけて、ござれ言葉は、無益  
なれ
- 558 うぐひすはまた、竹から育つ、竹は氏神、鶯の  
や  
様を思へば、飛び立つばかり、籠の鳥かや、恨めし
- 560 茜おもがひ、尺ある中は、どこへ出いても、百廿  
匁
- 561 竹の切り節の、その溜り水、澄まず濁らず、出す入  
らず
- 562 若い時には、歌でも歌うて、忍ばせたもの、忍だも  
の
- 563 萩の柴折に、牡鹿が鳴けば、いつもあしたに、時雨  
する
- 564 刀差いたも、髪結うた振も、殿に似よかし、腹の子  
も
- 565 たばひ過ぎれば、夏牡丹餅は、置けば置くほど、毛  
が生える
- 566 小菜を摘むやら、菜を洗ふやら、籠が漏るやら、名  
を流す
- 567 父の金玉、瓢箪かと思つて、すでに粟種、入れおつ  
た
- 568 ねても寝飽かず、添うても飽かず、路次の唐松、ね  
にあかぬ

569 備前播鉢すぢばち、落とせば割れる、兎角まつへやれ、我が

娘

570 おれは枯れ木の、もし一の枝、けふはあれども、明

日知れぬ

D おたふく女郎粉引歌（略称：女

- 1 天ぢや天ぢやと、皆様おしやる、てんのがめも、  
いやでそろ
- 2 文の数々、恋焦がれても、わしは当座の、花はいや
- 3 数の男の、思ひもこはい、みめの好いのも、気の毒  
ぢや
- 4 器量好しめと、誉めそやされて、男ぎらひの、独り  
ねを
- 5 命取りめと、皆様おしやる、わしは命は、とらぬも  
の
- 6 那須の与市は、箭さきで殺す、おふが日本で、人殺  
す
- 7 数の殿子は、限りもないが、わしがいとしは、只独  
り
- 8 婆々が粉歌は、面白かるが、ふくがしらべは、知り  
やるまい
- 9 知音どしなら、歌ふもよいが、やばな御客にや、遠  
慮しや
- 10 歌をうたへば、殺すとおしやる、なんの殺すに、女  
の身で
- 11 女郎の誠と、たまごの四角、みそかみそかの、よい  
月夜

E 主心お婆々粉引歌（略称…婆）

- 1 有難いぞや、天地の御恩、あつささむさの、程まで
- 2 夜と昼とも、なうてはならぬ、ひるは働く、夜は休む
- 3 雨露の御恩で、五穀もみのる、すゑの野山の、草木まで
- 4 君の御恩は、山より高い、賤がわら屋の、果て迄も
- 5 繁昌召されよ、万代までも、風に草木の、なびく様に
- 6 忘れまいぞよ、御主の御恩、遠きあの世の、後迄も
- 7 親の御恩は、海よりや深い、恩を知らぬは、犬猫ち
- 8 孝行する程、子孫もはんじやう、おやは浮世の、福や
- 9 心短気な、殿御の癖に、主の先途にや、遁げ走る
- 10 忠と云ふ字を、よくよく見れば、外へ散らさぬ、此の心
- 11 五尺余りの、からだは持てど、主心なければ、小童ぢや
- 12 武芸武術も、第二のさたよ、兎角主心が、おもぢやもの
- 13 主心なければ、空き屋も同じ、きつね狸も、入り代はる
- 14 周の文武の、太公望が、云うておかれた、名言がござる
- 15 武家の大事の、三略の書に、驚悲乱りに、起こるはどうぢや
- 16 武士に主心の、定まらぬ故、主心定まる、修行しや
- 17 弓は鎮西、八郎殿よ、鎗は真田よ、太刀打ちや九郎

- 18 たとひ此等を、欺く人も、主のころは、先途の時  
に、主心なければ、腰ぬける
- 19 主心至善、二つはないぞ、常に正しき、此の心
- 20 唐の大和の、物知りよりは、主心定まる、人が好い
- 21 武士を絹布で、食はせておくは、主の先途の、一小口
- 22 多芸多能も、先づさしおいて、主心定まる、場所を  
知れ
- 23 主心至善、定まる時は、持斎持戒も、外にやない
- 24 有難いぞや、主心の徳は、太刀や剣の、刃も立たぬ
- 25 弓も鉄炮も、届かぬからに、敵と云ふ字は、更にな  
い
- 26 空も月日も、海山かけて、土も草木も、皆主心
- 27 神とまります、高間が原も、五欲三毒、ないところ
- 28 民を新たに、するとは云へど、至善定まる、迄の事
- 29 出家沙門も、高位も智者も、主心なければ、皆民  
ちや
- 30 宮もわら屋よ、わら屋も宮よ、主心一つが、潮さか  
や
- 31 上下方民、主心があらば、治めざれども、世は万歳  
ひ
- 32 嬉し目出度や、主心の徳で、うたぬ隻手の、声もき  
く
- 33 悟り迷ひを、口には説けど、主心居らにや、なんぢ  
ややら
- 34 袈裟や衣で、見かけは好いが、主心すわらにや、ひ  
よんなもの
- 35 四国西国、めぐるも好いが、主心なければ、むだ道  
よ
- 36 主心丹田、気海にみつりや、仙家長寿の、丹薬よ
- 37 丹を錬るには、鍋釜要らぬ、元氣丹田に、居るまで
- 38 不死の丹薬、望みな人は、つねに気海に、心おけ
- 39 虚空界より、長寿な者は、気海丹田に、住む主心
- 40 気海丹田に、主心が住めば、四百四病も、皆消ゆる
- 41 主心お婆々は、いくつになりやる、わしは虚空と、  
おないどし
- 42 虚空おやちは、死にやると儘よ、わたしやいつでも、

- 此の通り  
 43 山河大地を、我が子に持てば、わしにや不足な、事はない  
 44 武士の身の上や、覚悟がおもちや、生きて一度、死ぬが良  
 45 生きて死ぬるは、最易い事よ、主心お婆々に、出逢うて問へ  
 46 主の御恩で、仕立てたからだ、喧嘩などする、不覚者  
 47 武士は臆病も、忠義の一つ、一度主君に、上げおくからだ  
 48 我が身ながらも、自由にやならぬ、大事大事と、守りましょ  
 49 内証つき合ひ、傍輩どしにや、狗と云ふとも、腹立つな  
 50 主の為なら、無間の底も、修羅も紅蓮も、辞退せぬ  
 51 命限りに、切り込む所存、是が勇士の、常の住  
 52 主心お婆々は、どこらにござる、気海丹田の、裏店
- かりて  
 53 気海丹田は、どこらの程ぞ、臍の辻から、二町下  
 54 臍のぐるわに、気が聚まれば、とりも直さぬ、大還丹よ  
 55 最も貴とや、還丹徳は、須弥も虚空も、碎けて微塵  
 56 十方法界、実相無相、見られてもなく、見てもない  
 57 生死涅槃も、きのふの夢よ、煩惱菩提の、迹もない  
 58 墮して苦しむ、地獄もないが、往いて楽しむ、浄土もないぞ  
 59 此に一期の、大事がござる、真正得悟の、知識に逢はにや  
 60 世間多少の、修行者共が、三二十年、難行苦行  
 61 思ひ計らず、此の場に到りや、もはや悟つた、大隙  
 62 あいた  
 62 おらは是から、心の儘ぢや、殺生偷盗も、氣遣ひ  
 63 ないぞ  
 63 五逆十悪、好いなくさみよ、因果むくいも、無いか

らと

64 邪見断無の、我儘悟り、よその見る目も、恐ろしや

65 励み求めし、見性の法は、いまは地獄の、種とな

66 本の主心は、皆消え失せて、魔縁天狗が、入り代は  
る

67 過去の縁因、拙い故に、終に真正の、明師に逢は  
にや

68 悟後の修行の、奥義も知らぬ、本の凡夫が、いつそ  
まし

69 今は澆末、法滅の時、邪見邪法の、起こるも道理

70 支竺扶桑の、三国ともに、真の禅宗は、地に落ち果  
てて

71 殊に怪しき、邪法がござる、曹洞黄檗、済家もとも  
に

72 善知識ぢやと、呼ばるるわろも、人に対する、説法  
を聞けば

73 真正向上の、禅法と云ふは、座禅観法に、用事も

ないが

74 仏経祖録も、さらさら要らぬ、木地の儘なが、真  
の仏

75 仏求むりや、仏に迷ひ、法を求むりや、法縛を受く

76 仏果菩提も、夢中の夢よ、生死涅槃も、飛ぶ鳥のあ  
と

77 好きも悪しきも、皆打ちすてて、木地の白地で、月  
日を送れ

78 障りや濁るぞ、溪河の水、問ふな学ぶな、手出しを  
するな

79 是が真の、禅法だ程に、見ぬが仏ぞ、知らぬが神よ

80 是を聞くより、彼の大勢の、無智や懶墮の、役座の  
やから

81 扱も貴い、教化でござる、もはや是から、我々ども  
は

82 おもひ寄らざる、生き仏ぢやぞ、くふてはこして、  
寝るばかりぢやと

83 並び睡るを、脇より見れば、大勢並んで、櫓を推す

- 84 如何成り行く、身の果てやらん、仏法破滅の、大前  
 表よ  
 如何成り行く、身の果てやらん、仏法破滅の、大前
- 85 悟後の修行とは、どの様な事ぞ、おばば知つてなら、  
 歌うてみやれ
- 86 是は大事を、御尋ねそうよ、五百年來、すたれた法  
 ぢや
- 87 諸善知識も、知らぬが多い、悟後の大事は、即ち菩  
 提
- 88 昔春日の、大神君の、解脱上人に、御告げがござる
- 89 凡そ俱盧孫、仏より以來、たとひ天下の、智者高僧  
 も
- 90 菩提心なきや、皆々魔道、菩提心とは、どうした事  
 ぞ
- 91 山ん婆女郎も、歌うておいた、上求菩提と、下化衆  
 生なり
- 92 四弘の願輪に、鞭打ち当てて、人を助くる、業を  
 のみ
- 93 人を助くにや、法施がおもぢや、法施や万行の、  
 上もりよ
- 94 有難いぞや、法施の徳は、たとひ仏口も、尽くされ  
 ぬ
- 95 法施するには、見性が肝要、見性はかでは、乳房  
 が細い
- 96 細いちぶさぢや、好い子は出来ぬ、よい子なければ、  
 跡絶える
- 97 隻手音声、もとめ得ておいて、此で休すりや、断  
 見外道
- 98 次に千重の、荊棘叢を、残る事なく、皆透過せよ
- 99 お婆々死んでは、何国へござる、とめて給うれよ、  
 帆かけ舟
- 100 四十九曲り、細山路を、直ぐに通らにや、一分立た  
 ぬ
- 101 風の色香は、どの様な物ぞ、次に夢中の、祖師西來  
 意
- 102 最後万重の、関鎖がござる、是が禪者の、むなふ

- く病ぞ
- 103 関鎖なければ、禅宗は絶える、命かけても、皆透過せよ
- 104 昔黄檗、運大禅師、常に嗟悼し、惜しませ給ふ
- 105 扱も牛頭山、宗融大師、常に横説、堅説はすれど
- 106 未だ向上の、関鎖を知らぬ、関鎖なければ、禅ぢやない
- 107 鯉魚も龍門、万重を越える、野狐も稻荷の、鳥居は越すぞ
- 108 流石禅宗の、めしやくひながら、関鎖とほらにや、分立たぬ
- 109 祖山寿塔に、五祖牛窓橋、乾峯三種に、犀牛の扇子
- 110 白雲未在に、南泉遷化、倩女離魂に、婆子烧庵よ
- 111 是を法窟の、爪牙と名づけ、又は奪命の、神符とも云ふ
- 112 此等逐一、透過の後に、広く内典、外典を探り
- 113 無量の法財、集めておいて、三つの根機を、救はにやならぬ
- 114 三つの根機の、其の中々に、真の種草を、求むるがおも
- 115 真の種草が、真実欲しか、法窟の牙と、奪命の符と
- 116 鳥の両羽を、挟むが如く、是がなければ、種草は出来ぬ
- 117 是が即ち、仏国の因、とりも直さず、菩薩の不行(菩提の不行)
- 118 たとひ虚空は、尽きやると儘よ、こちらの弘願は、果てしやない
- 119 頼み入るぞよ、千歳の後も、ひとりなりとも、当家の種草
- 120 婆女が心を、よく参究せば、祖師の真風は、地におちやせまい
- 121 油断召さるな、おまめでござれ、ばばは是から、御暇申す

## F 春遊興 (略称：春)

- 1 こなた思へば、照る日も曇る、冴えた月夜も、闇と  
なる
- 2 故郷くきょうを隔てて、住居すまひをすれば、烏啼からすなくさへ、気にか  
かる
- 3 なんぼ口説いても、戸板に豆よ、いつそあんな奴は、  
死ねばよい
- 4 君を待つ夜は、一夜ひとよが千歳ちとせ、逢うて帰れば、千里も  
一里
- 5 竹に雀は、品よくとまる、止めてとまらぬ、我が思  
ひ
- 6 吉田通れば、二階からまねく、しかも鹿かの子の、振
- 7 ここは箱根の、山中なれば、文を遣るにも、硯紙は  
袖が  
持たず、無事で下ると、言うてたもれ
- 8 咲いた桜に、何故駒つなく、駒が勇めば、華が散る
- 9 富士の白雪、朝日で解けて、解けて流れて、三島に  
落ちて、三島女郎衆の、化粧の水
- 10 高い山から、谷底見れば、お万可愛や、布を晒す、  
なう布晒す
- 11 たばこ一葉が、千両しやうと儘よ、君が寝煙草たばこ、絶  
やしやせぬ
- 12 来いで来いでと、待つ夜は来いで、待たぬ夜に来て、  
外そとに立ち、うろろうするわいな
- 13 わしが勤めと、帆掛けた船は、人目は楽なやうで、  
苦でござんす、ほんほに苦しき、勤めぞやと
- 14 こなたは浜の、御奉行様、潮風に揉まれて、色の黒  
さよ、ナアへ
- 15 なるとならぬは、目元で知れる、今の目元は、なる  
目元、逢ひたいことぢやいな

- 16 花は折りたし、木末は高し、心尽くしの、我が思ひ  
 17 心細かに、小間物を売れば、佐渡の金山、ここにあら  
 18 七里通うて、帯まで解いて、枕寄しよ間に、夜が明  
 けた  
 19 箱根八里は、馬でも遣るが、越すに越されぬ、大井  
 川  
 20 そなた百まで、わしや九十九まで、共に白髪しろがみの、生  
 ゆるまで  
 21 千重の白雲、隔てて住めば、善しと悪しとに、父母  
 様を、思ひ出しては、泣き暮らす  
 22 後の世を当て、心中すれど、業ごよに引かれて、別れて  
 行くな、魂ひとり、たどり泣く  
 23 大磯の虎は、石となり、苔むして、哀れさに、泣か  
 ぬ者なし、ナアエ  
 24 川を隔てて、情人おせせを持ってば、船よ船よが、気にかか  
 る  
 25 今宵は此処こゝに、草枕、明日の夜は、吉原の、女郎の  
 手枕たまぐさ、ナアへ  
 26 野道畦道のせちみち、いろある君と、二人行くととて、徒名あな立つ  
 27 その身その身の、為なすべき事を、為なしてあらばや、  
 寝て待て果報、益なき思ひを、費すな  
 28 余り嘆くな、浮世は車、廻り廻りて、又廻り合ふ  
 29 君を待つ夜は、とりわけ長い、ぢやないかいな、首  
 尾なる夜の短かさ  
 30 積もる話も、まだせぬ中に、明けの烏からすが、告げ渡る、  
 憎らしや、憎らしや  
 31 君に逢ふとて、天神様に、願ねが掛けて、梅うめを断ちま  
 す、命齒いのちの歯の身一期  
 32 何を恨むぞ、川中柳、誰も思ひは、同じこと  
 33 君の御家は、目出度い御家、鶴と亀とが、舞ひ遊ぶ  
 34 御代は目出度や、若松様よ、枝も栄えて、葉も茂る  
 35 此の世ばかりか、後の世も、一つ蓮の、華に寝ん  
 36 ほのぼのと、明石の浦の、朝霧に、島隠れ行く、船  
 をしぞ思ふ  
 37 これやこの、ゆくもかへるも、別れては、知るも知

- らぬも、逢坂の関  
の下の露
- 38 欺けとて、月やは物を、思はする、かこち顔なる、  
我が涙かな
- 39 山寺の、春の夕ぐれ、来て見れば、入相の鐘に、華  
ぞ散りぬる
- 40 寂しさに、宿を立ちいで、詠なむれば、いづくも同じ、  
秋の夕ぐれ
- 41 津の国の、難波の春は、夢なれや、芦の枯れ葉に、  
風わたるなり
- 42 田子の浦に、うち出で見れば、真白なる、富士の高  
根に、雪は降りけり
- 43 東風吹かば、にほひおこせよ、梅うめの華、あるじなし  
とて、春な忘れそ
- 44 都をば、霞とともに、出でしかど、秋風ぞ吹く、白  
河の関
- 45 あひ見ての、後の心に、くらぶれば、昔は物を、思  
はざりけり
- 46 吉野川、その水上みなかみを、たづぬれば、葎むぐらのおくの、苔
- 47 秋の田の、かりほの庵の、苔こもはあらみ、我が衣手ころもては、  
露にぬれつつ
- 48 春すぎて、夏来にけらし、白妙の、衣ほすてふ、天  
のかぐ山
- 49 春立つと、いふばかりにや、み吉野の、山も霞みて、  
今朝は見ゆらん
- 50 月もかけ、華も散りぬる、世の中と、思ひながめて、  
南無阿弥陀仏
- 51 さざなみや、志賀の都は、あれにしを、昔ながらの、  
山桜かな
- 52 瀬を早み、岩にせかるる、瀧川の、われても末に、  
逢はんとぞ思ふ
- 53 君がため、惜しからざりし、命さへ、ながくもがな  
と、思ひけるかな
- 54 風吹けば、沖津白浪、龍田山、夜半にや君が、ひと  
り行くらん
- 55 世の中を、何にたとへん、朝ぼらけ、漕ぎ行く船の、

あとの白波

56 山里に、浮世いとはん、友もがな、悔しく過ぎし、

昔かたらん

補1 天の戸を、開くれば霞む、高松の、枝も鳴らさぬ、

御代のはつ春

補2 餅搗かず、煤すす払ひせぬ、我が耳も、けさは聞こゆる、春風の音

補3 酒を飲み、茶は茶はばなし、春の日の、暮れて短

く、思ふ仲よし

補4 箸はしかけぬ、さきから見るに、打つ人の、品の良い

蕎麦そば、切り目正しき

補5 面白く、うち見て暮らす、棋上根まじやうこん、さして困る

を、何と為す君

## G 絵本倭詩経 (略称…絵)

- 1 朝は起きては、父母様拜め、爹媿に賢りし、神はなし
- 2 孤は、目かけて遣りやれ、爪を蔽えて、門にたつ
- 3 酒は飲みたし、女郎とは寝たし、是で御寺が、持たりよかや
- 4 金の威光も、ゆふべが限り、死出の山路は、淋しから
- 5 腹の立つをりや、いも帰のか出よか、身をば投げうかと、思ひ候
- 6 広き世界に、身の置き所、なきが心の、悪しきから
- 7 死ぬる命は、悟しはないけれど、後で歎きの、親いと
- 8 御前追従に、ものいふ人は、陰で人ごと、毀らしやる
- 9 人のよかれと、いふ諫めごと、耳に入れぬぞ、おろかなり
- 10 竹の丸橋、様となら渡ろ、落ちて死ぬると、もろとも
- 11 妻は有りや持つ、無ければ持たず、父母は錦の、肌守
- 12 思案橋から、女肆が見える、往こか帰ろ歟、しあん橋
- 13 実つもれば、たのまむとても、神は頭に、やどらしむ
- 14 にくいにくい、其の一ねんは、釘を打ちましよ、河の瀬に
- 15 年はよりても、こころはよらぬ、寄らぬ心の、欲世かい

- 16 人に負けじと、思ふ心こそ、やがて我が身の、あだとなる
- 17 物をいふまい、ものいうた故に、父は長柄の、人ばしら
- 18 ものに稜あれば、さはりてわるい、兎角ころを、まろまろと
- 19 髪を島田に、結はうより女子、心しまだに、持て女子
- 20 酒は飲みたし、酒銭は持たず、酒旗を、見るとほる
- 21 鉦を敲いて、仏にならば、鍛冶の職こそ、ほとけなれ
- 22 けはひけしやうに、べにかねつけて、作り声する、はでいもの
- 23 眉目がよいとて、心が人か、大坂人形で、面ばかり
- 24 博奕やうたしやる、大酒飲みやる、いかに御器量が、よけりやとて
- 25 食ふやくはずに、金ためおきて、まだも欲しがる、
- 26 有財餓鬼  
様は医者して、人たすきやるが、小野こまちは、人ごろし
- 27 心長う持ちや、たん気は損気、塵がつもりて、山と  
なる
- 28 帰のか嬉しや、あの山越えて、都まさりの、故郷へ
- 29 伊勢のあこぎの、浦ひく網も、度がかさなりや、あらはるる
- 30 五月雨ほど、恋したはれて、今は秋田の、おとし水
- 31 さまよくやむな、うき世は車、いのち長けりや、めぐりあふ
- 32 父母といふ字が、此の世にあらば、鉄の草鞋で、尋ねやうもの
- 33 花は凋れて、春又さくぞ、爹嬢の先途は、いまばかり

## H 山家鳥虫歌 (略称：山)

## 山城

- 1 めでためてたの、若松様よ、枝も栄える、葉も茂る
- 2 今年御上洛、上様繁昌、花の都は、なほ繁昌
- 3 稲は刈り取る、穂に穂が咲いて、どこに寝さしよぞ、  
親二人
- 4 親子妻とも、田を植ゑしまひ、神に千歳の、種を待つ
- 5 来いと誰が言うた、笹原越えて、露に小松は、みな濡れた
- 6 ござるその夜は、厭ひはせねど、来るが積もれば、  
浮き名立つ
- 7 わしは小池の、鯉鮒なれど、鯰男は、いやでそろ
- 8 忍ぶ道には、粟黍植ゑな、あはず戻れば、きび悪い
- 9 こなた思へば、千里も一里、逢はず戻れば、一里が千里
- 10 暇くだされ、後日は待たぬ、明日は黒日で、日が悪い
- 11 恋に焦がれて、鳴く蟬よりも、鳴かぬ蛍が、身を焦がす
- 12 飲みやれ大黒、歌やれ恵比須、ことにお酌は、福の神
- 13 幾世長かれ、この殿の、めぐみ育ちて、若菜摘む
- 14 様はさんやで、宵々ござる、せめて一夜は、有明に
- 15 高い山には、霞がかかる、わしはこなたに、目がかかる
- 16 繻子の袴の、褰とるよりも、様の機嫌の、とりにくさ
- 17 船は出て行く、帆かけて走る、茶屋の女子は、出て招く

- 18 招けど磯へ、寄らばこそ、思ひ切れとの、風が吹く  
 19 様の寝姿、今朝こそ見たれ、五月野に咲く、百合の花  
 20 鉤は投げかけ、播すらば落ちよ、心つれなや、山桃よ  
 21 こなた思へば、野もせも山も、藪も林も、知らで来た  
 22 いとし殿御の、目許のしほを、入れて持ちたや、鼻紙に  
 23 恋といふ字が、ありやこそ来たれ、鳥羽の恋塚、秋の山  
 24 さてもよい子や、黒木売りの娘、恋の重荷か、かつぎつれ  
 25 山に咲く花、嵐が毒よ、わしは君様、見るが毒  
 大和  
 26 千代の松が枝、三笠の森に、朝日春日の、御影松  
 27 様の暇の、吸ひ付け煙草、恋が増すやら、火がつかぬ  
 28 梅と桜と、吉野へ行たら、梅は酸いとて、戻された  
 29 東山のは、雪ではないか、あれが雪かや、桜花  
 30 一に当麻の、糸掛桜、奈良の都は、八重桜  
 31 ござれ初めたら、様来初めたら、道の小草も、枯るほど  
 32 吉野川には、棲むかよ鮎が、わしが胸には、こひがすむ  
 33 わしは山雀、餌に落とされて、明障子の、内に棲む  
 34 人にも言や、油の雫、落ちて広がる、どこまでも  
 35 若い女の、願かけるのは、神や仏も、をかしかろ  
 36 様に恨みは、三島の曆、言うてなにしよに、添はぬから  
 37 花の盛りを、こなたでしまった、どこを盛りと、暮らそやら  
 38 昨夜呼んだる、花嫁御、今朝は無間の、鐘をつく  
 39 花は一枝、折り手は二人、わしはどちらへ、靡こやら

- 40 一人山道、もの凄すこござる、はやく声出せ、時鳥ほととぎす
- 41 情ないぞや、今朝立つ霧は、帰る姿を、見せもせて
- 42 雉きり子の雌鳥めんどり、薄すすきのもとの、夫つまを尋ねて、ほろろ打つ
- 43 月夜影にも、干したい袖を、濡らしたよまた、絞る  
ほど
- 44 様よあれ見よ、あの雲行きを、様と別れも、あのこ  
とく
- 45 思ひ直しは、ないかよ様よ、鳥は古巢へ、帰らぬか
- 46 人目思はず、人さへ言はにや、織りて着しよぞや、  
立たち縞しまを
- 47 添すうて添すひ飽く、殿御もあるに、添すはで思ひの、増  
すも有り
- 48 お月様さへ、恋ぞよめさる、ここで待てとの、雲陰  
に
- 49 蝶よ胡蝶よ、菜の葉にとまれ、とまりや名がたつ、  
浮うき名なたつ
- 50 はやる簪かんざし、髪かたちより、直すぐな心が、うつくしい
- 51 君は八千代に、いはふね神の、あらぬかぎりは、朽  
ちもせん
- 52 今年世の中、稲刈りそめて、神と君とに、重ね餅
- 53 山家やまがなれども、我が故里は、柴の庵も、なつかしや
- 54 山家山家と、なしげにおしやる、色のよい花、山に  
咲く
- 55 親が片親、ござらぬゆゑに、人も侮あやりや、身も痩せ  
る
- 56 人は羨けなりや、咲く花なれど、我は木蔭の、しをれ  
ぐさ
- 57 様とわしとは、山吹育ち、花は咲けども、実はのら  
ぬ
- 58 富士の裾野の、一本薄ひととすず、いつか穂に出て、乱れ合  
ふ
- 59 人が言ひます、こなたのことを、梅うめや桜の、とりど  
りに
- 60 人の言ひなし、北山時雨しぐれ、曇りなき身は、晴れての  
く
- 河内

- 61 わしは谷水、出ごとは出たが、岩に堰かれて、落ち合はぬ
- 62 なにを嘆くぞ、川端柳、水の出ばなを、嘆くかや
- 63 五月雨ほど、恋しのばれて、今は秋田の、落とし水
- 64 梅は匂ひよ、桜は花よ、人は心よ、振りいらぬ
- 65 雨の降り出に、名が立ちそめて、雨は止めども、名は止まぬ
- 66 おもしろいぞや、今咲く花は、後の散り端は、知らねども
- 67 人のことかと、立ち寄り聞けば、聞けばよしない、わしがごと
- 68 阿波の鳴門に、身は沈むとも、君の言なら、背くま
- 69 恋の山吹、なさけの菖蒲、秋の枯れ草、しをれ草
- 70 様とわしとは、うちごみ柳、浮けど沈めど、もろとも
- 71 思うて恋して、叶はぬ時は、稲の葉結び、してみや
- 72 こなた思うたら、これほど瘦せた、二重回りが、三重回る
- 73 一夜落つるは、よも易けれど、身より大事の、名が惜しい
- 74 暇ぢやというて、挿櫛くれた、心とけとの、解櫛を
- 75 飽きも飽かれも、せぬ仲なれど、暇やります、親ゆゑに
- 76 鐘が鳴るかや、撞木が鳴るか、鐘と撞木の、間が鳴る
- 和泉
- 77 千歳に余る、しるしとて、君が代を経る、春の松が枝
- 78 こなた百まで、わしや九十九まで、髪に白髪、生ゆる迄
- 79 ひよひよと、鳴くは鶴、鳴かぬは池の、友にをし鳥、連れて行く
- 80 七つさがりて、田の草取れば、のぼの露かや、涙かや

- 81 声はすれども、姿は見えぬ、君は深山の、きりぎりす  
す
- 82 様は羨なりや、細糸つむぐ、わしは山家の、藤つむぐ
- 83 人は悪うない、わが身が悪い、破れ車で、わが悪い
- 84 朝は朝星、夜はまた夜星、昼は野畑の、水を汲む
- 85 風がもの云や、言伝てしよもの、風は諸国を、吹き回る
- 86 夫たがへす、娘は袴ぐ、妻は背戸へ出て、米炊ぐ
- 87 嫁を可愛がれ、嫁こそかかれ、娘他国の、人の嫁
- 88 紅葉踏む鹿、憎いといへど、恋の文書く、筆となる
- 89 尋ねてござれ、恋しくば、わしは信太の、森に住む
- 90 月夜うたてや、聞ならよかろ、待たぬ夜に来て、門に立つ
- 91 様に貰うた、根付の鏡、見れば恋増す、思ひ増す
- 92 後世を願やれ、爺様や婆様、年寄来いと、鳥が鳴く
- 93 落ちよ落ちよと、落とそとしやる、猿の木登り、落
- 94 おまへ追従か、人事言ふか、お茶を荒らしに、又来たか
- 95 松が殿御で、子を産めばこそ、山に小松が、絶えませぬ
- 96 嫁を嫁をと、ゑと誇りやんな、誇るわが子も、人の嫁
- 97 昔思へば、うらめしござる、なぜに昔は、今ないぞ  
摂津
- 98 今年世がよて、穂に穂が咲いて、殿も百姓も、うれしかろ
- 99 親はこの世の、油の光、親がござらにや、光ない
- 100 人は羨なりや、親様二人、わしは入り日の、親一人
- 101 親といふ字を、絵に描いてなりと、肌の守りと、をがみたや
- 102 歌の返しは、二度こそ返せ、三度返すは、異なるものよ
- 103 山を通れば、茨がとめる、茨放しやれ、日が暮れ

る

104 いとし可愛子に、旅させ親よ、憂いも辛いも、旅で知る

105 心短気で、わしや国を出て、今は習はぬ、職をする  
106 半季女子に、心を置きやれ、どここのいづくで、語るや

107 腹の立つとき、裏に川欲しや、水に心を、すすぎたや

108 鳥も通はぬ、深山の奥に、住めば都ぢや、のよ殿よ  
109 野でも山でも、お主様よかれ、お主のお蔭で、世に出づる

110 ものを言やるな、言や肩になる、言はで包めば、肩もない

111 人を使はば、川の瀬を見やれ、浅い瀬にこそ、藻がとまる

112 おれを言ふとて、隣をおしやる、浜の松風、うらを聞け

113 夢になりとも、逢はせてたもれ、夢に浮き名は、立

ちやせまい

114 様が悪いか、我が悪しかるか、妬む心は、菅の根か  
115 思うてござるか、思はで来るか、おれが心を、引いてみるか

116 お台所の、連子の窓に、月と書いたは、待てとかや

117 胸で苦しき、火は焚くけれど、煙立たねば、人知らぬ

118 雨の降り出に、名が立ちそめて、雨は止めども、名は止まぬ

119 浮き名立たして、なぜ君は添はぬ、人がさますか、我がいやか

伊賀

120 千世も長かれ、この君の、老木の松は、栄えゆく

121 他国隔てて、海山越えて、見ずと心は、変はるまい  
122 松になりたや、有馬の松に、藤に巻かれて、寝とご

ざる

123 咲いた桜に、なぜ駒繫ぐ、駒が勇めば、花が散る

124 幼馴染みに、離れたをりは、沖の櫓櫃が、折れたよ

- 125 な  
 寝たらよござる、青田の中で、寝たら花咲く、実も  
 のりて
- 126 燕も軒の、住処すまかに帰る、君はなにゆゑ、帰らぬぞ
- 127 見れども見えぬ、沖の船、東風こち吹く空を、聞なに待つ
- 128 小石こがは小川に、子が捨ててある、拾うて育てて、花が  
 咲く
- 伊勢
- 129 掛けてよいのは、衣桁いかけに小袖、掛けてたもるな、薄  
 情、ヤアレヤレヤレ
- 130 勤めすりやとて、わごれうのやうな、野暮やぼの酌しやくすり  
 や、足もする
- 131 鳥羽で咲く花、ヤアレ、女郎ぢやうらうは大坂の、新町に、ヤ  
 アレヤレヤレ、酒は酒屋に、よい茶は茶屋に、ヤア  
 レヤレヤレ
- 132 心中しましよか、髪切りましよか、ヤアレ、髪は生は  
 えもの、身は大事、ヤアレヤレヤレ
- 133 駒の瘦せたに、高荷をつけて、これで降りよかよ、
- 鈴鹿の山を、しかも月夜か、闇の夜に  
 志摩
- 134 今朝のうの字は、うれしのうの字、消ゆる間もなき、  
 うの鏡
- 135 思ひ切らしやれ、もう泣かしやんな、様の恋路は、  
 薄うすござる
- 136 疊らば疊れ、箱根山、晴れたとて、お江戸が見ゆる  
 でもなし
- 137 勤めしようとも、子守りはいやよ、お主おまにや叱られ、  
 子にやせがまれて、間あひに無き名を、たてらるる
- 138 顔を汚けがすは、白粉おしろひか、生まれながらの、山桜  
 尾張
- 139 萱かやも刈りたし、麦刈り取りて、羽織仕立てて、親も  
 子も
- 140 女子おんなこ好きなら、八丈へ行きやれ、八丈むかしは、女  
 護まもの島
- 141 瓢葛屋ひやくくわに、蚊遣かやりを焚たきて、綾や錦と、夕涼ゆふみ
- 142 山椒胡椒より、辛からいもの世帯、ならぬ世帯は、なほ

辛い

143 心清きぞ、水鏡見やれ、濁る心は、なきものよ

144 江戸に咲く花、駿河でつぼむ、ことにお江戸は、花

盛り

参河

145 様の心は、なぜ薄くなる、ここは八橋、杜若

146 飽かぬ故里、ふりすてて、誰がためかや、君ゆゑに

147 柳の糸に、留められて、かへるもならず、子がつな

ぐ

遠江

148 明くれば出でて、暮るるまで、身は粉になるか、裸

麦

149 遠州浜松、広いやうで狭い、横に車が、二挺立た

ぬ

150 君はこがらす、我はまた、尾羽をからすの、羽根ば

たぎ

駿河

151 今年世がよて、思ふやうに叶ふ、親も喜ぶ、身も立

ちて

152 知つてをれども、人にまた問うて、母の指図で、迎

へとれ

153 様のやうなやうな、瓢箪男、川へ流して、鯨と語

りや

甲斐

154 殿は雨夜の、月影なるか、心も知らぬ、行く末を

155 高い山から、谷底見れば、おまん可愛や、布さらす

156 己がさらすは、布ではないぞ、あだな男の、心をさ

らす

伊豆

157 今度ござらば、持て来てたもれ、伊豆のお山の、柵

の葉を

158 ゆふべそがそが、降つたる雨は、虎が涙か、風強し

159 実に添ふなら、生爪離そ、己は五つの、指を切る

相模

160 大工殿より、木挽は憎や、同じ中をば、挽き分ける

161 来るか来るかと、川下見れば、伊吹蓬の、影ばか

- 162 夫は萱刈り、鎌倉山へ、我は子供に、根芹摘む  
り
- 163 都まさりの、浅草上野、花の春風、音冴える  
武蔵
- 164 ここはどこぞと、船頭衆に問へば、ここは梅若、角  
田川
- 165 色のよいのは、出口の柳、殿にしなへて、ゆらゆら  
と
- 166 いとし殿御を、遠くに置けば、烏啼くさへ、氣にか  
かる
- 167 若い女子に、殿御のなは、笠に締緒の、ないごと  
く
- 安房
- 168 砕けても、身はかまはぬぞ、退くならば、なぜに我  
をば、落としたぞ
- 169 山な白雪、朝日にとける、とけて流れて、三島へ落  
ちて、三島女郎衆の、化粧水
- 170 そなた命を、捨てんと云うて、今は二道、山越しに  
ふたみち
- 171 白よ回れよ、回れよ白よ、晩の夜びきに、回りあふ  
上総
- 172 岩に堰かれて、腹立つ波も、心直ぐなら、波越さん
- 173 夫は北国、まだ帰らぬか、文をやりたし、帰る雁
- 174 思ふ心の、ままならば、妬む心は、なぜやまぬ
- 175 昔見し夢、ふり捨てて、今は昔の、夢恋し  
下総
- 176 曇らば曇れ、箱根山、晴れたとて、お江戸が見ゆる  
でもなし
- 177 土橋板なら、よかるもの、どんと踏んでは、目を覚  
ませ
- 178 小夜の中山、これではないか、様に撞いてやろ、撞  
鐘を
- 常陸
- 179 水戸で名所は、千波の川よ、蓮のめぐめに、鴨がす  
む、サツサラセラセ
- 180 潮来出島の、よれ真孤、殿に刈らせて、われささぐ、  
サツサラセラセ

181 潮来出てから、牛堀までは、雨も降らぬに、袖しほ  
る、サツサラセラセ

182 岩井町とは、誰が名付けしぞ、金がなければ、つら  
い町、サツサラセラセ

近江

183 年立ち返る、御代の春、松の緑の、千代を待つ

184 伊勢の山田の、今切り竹は、お杉お玉の、鮫竹

185 堅田船頭を、夫にはいやよ、月に二十日は、沖に住  
む

186 何も職ぢやが、鞍馬の職は、馬に七束、我が身に二  
束、馬の手綱を、手に引き纏ひ、花の都へ、柴売り  
に

187 わしが殿御は、明日から江戸へ、足も軽かれ、天気  
もよかれ、泊々に、女郎なかれ

188 大田原見たか、江戸見たか、大田原町は、まだ知ら  
ぬ、お江戸に弓が、千挺立つ、弦引く殿は、我が  
夫か

美濃

189 松になりたや、有馬の松に、藤に巻かれて、寝とご  
ぞる

190 安積山かや、山の井の、人の心の、底見ゆる

191 底の見ゆるは、誰が知る、深い仲とは、三年まで

192 海が無いとや、此の国に、舟も帆もある、高瀬舟

193 高瀬舟には、柴を積む、われは浮き名の、種を積む

飛驒

194 佐渡と越後は、筋向かひ、橋を架きよやれ、船橋を

195 橋の下には、鶺鴒の鳥が鳴くぞや、なにとなく、エエ、  
ぶりしやりと

196 おまんの部家で、鳥蟬が鳴くい、ノフ、なにと鳴く、  
ヤア、夫来い来いと、三声鳴く

信濃

197 うれしめでたの、若殿様よ、知行増します、程な  
しに

198 逢ひた見たさは、飛び立つごとく、籠の鳥かや、恨  
めしや

199 籠の鳥では、わしやござらねど、親が出さねば、籠

の鳥

上野

200 わしは此の町の、軒端の雀 声で聞き知れ、名を呼

ぶな

201 殿御忍ぶは、辛気でならぬ、くぐり九つ、古川七つ、

十二小口の、板戸を開けて、忍び込んだら、夜が明

けた

202 恋と情は、きりあるものよ、仕立て送るは、三重の

帯

下野

203 十七が、室の小口に、ひとり寝て、花がかかると、

夢に見た

204 人はともあれ、かくもあれ、わしは牝鹿と、肩並び

よ

205 白鷺や、船の舳に、巢をかけて、波にゆられて、し

やんと立つ

陸奥

206 橋のぎんぼしを、五兵衛かと思うて、すでに言葉を、

かきやうとしたが、山椒食てみて、胡椒食てみれば、

従兄弟同志やら、にてからい、さんしよのせい

207 秋風が、吹けばいの、秋風が吹けば、サ、豆の葉も、

枯れるいの、豆の葉も枯れる、サ、枯れたが大事か、

何としよ、さんしよのせい

208 あの群千鳥、面憎や、サ、我を連れては、なぜ行か

ぬ、連れて行つたら、殿御に逢うて、サ、わしが心

の、底うち叩き、見捨てられたら、島国へ、さんし

よのせい

出羽

209 橋の欄干に、腰をかけ、沖をはるかに、眺むれば、

沖の鷗が、三つ連れて、又三つ連れて、睦まじく、

よられながらも、君恋し、さんしよのせい

210 明くれば出でて、暮るるまで、辛苦するのは、誰が

ためなるや、未を遂げんと、思ひつめ、身は粉にな

ると、かまはぬに、つれない言葉、いかがせん、さ

んしよのせい

若狭

- 211 松より巢立つ、鶴の子の、千歳は君と、親の蔭
- 212 走る舟をも、招けば磯へ、寄るは心の、まことより
- 213 よそに思ひし、昨日の菖蒲、今日は我が家の、妻と  
なる
- 214 昔竹馬、老いては末の、杖と成りたる、親父さま
- 越前
- 215 山陰や、いがらし川の、流れには、深山の奥の、清  
の水
- 216 月の夜にさへ、送りをもらうて、見捨てられたよ、  
闇の夜に
- 217 思うて来たのに、水かけられて、わしが思ひを、水  
にしやる
- 218 辛気辛気が、三つ四つござる、語る辛気に、語らぬ  
辛気、一つ枕に、寝ない辛気
- 219 相性見よより、甲斐性見やれ、小鬢撫でうより、  
櫃撫でうよ
- 加賀
- 220 治まれる、世のうれしさは、稲穂采える、秋の水
- 221 里のあたたまりで、むしやれて暮らしや、我は深山  
の、蟬の声
- 222 今日か明日かと、朝日を待つに、つひに疊りて、日  
を暮らす
- 223 様は流れの、瓢箪男、ぬらりくらりは、ようもよ  
も
- 224 深山六月、布子を着るは、金がないから、冷ゆるや  
ら
- 能登
- 225 親子草とは、年ごとに、古葉ゆづりの、若葉かや
- 226 根笹野に住む、雲雀は山に、鶉栗穂に、妻思ひ
- 227 飲みやれ歌やれ、先の世は闇よ、今はなかばの、花  
盛り
- 228 沖の渡中の、三本竹は、産まず竹やら、子が咲かぬ  
越中
- 229 よろづ世を經る、音なしの、滝の流れは、よも尽き  
じ
- 230 鮎は瀬につく、鳥は木にとまる、人は情の、下に住

- 231 死んでまた来る、釈迦の身が欲しや、死んでみしよ  
もの、面当つらあてに
- 232 買うてくりやれよ、粘るのを一両、胡麻の油で、毛  
が伏さん
- 越後
- 233 老いせぬ千世ちよの、松坂や、谷間の岩に、亀遊ぶ
- 234 わしが思ふとて、戸板に豆ぢや、なまじ言はぬが、  
ましぢやもの
- 235 千里走るやうな、虎の子が欲しや、やるぞ此の文、  
富士までも
- 236 いとし殿御しんがいでの、新開田しんがいたが割れた、夕立にはかに、来こ  
めいこと
- 237 月夜鳥がらすは、迷うても鳴くが、わしが真実まこと、思ふで  
もなし
- 佐渡
- 238 佐渡と越後は、筋向かひ、橋をかけたや、船橋を
- 239 様は釣竿つりざお、わしや池の鮒ふな、釣られながらも、面白い
- 240 いとし殿御に、逢ひたいことは、川の真砂まなごで、かぎ  
りない
- 241 雉子きりの雌鳥めんどり、奥山指いて、松の新葉の、つよばみに
- 242 池いけの小鮒こふなに、心をくれて、立ちやかねたか、白鷺しろさぎよ  
丹波
- 243 稲の葉結び、思ふこと叶ふ、末は鶴亀、五葉ごえふの松
- 244 わしが事かや、志賀唐崎しかたかきの、一つ松とは、頼りなや
- 245 谷の小藪に、雀は留まる、止めて止まらぬ、色の道
- 246 雨は降れ降れ、雪降るな、しのお細道、竹たけ擡たむ
- 247 梅うめや桜さくらは、七重ななへも八重やへも、なぜに野菊のぎくは、一重ひとへ咲く  
丹後
- 248 わしとおまへは、小藪こさかの小梅こうめ、なるも落おつるも、人  
知らぬ
- 249 岩の清水は、底から湧くが、様の心も、底からか
- 250 月は東に、昴すまろは西に、いとし殿御は、真中まんなかに
- 251 人は羨うらやなりや、両手に花を、わしも片手に、花ほし  
や
- 252 昨日きのふや今日けふまで、水仕みづしの女、今はニヶ所の、蔵の主

- 253 丹波田所、よい米所、娘遣りたや、躰ほしや  
但馬
- 254 親は子というて、尋ねもするが、親を尋ぬる、子は  
稀な
- 255 瓢葛屋に、蚊遣を焚きて、綾や錦と、夕涼み  
思案しどころ、分別所、親の意見も、聞きどころ
- 257 与作丹波の、馬追ひなれど、今はお江戸の、刀差し  
与作思へば、照る日も曇る、関の小まんが、涙雨か
- 259 雨は降るとも、身は濡りやせまい、様の情を、笠に  
着て
- 260 都々と、わし連れてきて、ここが都か、山中を  
因幡
- 261 尽きせぬしるし、岩に花、峰の小松の、茂り合ふ  
朝間よりの、こん烏が、露にしよぼろ、濡れたやう  
な、ゆうゆうと、苗を取る、露に濡れたやうな
- 262 今朝来たおなれどが、帷子は、ナヨナ、裾も縫はず  
に、着る帷子は、ナヨナ
- 264 昼飯米搗くは、十二から白で、ナヨナ、嫁も姑も、
- 266 後世と契りて、今また飽きやる、釘を打ちたや、後  
の妻
- 伯耆
- 267 心通はず、杓子の先で、言はず語らず、目で知らず  
金の威光の、横柄顔も、昨日かぎりの、三途川
- 269 博奕や打たしやる、大酒飲みやる、わしが布機、無  
駄にして
- 270 昼飯は出来いたか、何がお汁の実で、ナヨナ、磯端  
の、若布よし、それがお汁の実で、ナヨナ
- 271 早乙女の、股ぐらを、鳩が睨んだとな、睨んだも、  
道理かや、股に豆を、はさんだと、ナヨナ
- 出雲
- 272 さんまれこれの、嫁御様、どこな育ちの、さんまれ  
様ぞ、稲の末穂の、のぎ育ち
- 273 千家北島にやあ、焼餅がはやる、中に味噌入れて、

- 274 ポツポ、ほやほやと  
 この石臼は、ふかねど回る、風の車なら、なほよ  
 かる
- 275 昼飯ひるま持ちのござるやら、赤いかたぶらで、ぶらりし  
 やらりと、赤いかたぶらで
- 石見
- 276 これの御館、御繁昌なさる、奥は琴の音、中の間は  
 鼓つづみ、門かどはものが、絶えませぬ
- 277 関の地藏に、振袖着せて、奈良の大仏、聳むさにとろ  
 京の大仏に、帆柱持たせ、鯨釣りたい、五島浦で
- 隠岐
- 278 背せなを叩かれ、しんこほど腫はれた、これも愠りん気の、固  
 まりか
- 279 去いなしよ去いなしよと、思うたうちに、太郎が生まれ  
 て、去いなされぬ
- 280 われは奥山の、笹小笹ささこささ、藤に巻かれて、寝とござる  
 播磨
- 281 池田伊丹の、上じやうもろ詰白も、銭がなければ、見て通ほる
- 282 いつか鴻池こういけの、米踏みしまひ、播磨灘をば、歌で  
 やろ
- 283 今の若い衆は、麦藁むぎわら襦すまわら、一夜ひとよかけては、かけ捨て  
 よ
- 284 髪を島田に、結いはうよりお方かた、心島田に、持ちなさ  
 れ
- 285 ござるござると、浮き名を立てて、様は松風、音ば  
 かり
- 286 思ふ殿御と、白引きすれば、白は手車、中で回る  
 美作
- 287 十七八は、たいたうの藁で、打たねど腰が、しなや  
 かな
- 288 前田まえだの稲の、葉もちのよさは、黄金の露を、巻き上  
 げる
- 289 またと行くまい、湯原ゆはらの湯へは、三坂みさか三里が、憂うれい  
 ほどに
- 290 近江の笠は、形なりがようて着ようて、締緒しめをが長うて、  
 着よござる、ソリヤイノフ
- 291

292 どんどと鳴るは、大竹おほたけさき、鳴らぬは紫竹ししゆく、こまこま、ソリヤイノフ

備前

293 千世に八千代に、御代みよ治まりて、波も静かに、四つ

の海

294 塩飽しほ大工は、ちよちよまかちよ、おれが木末こぎに、と

まりて女郎招く

295 御油ごいや赤坂、吉田がなけりや、なんのよしみに、江

戸通ひ

296 君に逢ふとて、朝水汲めば、濁る心か、まだ逢はぬ

297 備前岡山、新太郎様の、江戸へござれば、雨が降る、

雨ぢやござらぬ、十七八の、恋の涙が、雨となる

備中

298 尽きせぬしるし、岩に花、峰の小松の、茂り合ふ

299 こなた思へば、照る日も曇る、冴えた月夜が、闇と

なる

300 こちの旦那殿、からかさ育ち、世間ひろがり、内す

ぼり

301 こなたお背戸に、ひづると蓼たと、なんのひづるめが、たでたでと

302 こちの旦那殿、臭木くまぎの育ち、うはべ美し、底苦い

備後

303 栄え久しき、松が枝の、岩の岸根に、波寄する

304 江戸へ江戸へと、木草もなびく、江戸にや花咲く、

実もなりて

305 憎い憎いは、裏の裏、実じゆの憎いは、思ひのあまり

306 たとへ火の中、水の底、およばぬ中に、住むも君

307 心短気な、男を持てば、胸に早鐘、撞くごとく

安芸

308 宮と広島に、海が無かよかる、いとし殿御を、通は

せはすまい、わしがちよこちよこ、通ひましょ

309 渦がまみます、広島あきの沖に、渦ぢやござせん、鬨あきで

ござす、おまへとわしが、仲ぢやもの

周防

310 東風吹きすさむ、朝あには、様の涙か、雨の脚あし

311 一夜馴れ馴れ、この子ができて、新茶茶壺で、こち

- や知らぬ、シヨンガへ  
 312 吉田通れば、二階からまねく、しかも鹿の子の、振袖が、シヨンガへ  
 313 酒は飲まねど、酒屋の門で、足がしどろで、歩まれぬ、シヨンガへ  
 長門  
 314 西吹く風の、夕暮れに、思ひ出でたよ、里心  
 315 来いと云たとて、行かれる道か、道は四十余里、夜は一夜  
 316 恋ぢや急きやるな、浮世は車、命長けりや、廻り逢ふ  
 紀伊  
 317 幾千世久し、松が枝の、君は栄える、若緑  
 318 月になりたや、様が住む、閨の臥所を、照らしたや  
 319 尋ねてござれ、恋しくば、三輪の二本、ともすぎん  
 320 思ふ殿御が、野へござるなら、涼し風ふけ、雨ふるな  
 321 山が焼けるぞ、立たぬか雉子よ、これが立たりよか、  
 子を置いて  
 322 人に云はりよと、云ひさがさりよと、わしが身にさへ、曇り無か  
 淡路  
 323 人の口には、戸が立てられぬ、流れ川滝、堰きならぬ  
 324 船が着く着く、百廿七艘、様がござるか、あの中に  
 325 丹波雪国、積もらぬさきに、連れてお出やれ、薄雪に  
 326 辛苦島田に、今朝結うた髪を、様が乱しやる、是非もない  
 阿波  
 327 花は折りたし、梢は高し、眺め暮らすや、木のもとに  
 328 あだけ甚兵衛様、つた山通ひ、つたの立て石、星月夜  
 329 狭い広いと、わしが寝た部屋を、いまはよそ目で、

- 見て通る
- 330 雨が降るとて、沖から曇る、娘去るとて、聶が来ぬ
- 331 鳥もはらはら、夜もほのほのと、鐘も鳴ります、寺々に
- 332 鉦を叩いて、仏にならば、江戸の早鐘、みな仏讃岐
- 333 様よ様よと、焦がれて来たに、様は啞かよ、もの言はぬ
- 334 志度はよい町、西北をうけ、八島風は、そよそよと
- 335 花の絵島は、からみがあらば、手繰りよしよもの、みの原へ
- 336 人の娘と、新造の舟は、人が見たがる、乗りたがる
- 337 八島山には、大谷小谷、なぜにこなたに、子が無いぞ
- 338 みすぢ風呂が谷、朝寒ござる、炬燵やりましよ、炭添へて
- 伊予
- 339 月は重なる、腹の子はふとる、生木筏で、きかうかぬ
- 340 十九二十で、夫無いならば、ひとり丸寝が、久しかろ
- 341 わしは浜松、寝入るとすれば、磯の小波が、揺り起こす
- 342 親も兄弟も、無き身のはては、ともに情の、かけどころ
- 343 闇の丸木橋、様となら渡ろ、落ちて流れて、先の世ともに
- 土佐
- 344 田野のやまみち、茅や帆はひかぬ、をさや手織りの、八つ木綿
- 345 親に隠して、お歯黒つけて、よそに降る雪、はを隠す
- 346 云つら云つら、女房にせうと、連れて他国を、しよと云つら
- 347 様とわしとは、焼野の葛、蔓は切れても、根は切れ

- 348 ぬ  
来いといふのに、遠いと云やる、なんの四十余里、  
四百里も、心近くぞ、ナアレカシ
- 349 カシ  
恋しゆかしも、様ゆゑばかり、逢はぬ昔に、ナアレ  
惜しや欲しやと、思ふはなんぞ、とかく君ゆゑ、ナ  
アレカシ
- 筑前  
351 独楽の名物、博多と聞こえ、帯にしてさへ、回りよ  
い
- 352 生まれ来たりし、いにしへ問へば、君と契れと、夢  
に見た
- 353 後家を立てての、身だしなみ、日陰に咲ける、花好  
きか
- 354 茶物語に、人事いうて、己が恥をば、飲み隠す  
355 駒の手綱を、知りながら、様に引かれて、身を汚す  
筑後
- 356 高みに残る、月影を、宿せし袖は、変はるまい
- 357 いかで忘れん、逢ひなれて、後世の契りも、あきの  
山
- 358 白は回さで、嬌態ばかつくる、嬌態で回るか、此の  
白が
- 359 待つが辛い、別れが憂いか、待つは楽しみ、別れ  
は辛い  
豊前
- 360 わしとお前は、諸白手樽、仲のよいのは、人知らぬ  
361 連れて行かんせ、いづくへなりと、たとへ塩屋の、  
火を焚くとても、お前ゆゑなら、苦しゆない
- 362 さても見事な、御手洗躑躅、晩に蓄みて、夜中に開  
く、夜明けがたには、散り散りと、ヨイヤナ  
豊後
- 363 後世を願ふは、我が身ぢやないぞ、様を浮かめて、  
ともしたい
- 364 金の山吹、風そよぐ、けんな色、はんな色、はんふ  
く茶に、すんぷく茶、ちよんきりちよんかいな
- 365 様の痴話文、鼠に引かれ、おれが思ひは、穴にある

366 くんくるべいと、待つ夜はなくて、待たぬ夜は来て、

ちよんきりちよんかいな

367 筑波観音に、口髭が生えた、サ、生えたら大事か、

なんとせう、ちよんきりちよんかいな

肥前

368 源が弟は、ヤアレ、砂地の牛蒡、根底掘られて、頭

はれるよ、ゲンゴベ

369 藪の中の、きちきち坊主は、なじよと鳴くぞ、親が

ないか、子がないか、親も子も、ござるけれど、伯

母御の方へ、帷子壹枚、借りにいた

370 おまん股ぐらに、釣鐘堂が出来て、今日も暮れぬと、

六つの鐘、サヨイナア

371 差せば押さへる、押さへば飲めず、飲めば其の身の、

仇となる、サヨイヤナ

372 平戸小瀬戸から、舟が三艘見ゆる、丸にやの字の、

帆が見ゆる

肥後

373 つまよな池の、どん亀ならば、くんくるべい、ツボ

ンホへ

374 鞆の向かひの、仙酔山は、地から生えたか、浮き島

か、エエエ

375 宵に見初めた、白齒の娘、ようもなりそな、瓜の蔓、

エエエ

日向

376 月夜はいみじき、闇こそよけれ、忍ぶ姿の、顔見え

ず

377 水に蛙の、鳴く声聞けば、過ぎし昔が、思はるる

378 思ひ乱れて、飛ぶ螢、ゆふべゆふべに、身をこがす

大隅

379 思ひ出せとは、忘るるからよ、思ひ出さずに、忘れ

まい

380 幾夜明石の、浦こぐ舟も、浮かれこがれて、磯へ寄

る

薩摩

381 闇夜なれども、忍ばば忍べ、伽羅の香を、しるべに

て

382 千世ちよの前髪まへかみ、下ろさば下ろせ、わしも留めましょ、

振袖ふりそでを

383 洲山すやまおかめ女ぢよは、洲山すやまの狐きつね、尾おふり尻しりふる、人をふる

384 散りゆく花はなは、根ねに帰る、ふたたび花はなが、咲くぢや

ない

385 島しまが島しまなら、世よが世よであらば、なんの地方ちほうに、身みは持もとぞ、ヨイコノイカニ、なんの地方ちほうに、身みは持もとぞ

ぞ

386 志賀唐崎しげからきの、名なはよけれ、一つ松いつまつとは、聞くさへつ

らい

老岐

387 峰みねの小松こまつに、雛鶴ひなづるつがひ、谷やの流れながれに、亀遊かめあそびぶ

388 ござるござると、浮うき名なを立てて、様さまは松風まつかぜ、音ねばかり

かり

389 しまうたしまうた、団七だんななどんの、さら小麦こむぎ、六把むすばかりしまうた、裏うらのおかめ女ぢよと、戯あそれ合あうて

対馬

390 いざや若い衆わかいしゆ、ござるまいかよ、昼狐ひるきつね、なんの化かかり

さりよ、とんとろ化かけよ

391 いらぬ煙管きせるの、羅宇らうのよが長ながうて、様さまと寝ねる夜よの、短みじきよ

392 野のにも山やまにも、子こ無なきはおきやれ、万まの歳としより、子こ

は宝

画中歌謡

393 年としたち返かへる、春はるなれや、木きの芽めもめだつ、花はなも咲さく

394 相模横山さしがみ、照手てるての姫ひめは、妻つまのためとて、車くるま引ひく

395 我わがも百足ひゃくあしを、射やり取りて、俵藤太たはらとうたの、米こめほしや

396 浪なみも静しずかに、御代治みよさだまりて、白引歌しろひきうたは、よも尽つきじ

397 眉目まゆめがよいとて、心こころが人ひとか、大坂木偶おおさかこぎの坊ぼくで、面おもてばかり

398 夫おとこの留守くさうに、人ひと寄せせぬは、扱さも見みあげた、花嫁御はなよめ

## I 艶歌選 (略称：艶)

- 1 誰そやこの夜中に、鎖きいたる門かどを叩くは、叩くとも、  
よも開けし、宵の約束なければ
- 2 まどろめば、面影の、しげしげと、短夜に、ほとと  
ぎす、音連れては常に、夢ぞ覚めける
- 3 たまさかに、逢ふとても、猶なほ濡れまさる、袂かな、  
明日の別れを、かねてより、思ふ涙の、先立ちて
- 4 三保みほの松風、吹き絶えて、沖つ波もあらじな、水に  
映らう、月を友に、眺めにつづく富士山
- 5 短夜の、夢さめて、面影は、夏虫の、身より余る、  
思ひをば、いかで人に語らん
- 6 なかなかに、人をば恨むまじや、恨みじ兎に角に、
- 7 月をのみ、眺めても、かくばかり、惜しまるる、秋  
の夜を、いたづらに過ぐる、人ぞ辛けれ
- 8 比翼連理ひよくれんりの、語らひも、変はれば変はる、世の習ひ、  
さりとは、恨むまじや、昔は情ありしを
- 9 雪ゆきの朝あしたのあらしは、木末の花の、散る風情ふぜい、名残惜  
しきは、兎に角に、待ち得し君の帰るさ
- 10 武蔵野に、行き暮れて、月を眺めて、草枕、恋しき  
人を、夢に見て、うたた寝の、袖しぼる
- 11 秋の夜は更けゆき、月は西に傾かたむく、松風や、浪の音  
鹿の声ぞ淋さびしき
- 12 此の頃は、いとどしく、都の方の、恋しきに、かか  
る処の、人ごころ、憂きを慰む、今宵かな
- 13 思ひ重ねて、歳とし月を經ゆれば、昔の懐しく、思ひ出で  
たる、恋しさも、涙に雨や、さそふらん
- 14 三五夜中の新月しんげつ、隈なきぞ、惜しまるる、千里の外  
の、人までも、さぞや詠うため明かさん
- 15 思ひ寝の、夢の枕に、契る明け方、覚めてはもとの、

- 辛さにて、涙の外はあらしな
- 16 幾夜あかしの、浦の波、寄せては返り、浮き沈み、  
哀れを思ふ、折からに、哀れを添へて、啼く千鳥
- 17 隠れ家ふかき、奥山の、松の扉を、まれに開けて、  
まだ見ぬ花の、顔ばせを、見るより濡るる衣手
- 18 吉野の山を、雪かと思れば、雪にはあらで、花の吹  
雪よ
- 19 きぬぎぬに、明けの睦言、今更に、浮き名別れの、  
袖の海、馴染まぬ昔、ましちやもの
- 20 幾夜かさねし、情の末は、恨み焦がるる、身は恋ご  
ろも、せめて一夜は、来ても見よかし
- 21 たとひ逢はずと、文さへ見れば、文は妹背の、橋と  
なる
- 22 花は折りたし、梢は高し、心づくしの、身はひとつ  
つ
- 23 花の夕の、契りとなるも、初めのなさけ、今の仇  
まだ寝もやらぬ、手枕に、そでもないこと、思ひ侘  
び、うつらうつらと、更けてさへ、寝巻の衣の、膚  
うすき、辛いぞ憂いぞ、何としよ
- 25 あれ虫さへも、番ひ離れぬ、揚羽の蝶、我々とても、  
二人連れ、粹な同士の、中々に
- 26 人知らぬ、胸にせまりし、男氣の、とんと恨みし、  
鶯の、啼いて曲輪の、袖の海
- 27 いかしに習ひぢや、勤めぢやとても、嫌な客にも、逢  
はねばならぬ
- 28 逢はぬ辛さに、焦がれしよりも、逢うて別るる、鐘  
の聲
- 29 いつか曲輪を離れて、本の夫婦と、言はるるならば、  
今を昔の、語り草
- 30 明けて散りなん、暮れて散りなむ、散ればぞ花の、  
色も香も、いづれ儂き、春の風
- 31 辛気晴らしに、まぎらす酒も、思ひ深きに、酔ひも  
せず
- 32 辛や是非なや、涙の川瀬、思ひ流せど、また吹く風  
に、冴ゆる月さへ、心に恥ぢて、影深々と、侘びて  
見む
- 33 あぢに寄方を、言い掛けられて、何のいらへも、無

いのが返事

34 をとこ選びに、今年も暮れつ、また来る春も、あだ

に散る、姿の花の、移ろひし

35 今日ハ吾妻の、人の月、明日ハ筑紫の、人の花

36 勤めの外に、可愛男と、たまさかに、更けて逢ふ夜

の、惜しいと思ふ

37 面瘦せかいの、男の心、わしは白浪、うつつなき、

夜の寝覚の、その睦言を、思ひ出すほど、愛しさの、

ぞつと身もよも、あられうものか

38 松に春風、香りくる、いざや連れ立ち、梅咲く里へ、

行くまいか、道は菜種の、花咲く野辺よ

39 夜や寒き、衣や薄き、独り寝の、夢も破れて、うつ

とりと、硯引き寄せ、する墨の、音さへ忍ぶ、闇の

ふみ

40 たとひ命の、つづくだけ、ほんの誠を、尽くしても、

男の方より、それぞれ、便りもせねば、遠ざかり、

思はぬ人の、宿の花と、咲く時は、初めの真実、後

の嘘

41 恋話、好いた男の、噂して、寝るも寝られぬ、気ま

ま酒

42 おなじ座敷の、立ち居にも、ふつと目につく、顔と

顔

43 雪に慕ひ、雨に焦がれて、一枝の、梅を命の、春さ

へも、浮世の夢と、散り果てて、何のことやら、袖

の露

44 案じ過ぎしを、枕に語れ、髪結はぬ夜の、女郎花、

いうてもおくれな、小夜嵐

45 身にかへて、思ふ人には、たまさかに、思はぬ人の、

繁々に、郭の里の、憂き勤め、寝ても覚めても、苦

になりて

46 逢はぬ筈なら、夜毎の夢も、ほんになまなか、見え

ぬがよいに、うつらうか、うつらうか、人目の関よ

47 いとど寝られぬ、秋の夜の、更けて砧の、音聞けば、

月ぞ知らする、わが涙

48 草に寝て、花に遊べる、蝶々の、身ぞうらやまし、

味気なや、思ひ切りなき、女気の、涙にひたす、袖

- まくら
- 49 ひとり眺むる、寢屋の月、夢ばかりなる手枕、下着  
にのこる移り香
- 50 傾城の、ひる寝ぬほどに、思ひつめ、それが嵩じて、  
乾反り言
- 51 広い世界に、住みながら、せまう楽しむ、まこと誠、  
こんな縁が、唐にもあろか
- 52 世にも因果なものなら、儂が身ぢや、可愛男に、幾  
瀬の難儀
- 53 天の原、茜さし出る、光には、春の至らぬ、隈もな  
く、雪間の草の、若やかに、色づき初めし、朝かな
- 54 咲いた桜に、なぜ駒つなぐ、駒が勇めば、花が散る
- 55 ここは何処ぢやと、船頭に問へば、ここは須磨の浦、  
敦盛様の、お墓所か、薄原
- 56 来いといふとて、行かるる道か、道は五十里、波の  
上
- 57 舟は出てゆく、帆掛けて走る、宿の娘は、出て招く
- 58 来いで来いでと、待つ夜は来いで、待たぬ夜は来て、
- 門に立つ
- 59 恋をするとは、親達知らず、薬飲めとは、曲がない
- 60 お医者様でも、神様でも、惚れた病は、直りやせぬ
- 61 君は三夜の、三日月様よ、宵にちらりと、見たばか  
り
- 62 水の垂るよな、前髪様と、朝日さすまで、寝て語る
- 63 曇らば曇れ、箱根山、晴れたとて、お江戸が見える  
ではなし
- 64 高い山から、谷底見れば、瓜や茄子の、花盛り
- 65 晩に忍ばば、裏から忍べ、表八重垣、錠おりる
- 66 坊様忍ばば、闇がよい、月夜には、頭がぶらりしや  
らりと
- 67 あの橋越えて、また越えて、逢ひに来たのは、可愛  
ものぢや
- 68 良い茶が沸いた、上がらんか、白湯ぢや白湯ぢや
- 69 宵より締めて、寝る夜半は、月が出るやら、曇るや  
ら
- 70 逢ふは別れの、初めと知れど、得悟らぬは、人ごこ

ろ

71 逢ふこと猶、難い殿、夜となく、昼とも分かぬ、聞

の内、寝ても覚めても、忘れぬ、枕一つを、袖の  
海

72 若木の花は、一盛り、老木の枯れ葉、色失せて、変  
はるは男の、心ぞや

73 広い世界の、殿たちが、女房一人を、守りやせぬ、  
廓の遊びは、ある習ひ

74 可愛らしい、前髪を、愛想もこつそり、坊ぼんま様に、し  
やうことも、無き節の、此処こゝばかりで、日は照る

まいし  
75 父とと様や、母か様にも、代へて愛しい、大事の殿御、松

山殿の、お指図で、何の別れて、往ぬものぞ  
76 田舎住居いなかぢゆうの、この儂わしと、客馴れきやくなれさんした、三勝殿さんかつどの、

譬たとへて言はば、深山木みやまぎと、都の花  
77 不粹ぶすいなお前まへぢや、あるまいし、無理言無理言い掛けて、気

もせさせ、お前の心が、済むかいな  
78 こころ細道、ゆく野辺の、月は見えねど、恋の間、

互たがひひに手に手を、取り交かし、歩み習はぬ、二人ふたりが所ところ

79 二人が今の、憂うれき辛からき、そなた十三、相生あまのひの、共  
にあどなき、中々に、仲の良かつた、悪縁あくえんぞや

80 高いも低いも、姫ひめごぜの、肌触れるのは、唯ひとり、  
親兄弟も、振り捨てて、殿御につくが、世の教へ

81 女の方に、受け悪う、いやひな好かん、置きなされ、  
厚あつかましいと、唾つよ吐はきき、代物しろものつぎに、生まれたは、

みな両親ふたおやの、不細工ぶさいくから  
82 姿すがたつころふ、心根こころねは、まだ娘氣むすめの、後あとや先、死しにに  
行く身は、常とこよりも、心ほそ道、犬いぬの聲

83 四十近い、身をもつて、十四やそこらの、小娘と、  
一緒に死んだら、義理知らずと、世間の人の、笑ひ

の種  
84 定まり事と、諦あきらめて、一緒に死んで、下くださんせ、父とと

様や、母か様が、憎い中にも、死んだなら、貞女ていじよとや

らぢや、出来できしたと、まだ誉められる、こともあろ

## J 越風石白歌 (略称：越)

- 1 思ひ染め川、わたらぬさきは、かほど深きと、白浪  
だ
- 2 染めて悔しや、藍紫に、もとの白地が、ましぢやも  
の
- 3 つとめする身に、実の有らば、花に実のなる、山吹  
に
- 4 小野小町よ、露深草の、垣に立つ名は、吹く嵐  
そこのち
- 5 我はけやきで、木は堅けれど、人の櫛の木に、なれ  
なれと
- 6 竹にふしある、浮世はいやよ、人の櫛がき、結ひた  
がる
- 7 思ふころの、いつはりなきは、虎と見る箭の、石  
に立つ
- 8 思ひかけたら、無験にはせまい、石に立つ箭の、有  
りときく
- 9 石に立つ箭の、有りと聞けど、なぜに届かぬ、我  
が思ひ
- 10 もみぢ踏む鹿、憎いといへど、恋の文かく、筆と成  
る
- 11 富士のすそ野に、朝顔うゑて、露と花との、色くら  
べ
- 12 あはでくもりし、心の鏡、遇うて霄らさむ、うたが  
ひを
- 13 君は松むし、私はこほろぎと、いひて鈴虫、ふりす  
つる
- 14 君は我が身を、秋虫にても、またぞこほろぎ、時々  
に
- 15 花に短冊、つけるはよいが、余所に主有る、枝をる  
な

- 16 君はさやけき、十六夜月よ、私は廿日の、月をまつ
- 17 君はうぐひす、私はほととぎす、誰もはつねの、身を瘦す
- 18 わきてつらきは、山杜鵑、声も形も、いつこそや
- 19 どうかかうかの、待つ夜の所作に、来るかこぬかの、  
置算
- 20 桔梗の手拭、おとせばひろふ、直に受くれば、人が  
居る
- 21 ごばん引きよせ、昼寝の夢に、白と黒との、智恵くらへ
- 22 紺のふくさに、鬢伽羅こめて、おとす振りにて、君  
にやる
- 23 程の有りとは、恋路ぢやないぞ、近き遠きは、いはぬこと
- 24 あかね染めには、藍にて重ね、色の深きを、こいと  
いふ
- 25 恋をするなら、猩猩緋染め、たとひ朽ちても、色  
さめぬ
- 26 恋をするなら、露草染めに、藍の重なる、深き色
- 27 君は野にさく、あざみの花よ、見ればやさしや、よ  
ればさす
- 28 高き思ひは、朝顔ならず、既に裾野へ、よる君は
- 29 よるべなき身は、夢こそたのため、打つな妻戸を、夜  
の雨
- 30 雪になりたや、箱根の雪に、とけて流れて、けはひ  
水

## K 和河わらんべうた（略称…和）

- 我がすがた  
 8 親に孝行の、やかたを見れば、金ぎりまど、銭すだ  
 れ  
 7 親のよいのは、我が子もはんじやう、いつがいつま  
 で、名を残す  
 9 親のをしへに、したがふ人は、こがね堂がたつ、此  
 の世から  
 10 親に孝行な、よい子をもてば、金堂がたつ、くら  
 がたつ  
 11 親のかげをば、踏む人ならば、ろくでゆこかや、ゆ  
 くすゑが  
 12 精出せ精出せ、なるたけ精出せ、したふ身のため、  
 お主のため  
 13 親を思へば、此の身もだいじ、人のあはれみ、おも  
 ひやる  
 14 親に孝行の、其の人見れば、世界影さす、身上か  
 ら  
 15 親のある子は、油のひかり、親がなければ、ひかり  
 6 親のゆづりを、ないぞとおしやる、おもものゆづりは、  
 で  
 5 親のうちでは、きずゐのきまま、涙こぼすな、人中  
 うなもの  
 4 父よ母よと、呼子の鳥は、鳥とおもへど、しゆしよ  
 3 親にそひたや、百までなりと、百は冥がない、九十  
 九まで  
 2 主を大じに、する人見れば、のちにやこがねの、花  
 がさく  
 1 主やおやをば、大じにすれば、天のめぐみの、はな  
 がさく

なし

16 親の所から、文が来ましたが、仕ごとしならへ、朝  
起きならへ

17 後世を願はば、親さまねがへ、親にまさりた、弥陀  
はない

18 かた身着ずとも、かた袖きずと、親にそひたや、も  
ろおやに

19 ひととはけなりや、おやさまふたり、わしは入り日の、  
おやひとり

20 わしは生まずで、子がござらぬが、野辺の送りが、  
さびしかろ

21 野辺のおくりは、かまひもせぬが、位牌所いはいせうが、や  
みやみと

22 くちに食はすが、孝行かうかうでないぞ、とかく親ごの、氣  
をやすみや

23 親にきのどく、飲ましやる人は、つひにわが子が、  
毒のます

24 妻にばかされ、わが子に迷うて、御恩受けたる、親

御を捨てる

25 親をたてよて、出ごとは出たが、船ののり場で、親  
恋し

26 おやの位牌いはいを、両りやうの手にすゑて、諸国めぐれど、ま  
だ逢はぬ

27 麻のはかまの、ひだとりかねて、抱へはしるや、親  
ざとへ

28 おやのゆひでうに、背いた人が、何がよかろぞ、ゆ  
く末すまが

29 親の在所へ、いにたい時は、千里こやまも、ちかう  
見える

30 四国西国、めぐりて見たが、親にまさりた、弥陀が  
ない

31 関や関やで、こぼるるなみだ、流れゆけがな、親ざ  
とへ

32 親は子というて、尋ねもするが、親を尋ぬる、子は  
まれな

33 おやといふ字が、此の世にあらば、かけて拜めよ、

- 日に三度
- 34 親の御座るうちは、そでにも思ふた、親の光は、七  
ひかり
- 35 口に食はすりや、孝行<sup>かうかう</sup>とおしやる、心やしなへ、す  
なほにて
- 36 物を食はすりや、孝行<sup>かうかう</sup>と思ふ、犬もやしなや、かは  
いがる
- 37 としをよりたりや、あしこしいたみ、親に不孝<sup>ふかう</sup>を、  
今くやむ
- 38 親のある時、そまつに思うて、さても別れて、血の  
なみだ
- 39 おやのない子の、あのふりみやれ、たもとくはへて、  
かどにたつ
- 40 おやのあるときは、不孝<sup>ふかう</sup>にしたが、我がつらけれや、  
思ひだす
- 41 親を見捨てて、我が子をそだて、さても其の子が、  
おにとなる
- 42 山家<sup>やまが</sup>なれども、わがふるさとは、柴のいほりも、な
- 43 人の嫁御と、つまきり庖丁、いつもきりぎり、たつ  
つかしや
- 44 おやのいふこと、きかぬ子は知れる、ろくでゆこか  
がよい
- 45 はかりせせりて、銭かねたみやる、すぐに地ごくの、  
いかけ銭
- 46 としがよりても、たんきがやまぬ、しら髪<sup>が</sup>ませりの、  
子に恥ぢやれ
- 47 鮎は瀬にすむ、鳥は木にとまる、人はなさけの、下  
にすむ
- 48 月はまんまんと、さえたよさまよ、心さえねば、い  
つもやみ
- 49 さいのかはらへ、わしは子をやつて、やつたその夜  
は、めもあはぬ
- 50 あたらみづをば、にごしてつかふ、すめばこころも、  
よいものを
- 51 なんぼくどいても、落ちてもくれぬ、何がかなはう

- や、不孝<sup>よちう</sup>から
- 52 わかい女子<sup>むねこ</sup>よ、身を捨ておくな、身をば水晶<sup>すいしやう</sup>の、  
玉にもて
- 53 嫁をかはいがれ、嫁にこそかかれ、嫁はまつごの、  
水をとる
- 54 なんぼいふても、いひきかしても、糠<sup>ぬか</sup>に打つくぎ、  
しどかない
- 55 玉のすだれを、かけやろといふても、ばくち打ちど  
の、いやでそろ
- 56 人の事とて、いふまいせまい、われはいはれて、は  
らがたつ
- 57 人の七なん、我が身の十なん、人の七なん、見てな  
ほしや
- 58 ねてはねがみを、しぼるとままよ、親にしんくは、  
かたるまい
- 59 われはかしこい、りこうだてせずと、人は人らし、  
まねをせよ
- 60 あさねめされな、あさねはどくよ、天の冥加<sup>みやが</sup>に、つ
- 61 はらを立つるは、其の身の損よ、こらへおほせりや、  
身の徳よ
- 62 人のよしあし、歌でも知れる、声とふしとで、猶<sup>なほ</sup>し  
れる
- 63 御伊勢様ほど、はんじやうはないが、伊勢はかやぶ  
き、こけらぶき
- 64 歌をつくづく、あんじてみれば、歌は道理<sup>だうり</sup>の、理を  
せめる

L  
笑本板古猫ゑほんいたこのねこ  
(略称…笑)

- 1 二階にかいすまひの、よりあひせかい、いつかはなれて、ぬしのそば
- 2 まことおまへが、じやうあるならば、年ねんのあくまで、またしやんせ
- 3 あだにされても、じらされるのも、みんなわたしが、のろいゆゑ
- 4 惚ほれてゐれども、まだぬしさんの、心しれねば、あかしかね
- 5 実じつなやうでも、男おとこはうはき、何をいふても、一ひとさかり
- 6 綾あややしきに、くるまるとても、いやな枕まくらは、かは
- 7 立つを引ひきとめ、まあまたしやんせ、はなしのこした、事ことがある
- 8 ものやおもふ、問とふ人ひとあらば、せめて語かたらん、ぬしのこと
- 9 しんなはなしも、一いち座ざへゑんりよ、むだでわかれて、あと悔くやむ
- 10 胸むねになみだを、わしや持ちながら、あいそづかしも、ときときの義理ぎり
- 11 目めにはなみだを、わしやもちながら、いやな座敷ざしきの、せじ笑わらひ
- 12 あんなお方かたと、いはんとすれど、顔かほと心こころは、ゆきとすみ
- 13 むちやなやうでも、まさかの時は、ぬしの顔かほをば、つぶしやせぬ
- 14 人のいふ事こと、わしや辻つじうらよ、きけば添そはれぬ、事ことばかり
- 15 わたしやかうして、こがれて居ゐるに、おもひ出すや

- ら、ださぬやら
- 16 たとへわたしは、どうなと儘よ、ぬしの顔さへ、立てばよい
- 17 ぐちがいやなら、なぜそのやうに、あだな心を、もぢなんす
- 18 見捨てさんすな、はかないとても、ひんなくらしは、世のならひ
- 19 酒は身の毒、しりつつわしも、つらい座敷の、うさばらし
- 20 人目ののべば、わしや恨めしい、あけていはれぬ、身のつらさ
- 21 はやく年あけ、おまへの側で、すきな氣儘が、してみたい
- 22 男づくぢやの、付きあひぢやのと、あだをさんして、すむかいな
- 23 おもふお人に、わしや添ふ事も、ならぬ浮世に、うかうかと
- 24 木にもかやにも、おまへを便り、それに邪見な、事
- 25 一夜なりとも、あうたるうへは、よしにするとも、ばかり
- 26 隠す事まで、おまへにあかし、ひよんな苦勞も、わたしゆゑ
- 27 のろい心を、見てみぬふりで、じらされるのが、はらがたつ
- 28 へだてられるは、いとひはせぬが、かげの噂は、わしやつらい
- 29 あはで此の世を、過ごして居ても、すゑはたがひの、胸のうち
- 30 待つもわかれも、わしやないやうに、はやくわが妻、こちの人
- 31 はやく此の家を、めでたくかしく、ぬしと二人で、暮らしたや
- 32 心がらとは、わしや言ひながら、かうもあはれぬ、ものかいな
- 33 あはぬむかしへ、立ちかへれとは、いはんながらも、

- はらがたつ
- 34 まことおまへが、じやうあるならば、浮気さんすな、  
(第四句欠)
- 35 つらい勤めの、わしやその中に、末に添ふのを、た  
のしみに
- 36 邪見ばかりが、をとこのじやうか、たまになさけも、  
かけさんせ
- 37 にげてみせねば、果てしがつかぬ、(第三句以下欠)
- 38 一夜ながれの、あだゆめさへも、さめてくやしき、  
ひとり言
- 39 いきで利発で、男もようて、それで実気も、たんと  
ある
- 40 まことあるなら、浮気をせず、わしに安堵を、さ  
せてみな
- 41 人がどのよに、いはうとままよ、かはらしやんすな、  
逢はずとも
- 42 ぬしに逢ふたび、はうばいしゆうに、なぶられるの  
も、わしや嬉しも
- 43 無理な事して、とどかぬよりも、心さだめて、すゑ  
ながく
- 44 心定めりや、まよひはせぬが、よもやよもやに、ひ  
かされて
- 45 おもふそちより、猶さらわしは、つれて行きたや、  
わがうちへ
- 46 あだとしりつつ、我が身ののろさ、人もかうした、  
ものかいな
- 47 ぐちな女ぢや、はてやかましい、永く勤めを、させ  
はせぬ
- 48 しばしあはねば、姿もかほも、かはるものかや、こ  
ころまで
- 49 永い月日を、またせるからは、おれも了簡、ないぢ  
やない
- 50 さきぢやいやがり、わたしが惚れて、おもはしやう  
とは、むりな事
- 51 ういもつらいも、わしや心から、人にうらみは、な  
いわいな

- 52 おもひきらうと、身で身を異見いけん、しあんするほど、  
 きれられぬ
- 53 ひよんなこの身に、縁えんあるそなた、苦勞くろうさせるが、  
 わしやつらい
- 54 思ひ出すほど、わしや恋こひしさの、腹のたつほど、ま  
 まならぬ
- 55 人の心も、さつしもせず、あふとその夜に、むり  
 ばかり
- 56 わしがかぶるは、いとひはせぬが、ぬしはおへやへ、  
 つらからう
- 57 のろいやつぢやと、さげしむわしを、したふあの子  
 が、気がしれぬ
- 58 むりも聞いたり、いひわけしたり、まさか未練で、  
 きれられぬ
- 59 いつかそなたを、我が家わがやへよんで、いくぢないのが、  
 わしや見たい
- 60 きてくれとは、わしや表むき、しんの心は、きれ  
 はせぬ
- 61 けふの日もたち、またあすの日も、気をもみち葉の、  
 龍田川りゅうたがは
- 62 年季まぢまち、もし死んだなら、さいのかはらで、  
 添そうてみしよ
- 63 未練みれんながらも、いま一ひとたびは、あうたうへでは、ど  
 うなりと
- 64 人のろいと、なぶられるのも、ぬしの事なら、い  
 とやせぬ
- 65 いやな異見いけんも、きくわがごころ、すゑにそなたを、  
 呼びよびたさに
- 66 遠とほざかるのも、気にかけるな、すこししあんの、  
 ある事ぢや
- 67 はらの立つときや、喧嘩けんかもするが、あとであやまる、  
 ほれた情じやう
- 68 人のいふ事、気にかけるな、わしはそなたを、は  
 づしやせん
- 69 かへる裾すそひき、かほふりあげて、なみだぐんだが、  
 気にかかる

- 70 わしがおもひで、てる日も曇る、さえた月夜も、や  
みとなる
- 71 いきもいきぢやが、をとこともよいが、情のないの  
が、玉にきず
- 72 ほんか本所に、あるとのふみの、返事やるのも、片  
だより
- 73 恋の土橋に、なさけの仲町、いろをおもての、や  
ぐら下
- 74 ぬしは丈なし、かづさの生まれ、わたしや信濃で、  
気がおほい
- 75 つとめなりやこそ、上田に八丈、国ぢやあかねの、  
裾もやう
- 76 いやなおきやくと、寝た夜は永い、鳴いてくれや、  
明けがらす
- 77 なじみかさなりや、咄もあるが、まことあかすは、  
ぬしひとり
- 78 ぐちをいはずと、此の手を見たと、かへるこの身は、  
なほつらい
- 79 定めなき世の、わしやその中に、まことあかすは、  
ぬし独り
- 80 ぬしに添はれざ、わしやいつまでも、やめ暮らし  
で、末をまつ
- 81 永いのれんに、帳場のすまひ、出ばんかけ日を、ま  
つつらさ
- 82 うそを売るのが、しやうばいなれど、わたしや正  
き、嘘きらい
- 83 しんなはなしに、夜は明け鳥、かあかあかと、気  
のきかぬ
- 84 おもひなほして、鏡にむかひ、またも泪の、うすげ  
しやう
- 85 ぬしをまつ夜は、人こそしらぬ、時をかぞへて、た  
たみざん
- 86 妹背山では、わしやなけれども、川をへだてて、ま  
まならぬ
- 87 梅もさくらも、牡丹もいやよ、ぬしのうはさを、菊  
がよい

- 88 門かどに立てたる、女松めまつと男まつ、中をとりもつ、しめ  
かざり
- 89 さつきさみだれ、よもぎふしやうぶ、わしはおまへ  
に、のぼり竿ぼりざな
- 90 星ほしの数ほど、お人はあれど、月と見るのは、ぬしほ  
かり
- 91 びんと心に、ぢやうまへおろし、鑑かみをわたすは、ぬ  
しばかり
- 92 梅うめも八重やへ咲き、ぼたんも八重やへよ、なぜに朝がほ、一ひと  
重へさく
- 93 きてしまへと、筆とりあげて、またも未練みれんな、へ  
んじ書がき
- 94 文はやりたし、人目は多おほし、やらずとらずの、むね  
のうち
- 95 うはき鶯うぐいす 梅うめをばやめて、となり住すみよし、松のは  
な
- 96 わたしや心に、鏡かがみまへおろし、どんな鑑かみでも、あひ  
はせぬ
- 97 色いろ気づいたの、つかぬぞなぞと、案あんじくらしして、よ  
こねやみ
- 98 いたこいふよな、わたしぢやないが、せめて恋路こひぢの、  
うさばらし
- 99 かたい心の、そのわたしをば、うはきものには、誰たれ  
がした
- 100 足がついたの、手がついたのと、お玉たまじやくしぢや、  
あるまいし
- 101 きたたお人に、途とちゆう中であへば、ごみもはいらぬ、目  
をこする
- 102 くだを真木町まきちやう とつちかようて、かほは赤坂、かう  
し町ちやう
- 103 あだで邪見やみで、座敷でもてて、そして手のある、床とこ  
の内うち
- 104 あんな野郎やらうめと、おしやんすけれど、わしは吉野の、  
花と見る
- 105 形なりもきりやうも、金かねにもほれぬ、とかく恋路こひぢは、こ  
ころいき

- 106 きせる手にとり、膝ひざたてなほし、わしがむりかと、  
なみだぐむ
- 107 ねがふ神さん、ようききわけて、ぬしとそはせて、  
下くださんせ
- 108 ぬしのこころと、やかんのさゆは、わくもはやいが、  
さめやすい
- 109 うちのしきあを、高砂たかさご町ちやうで、こんなつまらぬ、事  
はない
- 110 ぬしの心と、こもんのかみも、すこししめると、切  
れやすい
- 111 通つうなおまへに、不通ふつうなわたし、なぜに心が、あうた  
やら
- 112 ぬしとわしとの、その仲町なかつちやうは、二世も三世も、か  
わら町ちやう
- 113 せめて三日みっかも、つがひの鳥と、人のうはさが、身の  
ねがひ
- 114 墨すみとすずりの、こひ中なかつ々々を、憎にくやしよにんの、水みづを  
さす
- 115 菊きくのませ垣かき、ゆひこめられて、今はしのぶに、しの  
ばれぬ
- 116 淀よどのくるまは、水みづゆゑまはる、わしはぬしゆゑ、氣  
がまはる
- 117 こらへじやうなき、そなたの心、丈たけがあるなら、す  
ゑをまつ
- 118 腹はらのたつとき、きれやうならば、恋こひに手てくだは、な  
いわいな
- 119 人がそらさば、一いちどはきれて、じやうがたがひの、  
むねの内
- 120 町ちやうも所ところも、おまへの名なをも、しれて居ゐながら、儘ままな  
らぬ
- 121 おまへおもへば、三さんどの食しょくも、むねにつかへて、癩しや  
の種
- 122 待まちてどくらせど、たよりのないは、きれてしまへの、  
辻つじうらか
- 123 すいな人ひとさへ、恋路こひぢにやまよふ、ましていたらぬ、  
わしぢやもの

- 124 いもせ山では、たがひにおもふ、わしは背山で、片おもひ
- 125 西もひがしも、南もいやよ、わたしやおまへの、北がよい
- 126 飛びたつやうに、わしや思へども、さきははな歌、しらぬ顔
- 127 わしが心にや、錠まへおろし、帯からしたは、明けはなし
- 128 しんく乱れて、けさゆた髪を、ぬしの添ひ寝で、みだれがみ
- 129 色でやせるか、しんくがますか、ただしつとめが、苦になるか
- 130 花と見られて、咲かぬも悔し、さけば実になる、恥づかしや
- 131 思ひきらうと、わしやおもへども、にくやこころも、儘ならず
- 132 人の目がほを、しのぶの里よ、わしがねがひは、かくれ笠
- 133 いきな心に、ほれたがむりか、女ころしの、その目もと
- 134 昼はうかうか、まぼろし心、よるは夢路で、あひの山
- 135 色のいの字も、よめないわしが、ぬしに隠れりや、気でよめる
- 136 ぬしのこころと、時雨のそらよ、わしをじらすが、日和くせ
- 137 きやんなおまへの、心ぢやないか、来てはわたしを、ぶちころす
- 138 うそと埋づめで、きしやうをかくも、みんなぬしゆゑ、そらなみだ
- 139 人にや夏痩せ、するとはいへど、実はおまへが、しやくの種
- 140 こちら向かんせ、これこちの人、わたしやおまへの、おかみさま
- 141 うはのそらなる、心としれど、わしが因果で、かはゆるし

- 142 だましくきつた、とうふや男をとこ、縁えんはきらずに、して  
くれる
- 143 まめなおかほを、見りや嬉しいが、内のお首尾しゅびが、  
あんじられ
- 144 わしはつとめで、あやなせば、野暮やぼめはほんど、う  
れしがる
- 145 つれて逃にげげては、せけんがすまぬ、おもひなほして、  
しんぼうしや
- 146 世間せけんかねるは、浮気うはまなうちよ、しんにこる身で、な  
んのその
- 147 無理無理にしんぼう、しろとはいはぬ、ままよそんなら、  
(不明)  
くらし
- 148 広いやうでも、うき世はせまい、たれにはなさう、  
人もない
- 149 人に相談きょうだん、するところなら、ぬしの心も、しれたも  
の
- 150 是これさしたに、居あろ居あろをんな、これにやだんだん、  
訳わけがある
- 151 むねに手をあて、つまらぬものと、思おもひながらも、  
うかうかと
- 152 きて見せねば、世間せけんがすまぬ、じやうはたがひの、  
むねにある
- 153 はれちや逢あはれず、きれるはいやよ、とかくうき世  
は、ままならぬ
- 154 ゆめでなりとも、逢あひたや見たや、夢ぢやせけんて、  
しりはせぬ
- 155 男おとこごころは、なぜそのやうな、つよいばかりが、な  
らひかえ
- 156 いやであらうと、あきらめさんせ、禿かまたちにも、あ  
るならひ
- 157 ぐちな女おんなぢや、はてやかましい、わしが心を、しり  
ながら
- 158 さきでよなれて、物いふ時は、あじにひねつて、あ  
とくやむ
- 159 面白おもしろさうに、わしや暮くらせども、ふさがぬ日とは、  
ないわいな

- 160 情まじりの、手ごとにまよひ、くろうするの、心  
がら
- 161 笑うてつらい、わしや日はあれど、泣いてうれしい、  
夜半もある
- 162 儘にならぬを、うき世といへど、かうもまかせぬ、  
ものかいな
- 163 わしが苦勞は、いとひはせぬが、こころがらとて、  
ぬしにまで
- 164 日々に逢うても、別れはつらい、ましてたまさか、  
あふものを
- 165 あだなおいそれ、ちよとぼれ女、よくもだまして、  
のめのめと
- 166 果てしなきゆゑ、わしや心引く、なんのいまさら、  
きれらりやう
- 167 胸ぐらとつて、これ男づら、おもひきれとは、きつ  
いしやれ
- 168 むちやで聞きては、腹立つはずよ、心しづめて、訳  
をきけ
- 169 是さたしなめ、よく聞きわけろ、おれもをとこが、  
たたぬぞや
- 170 人のしやくりを、間にうけさんす、ぬしの心も、し  
れたもの
- 171 人の口には、戸が立てられぬ、ないもせぬ事、とや  
かくと
- 172 しらをきるなよ、世間の人が、ないもせぬ事、いふ  
ものか
- 173 かほどにおもふ、その甲斐もなく、ぬしは茶にして、  
むだばかり
- 174 あだとしりつつ、此の身ののろさ、人もかうした、  
ものかいな
- 175 ぐちも未練も、くだらぬ事も、儘にならねば、いふ  
わいな
- 176 こころがらとは、わしやいひながら、ひよんな苦勞  
を、するわいな
- 177 苦勞ある身に、くろうを求め、こころがらとは、い  
ひながら

- 178 義理も世間も、もうかまやせぬ、とても浮き名の、  
立ちしだい
- 179 勤めする身に、実をいはせ、あそばしやんすか、き  
ついしやれ
- 180 是さ放せよ、かへらにやならぬ、ぐちをいはずに、  
その羽織
- 181 ええもまたんせと、袖引きとめて、しんぼうさんせ  
と、目になみだ
- 182 引く手あまたの、おまへの身でも、おもひきれとは、  
あんまりな
- 183 三月なりとも、添はねばならぬ、ぬしはともあれ、  
わしや立たぬ
- 184 一生やもめで、くらそとままよ、いやな枕が、か  
はさりやうか
- 185 ぬれぬさきこそ、つゆをもいとへ、濡れていといが、  
あるものか
- 186 のろい心を、わしや見ぬかれて、じらされるのが、  
はらが立つ
- 187 ほんにはかない、おまへとわたし、逢うたしよてか  
ら、ままならぬ
- 188 つとめする身に、信がないと、どこのこけめが、い  
ひすぎる
- 189 こ□□心の、ただひとすぢに、外にお人も、ない  
(不明)
- 190 あんなお人に、ぢみちをかけて、さぞや世間で、笑  
はんしよ
- 191 人はどのやうに、いはうとままよ、わしがすいたが、  
身のいんぐわ
- 192 むちやなやうでも、是よく聞きやれ、おれも男ぢや、  
末を見る
- 193 あすの命も、しれぬが浮世、すゑを見るとは、あん  
まりな
- 194 異見さんすな、いけんはきかぬ、つおりやするとも、  
きれはせぬ
- 195 人の異見で、きれやうならば、しよてに心は、つく  
しやせぬ

- 196 どうしたならば、このしんじつが、とどいて実が、  
いつ知れる
- 197 ともかくにも、つまらぬものよ、心ばかりで、ま  
まならぬ
- 198 はやく年あけ、おまへの側で、しんなさうだん、し  
てみたい
- 199 儘にならぬを、しようちで惚れて、あはでしれるも、  
心がら
- 200 せんじごげんが、別れとならば、神もほとけも、な  
いかいな
- 201 つれて逃げては、男がたため、をりを見あはせ、人  
頼み
- 202 人をたのんで、もしそはれずは、ままよ浮き名の、  
立てついで
- 203 あだなおまへに、わしやのせられて、つなぐ契りも、  
なきはしり舟
- 204 ほんにおまへに、まことがあらば、どんな辛苦も、  
いとやせぬ
- 205 傾城に、まことなしとは、訳しらず、野暮な口から、  
だいたんな
- 206 ままにならぬと、いふ事は、おまへやわしが、身の  
うへを
- 207 思ふおかたと、わたしが胸を、いうてよかりよか、  
笑はりよか
- 208 雪駄やらうで、だまされさうな、わしと見られて、  
腹が立つ
- 209 ぐちな事をと、おしかりなれど、是が真実、しんの  
こと
- 210 わしが心を、うたがはせんす、そのうたがひが、な  
ほ嬉し
- 211 こんなところで、ないわしが、おまへにあふと、ぐ  
ちになる
- 212 神やほとけを、だますはまだよ、わしをだますと、  
喰ひころす
- 213 ちよこらちよこらが、仲人となり、いまはしんじつ、  
わすられぬ

- 214 まづいうまいの、あんばいしらず、あだな目もとに、  
くらひこみ
- 215 鶏とかねとは、わたしにやかたき、かはいをとこの、  
目をさます
- 216 君の心は、花ならうれし、花の心は、ちりやすい  
217 きみの心は、雁金つばめ、くるとおもへば、はやか  
へる
- 218 金がかたきぢや、そのかたきゆゑ、ぬしもわたしも、  
丸はだか
- 219 青梅さんとめ、もめんが着たい、わしやきぬぎぬは、  
いけすかぬ
- 220 梅をたつとは、昔の事さ、男きんぜいの、札たてる  
221 二度とふたたび、見むきもされぬ、わたしや鏡の、  
うらの梅
- 222 君のこころは、うすがきなれど、わたしやくよくよ、  
松葉色
- 223 琴さみせんを、きかうより、おまへのごこと、きく  
がよい
- 224 いこくさんすな、つやいはんすな、わたしや生上田、  
艶いはぬ
- 225 ぬしをおもふは、あのかけ鯛よ、たとへしんでも、  
腹とはら
- 226 らふそくややら、はなびやが、とほしばかりで、い  
227 やな客
- 227 あの燭台の、らふそくの、ながれのすゑが、おも  
はるる
- 228 女心と、ほたるのむしは、口でいはれず、身を焦  
がす
- 229 わたしや野にふす、虫ぢややら、泣いてくらして、  
夜をあかす
- 230 かはゆて憎い、ちくしやうめ、くらひちらかす、ね  
こ男
- 231 地獄極楽、あるのにおまへ、わしをちゆううに、ま  
よはせる
- 232 手鍋さげうと、いうてはみたが、じつは乗りたや、  
玉のこし

233 人はどのやうに、いはうと儘よ、やねへふる雪、むねでとく

234 その日ぐらしの、朝がほさへも、かきねつどうて、咲くわいな

235 なにをそのやうに、そふ気のよはい、地まへかせいで、ふたり口

## M 潮来絶句 (略称・絶)

- 1 ぬしはわしゆゑ、わしやぬしゆゑに、人にうらみは、  
ないわいな
- 2 そらとぶとりが、ものいふならば、たよりききたや、  
きかせたや
- 3 あうたゆめみて、わらうてさめて、あたり見まはし、  
なみだぐむ
- 4 しぼし逢はねば、すがたもかほも、かはるものかよ、  
ころろまで
- 5 ゆふしごげんで、うれしいけれど、なまじあしたの、  
ものおもひ
- 6 ぬしの来ぬ夜は、はや寝てゆめに、あうておもひを、
- 7 ふつと眼が醒め、だきしめ見れば、ぬしとおもへば、  
よぎのそで
- 8 いふにいはれぬ、わがむねのうち、それにわからぬ、  
むりばかり
- 9 ぐちがかうじて、せなかとせなか、あけのからすが、  
なかなほり
- 10 人をたのんで、かうぢやといはうか、ただしうちあ  
け、はなさうか
- 11 なんぼおまへが、浮気ぢやとても、しんにほれたが、  
しれぬかえ
- 12 くるかくるかと、ゆふつげどりの、とぶをながめて、  
しあんがほ
- 13 日ぐれひぐれに、あなたのそらを、見てはおもはず、  
そでしほる
- 14 すそをとらへて、これ聞かしやんせ、じつぢやまこ  
とぢや、うそぢやない
- 15 うそぢやないのに、ちやにするおまへ、ほんにわた

- 15 しは、エエ、じれつたいわいな  
 16 あさなゆふなに、まくらかはる、まくらかはらぬ、  
 つまほしや  
 17 ぬしのかへりを、かしから見れば、ふねに帆かけて、  
 かげもなし  
 18 わたしやあけくれ、おまへをおもふ、おまへわたし  
 を、おもやせぬ  
 19 すこしやすまうと、うたたねすれば、ぬしのゆめ見  
 て、またふさぐ  
 20 あけのからすと、には鳥にくい、かはい男の、めを  
 さます  
 21 つらいけふしを、ながらへ居るも、すこしのぞみの、  
 あるゆゑに  
 22 ぬしをかへした、そのあと見れば、どちらむいても、  
 よぎのそで  
 23 しんくみだして、けさゆうたかみを、ぬしのそひね  
 で、みだれがみ  
 24 じつもまことも、みないひつくし、まくらならべて、  
 かほとかほ  
 25 かはすまくらが、ものいふならば、わたしやはづか  
 し、とこのうち  
 26 ひざにもたれて、かほうちまもり、ものもいはずに、  
 めになみだ  
 27 えんと時節を、待てとはいへど、時節どころか、か  
 たときも  
 28 わしによう似た、あの杜鵑ほしごす、啼ないてあかして、居ゐ  
 るわいな  
 29 わしがおもひと、そらとぶとりは、どこのいづくに、  
 とまるやら  
 30 あふのうれしさ、わかれのつらさ、わたしやこころ  
 が、ぐちになる  
 31 もしやだう中で、あめふるならば、わしがなみだと、  
 おもはんせ

N 朝来考 (略称：考)

- 1 なまじなまなか、初めがなくば、かほどこがれば、  
せぬわいな
- 2 あうた夢見て、笑うてさめて、あたり見まはし、涙  
ぐむ
- 3 ぬしの心と、空ふく風は、どここのいづくで、とまろ  
やら
- 4 思ひきつても、日のくれぐれは、おもひかへして、  
独り泣く
- 5 人をたのんで、かうちやといはうか、ただしうちあ  
け、はなさうか
- 6 なんぼおまへが、うは気ちやとても、しんにほれた
- 7 髪もゆふまい、化粧けしやうもせまい、かはい男に、見しよ  
ぢやなし
- 8 死んで未来で、そふならほんに、なんのいとはぬ、  
わしが身を
- 9 なんの因果いんぐわで、わしや此のやうに、かうも思ひの、  
ますものか
- 10 秋の夜を、長いといふは、そりや常の事、主とねた  
夜の、短かさよ
- 11 女房もちとて、ほれまいものか、女房さらせて、わ  
しがる
- 12 しだり柳に、桜をさかせ、梅うめのにほひを、もたせた  
や
- 13 明けのからすと、にはとりやにくい、かはい男の、  
目をさます
- 14 あうたうれしき、別れのつらさ、あはぬむかしが、  
ましかいな
- 15 わしによう似た、あのほととぎす、ないてあかして、

るるわいな

16 末はとげぬと、しよてから知れど、それにほれたが、  
わしが科か

17 嶺ののさくらに、谷間の紅葉もみぢ、梢高こぎまさに、とどかね  
ば、御顔見おのゝながら、ままならぬ

18 もしや道中だうちゆうで、雨ふるならば、わしが涙と、おも  
はんせ

19 いふぢやなけれど、たしなまさんせ、ぬしの噂うわさが、  
あるわいな

20 あまりつらさに、出て山みれば、雲のかからぬ、山  
もなし

21 ぬしのかへりを、河岸かしから見れば、舟に帆かけて、  
かげもなし

22 竹の截きり口、たまりし水は、すまず濁らず、出ず入  
らず

23 わたしや明け暮れ、おまえへをおもふ、おまへわた  
しを、おもやせぬ

24 つらいけふしを、ながらへあるも、少し望みの、あ

るゆるに

25 空とぶ鳥が、物いふならば、たより聞きたや、きか  
せたや

26 ぬしのこぬ夜は、はやねて夢よ、あうて思ひを、は  
らしたや

27 世事のよいのと、手事にほれて、誰も一度は、のろ  
くなる

28 ままよ田舎いなかが、まだ住みよかろ、ぬしとふたりで、  
くらすなら

29 ぬしにまことが、あるならほんに、枯れた枝にも、  
花がさく

30 もはやあけがた、目をさまさんせ、日々にあはれる、  
身ではなし

31 ぐちをいはずと、ここをば離せ、帰る此の身は、猶なほ  
つらい

32 つらのにくさよ、あのきりぎりす、おもひきれきれ、  
きれとなく

33 たとへわかれて、とほぎからうが、日々におもひは、

- ますわいな  
 42 涙さきだち、唯ひとことも、いはで別れた、胸のう  
 は、寝つかれぬ
- 41 しんの夜ふけに、わしや目をさまし、おもひ出して  
 ねせまる
- 40 あうてはなしは、山々あれど、まさか顔かほみりや、む  
 ねせまる
- 39 おもうてみさんせ、しれまい物か、廿日はつかあまりも、  
 あひもせず
- 38 ままにならねば、科とがなき神も、いのりよしいよき、罪つ  
 くり
- 37 ぬしのくる夜は、よひからしれる、しめたしごきが、  
 空どける
- 36 けふの日もたち、又あすの日も、気をもみぢの、龍たつ  
 田川たがは、ながれはかなき、つとめの身
- 35 なるはいやなり、おもふはならず、とかく浮世は、  
 ままならぬ
- 43 あだにさんすな、世間せけんの人が、浮気ものぢやと、い  
 ち  
 ふわいな
- 44 いまさら語るも、わしやおもておせ、笑はしやんす  
 な、はなすぞえ
- 45 かほどこがるる、心はしらで（心はしらじ）、夢に  
 なりとも、しらせたや
- 46 とほけりやとほいと、あきらめもせうが、なまじ近  
 所で、物おもひ
- 47 あうたうれしき、別れのつらさ、うれしつらさの、  
 胸のうち
- 48 してはさほどに、おもひもせぬが、しみて気きせん、  
 おもしろや
- 49 染めてくやしき、あだむらさきも、本のしらぢが、  
 わしやこひし
- 50 ぬしの心に、誠がなけりや、神を証拠に、かけまく  
 の、起請きしょう誓紙も、みんなあだ
- 51 そふにやそはれず、きれるにやいやよ、いつかはて

- しの、つくやうに
- 52 うそぢやおかense、其の手はくはぬ、殺し文句に、  
こりたもの
- 53 あのかよほととぎすの、初音を聞きて、おもひ出すの  
は、主のこと
- 54 死なばもろとも、かせがばともに、こじきよすると  
も、二人連れ
- 55 いへばうらみが、わしやあるけれど、いはぬ心を、  
察しやんせ
- 56 二世の三世と、約束すれど、此の世ばかりで、そひ  
たらで
- 57 なんの因果で、わしや此のやうに、むごいおまへに、  
身をやつす
- 58 うそぢやないのに、茶にするおまへ、ほんにわたし  
は、エエ、じれつたいわいな
- 59 ひぐれがたには、唯茫然と、空をながめて、なみだ  
ぐみ
- 60 夢の浮世に、見る夢さへも、みるが憂き世の、なら
- 61 ゆくもかへるも、忍ぶのみだれ、かぎりしられぬ、  
ひとて  
わがおもひ
- 62 たとへ鳥が、ないたとて、天道さま出ぬうちや、か  
へしやせぬ
- 63 櫛もしのぎも、みなぬしさんに、すてて恋しの（す  
てて恋ぢの）、みだれがみ
- 64 忍びあふには、うちでの小槌、はれてあはれぬ、か  
くれ蓑、かくれ笠きて、ねまぢの夜
- 65 月はやさしや、閨までさすに、わしが心は、ぬしゆ  
ゑに、まよひがちなる、しんの闇
- 66 筆にいはせて、硯にたのみ、文に媒、させた仲、わ  
すれさんすな、紙の恩
- 67 ぬしはきれても、外にはあるが、わたしやせいもん、  
外にます、花はないぞえ、神かけて
- 68 月夜がらすを、夜明けとおもひ、ぬしをかへして、  
あつくやむ
- 69 陰になりたや、おまへのかげに、はなれがたなき、

- わしが身は
- 70 浮き草の、けふはむかうの、岸边にさきて、日々の  
心と、飛鳥川
- 71 是がかうぢやと、わけさへきけば、さのみにくくも、  
ないわいな
- 72 ぬしに似たやうな、をとこもあるか、実じつのないのが、  
ぬしの瑕きず
- 73 かべに耳ある、静かにさんせ、しれりや二人が、身  
の難儀
- 74 しんの夜ふけに、わしやねもやらず、夜着よぎにもたれ  
て、しのび泣く
- 75 ひさしぶりでの、こよひのごげん、わたしや何から、  
いはうやら
- 76 しんにふさいで、鏡にむかひ、こぼす涙に、おしろ  
いも、曇りがちなる、薄化粧うすげしず
- 77 ちらりちらりと、ふる雪さへも、つもりつもりて、  
深くなる
- 78 しんのはなしも、まだせぬうちに、にくや鳥からすが、つ
- げわたる
- 79 人はどのやうに、いはうとままよ、つのりやすると  
も、やみはせぬ
- 80 鳥からすなきわるけりや、其の日が苦勞くろう、たよりききたや、  
聞かせたや
- 81 そはれまいとは、そりや氣のよはい（そりや氣のま  
よひ）、石にたつ矢も、あるわいな
- 82 おまへ釣針、わしや池の鯉こひ 鮪うなぎ 鮠なまこ 鱧なまこ、つられな  
がらも、又かかる
- 83 柳よ柳よ、すぐなるやなぎ、いやな風にも、なびか  
んせ
- 84 としにひと夜の、たなばたさまも、わしがおもひに、  
ましやしよまい

〇江戸いたこほん（略称：江）

- 1 思ひ暮らして、ゐれどもほんに、けふが日迄も、逢  
ひもせず
- 2 愚痴ぢやなけれど、暫ししばの内も、主の心が、案じら  
れ
- 3 来た来た来た、朋輩ほうばいしゆう衆に、せましつかるる、そ  
のつらさ
- 4 仇なお前に、心を尽くし、末はどうなる、事ぢやや  
ら
- 5 勇む中にも、独りでふさぎ、人に問はれて、にが笑  
ひ
- 6 つらや浮世が、ままなるならば、独りねもせず、寝  
ひ
- 7 そばに居ながら、話もならぬ、人の中とは、言ひな  
がら
- 8 あまり恋しと、思うたままよ、唄の文句で、気をは  
らす
- 9 話する気で、そば迄行けば、そばであく玉、邪魔を  
する
- 10 主を待つ夜は、人こそ知らぬ、夜着よぎを抱へて、物思  
ひ
- 11 思ひがけなき、今日けふしのごげん、ほんに何から、話  
そやら
- 12 あだにさんすな、世間の人が、浮気者ぢやと、云ふ  
わいな
- 13 主もわたしも、手のあるどうし、負けた事には、惚  
れすぎた
- 14 案じさんすな、手のないわしを、足のつけては、な  
いわいな
- 15 たとへどの様な、風吹くとても、切れてくれるな、

- とんびだこ
- 16 所詮此の世で、添はれぬならば、髪を下ろして、尼  
となる
- 17 ままよ田舎も、まだ住みよかろ、主と二人で、暮ら  
すなら
- 18 今日もけふとて、顔見たばかり、はれた御げんも、  
ないわいな
- 19 切れて見せねば、世間がすまぬ、跡は互ひの、胸に  
ある
- 20 余りふさいで、うたた寝すれば、夢に浮かされ、寝  
つかれぬ
- 21 吹けよ川風、あがれよ簾すだれ、中の小歌の、主見たや
- 22 酔ひがさめたら、顔あげさんせ、真の話が、あるわ  
いな
- 23 神や仏を、お先に遣ひ、逢うた罪やら、遠ざかる
- 24 もしや道中で、雨ふるならば、わしが涙と、思はん  
せ
- 25 町も所も、お前の名をも、知つて居ながら、ままな
- 26 愚痴を云うたり、無理云はれたり、惚れりや誰しも、  
愚痴になる
- 27 かはず枕が、物云ふならば、ほんに恥づかし、わし  
が身を
- 28 主とわしとを、秤はかりにかけて、情じやうのあるのを、知らせ  
たや
- 29 潮来いたこすくよの、浮気な主に、のびたわたしは、猶なほ浮  
気
- 30 忘れ草とて、潮来いたこを弾けば、なまじなま中、思ひ出  
す
- 31 扱まもやさしき、蛍の虫は、忍ぶ座敷と、ほからまで
- 32 逢うて別れて、又逢ふ迄は、枕かかへて、泣き明か  
す
- 33 余りつらさに、筆とり上げて、落つる涙は、硯水
- 34 わたしやお前に、何い云はれても、水に浮き草、ねは  
たえぬ
- 35 今宵初めて、御げんに入れば、嬉し恥づかし、床まの

内

36 難儀たぎやう硯すずりに、海山かけて、苦勞する墨、君故に

37 わしはひとへに、咲く花ならば、勤め故なら、八重

にさく

38 わたしや野に咲く、主かみなき花よ、折らば折らんせ、

今の内

39 人の浮氣を、笑うたわしが、今は主故かみゆゑ、笑はれる

40 芝かたむぎの金杉かねすぎ、毘沙門びしゃもんさんへ、遠ざかるとて、祈りやせ

ん

41 茶じん心で、小ぞうにほれた、小ぞうは茶な物、い

きな物

42 逢ふはたまさか、通ふは夜毎、逢はでかへすは、幾

度か

43 空を飛ぶ鳥、物い云ふならば、便り聞きたや、聞かせ

たや

44 主の寝顔を、よくよく見れば、かうも可愛い、物か

いな

45 びんと心で、錠ぢやうまへおろし、外ほかのかぎでは、あきや

すまい

46 女房持ちとて、惚れまいものか、女房去らして、わ

しがなる

47 手なし手なしと、おしやんすけれど、真の恋路に、

手はいらぬ

48 梅のつぼみと、恋しの文は、開くうちさへ、待ちか

ねる

49 いとしお方と、物い云ふ時は、何時かれ是と、愚痴に

なる

50 切れて未練で、又立ちかへる、今度逢ふのが、命が

け

51 せくなせきやるな、春まで待ちやれ、苦勞気兼ねを、

しての後

52 わしがやうなる、道楽肌だらくに、ほれたお前の、身の因

果

53 蝶よ花よと、育てて置いて、未は他人の、手につけ

る

54 たとへ千日、逢はずに居きれど、文の便りべんりで、未長く

- 55 神を拝むに、親より先へ、拝みますぞや、主<sup>ぬし</sup>さんを  
56 夕し御げんに、逢ひたさに、添はざ止むまい、此の  
病  
57 わしが思ふほど、思はぬ主に、思はせよとは、無理  
な事  
58 主を案じて、鏡に向かひ、かうもやつれる、物かい  
な  
59 たとへ両親、承知せぬとても、主とわたしが、胸に  
ある

P 潮来風 (略称：風)

- 1 よしや世の中、うらむは愚痴よ、うつりかはるは、  
世のならひ
- 2 三味の糸さへ、三筋にわかる、をなごころの、一  
筋に
- 3 松といふ字は、木偏きへんに公きみよ、公にはなれて、きは残  
る
- 4 宵の鐘なら、千里もひびけ、きかせたうもなや、明  
けの鐘
- 5 ためになる客、ひとりで寝かし、よくもはなれて、  
主のそば
- 6 風がうは気か、柳があだか、なびきやすさよ、ひと
- 7 雨のにくさよ、宵にはふれど、夜中に晴れて、物思  
ごころ
- 8 つな手車てぐるまぢや、わしやなければども、さらに思ひは、  
ひ
- 9 主ぬしをたよりに、勤めて居たが、ほんに思へば、いき  
やすまらぬ
- 10 人がくどかば、一度で落ちる、小野小町おのこまちの、末を見  
別れ
- 11 はつに迷ひし、お前の姿、ほかの女は、目にやつか  
ぬ
- 12 角田川かづのがわさへ、棹さかさしやとどく、なぜにとどかぬ、身  
のつらさ
- 13 思ひなほして、鏡にむかひ、なみだおさへて、薄化  
しやう
- 14 心一つで、どうともさんせ、やがて気ままに、なる  
わいな
- 15 主ぬしに逢うては、手ごとむだよ、智恵も思案も、な

- 16 いわいな  
泣いてくれるな、心が迷ふ、いつてかへらぬ、身ではなし
- 17 わしを思はば、身を大切に、ひとに世馴<sup>な</sup>れて、せじをよく
- 18 つらくあらうが、辛抱<sup>しんぼう</sup>さんせ、やがて気ままに、なるわいな
- 19 きたよきたよと、わしやなぶられて、せなかたたかれ、はづかしやはむだ
- 20 わけのある人、あるのも知らで、すゑの約束、する
- 21 勤めする身に、まことがあれば、つきも晦日<sup>みそか</sup>に、出るわいな
- 22 勤めする身に、未練があらば、末はつき出す、気ぢやものを
- 23 広い世界に、お前とわたし、せまく楽しむ、まどの梅
- 24 ままにならぬを、知りつつほれて、あはでしれるも、
- 25 心一つで、どうともさんせ、とかくおまへの、たつやうに
- 26 深い約束、あるのも知らで、長い年季<sup>ねんき</sup>を、まつはこけ
- 27 わたしや心に、ぢやうまへおろし、鍵はおまへの、胸にある
- 28 男<sup>おとこ</sup>みやうりか、いんぐわのつきか、たまにほれば、うは気もの
- 29 しよつてたたれぬ、年季<sup>ねんき</sup>を持ちて、末の約束、気がつよい
- 30 女房<sup>にようぼう</sup>やくそく、互ひの手くだ、まことあかして、なるものか
- 31 切れて仕舞<sup>しま</sup>へと、いふ人さんは、実<sup>じつ</sup>といふのか、しやくるのか
- 32 しんにこるのは、あの子の氣質<sup>かたぎ</sup>、異見するの、やすたいぢ
- 33 すべてお前は、此の頃わしに、あいそづかしの、事

- ばかり
- 34 女くらべにや、まけよもしやうが、のろいくらべにや、負けはせぬ
- 35 主の寝顔を、つくづく見れば、かうも可愛く、なるものか
- 36 心知らずの、末約束を、するもわたしが、こけかいな
- 37 日にち毎日、主まつばかり、主にまたるる、身がほしい
- 38 いたどころか、寝どこにこまる、人のお世話に、なりながら
- 39 女郎は面の皮、三味猫の皮、奥のおきやくは、こけの皮
- 40 ままよままのかは、三味猫の皮、鬼のふんどし、虎の皮
- 41 主の心と、せつたの皮は、かねがなければ、きれたがる
- 42 末もとどかぬ、恋路に迷ひ、是もわたしが、たらぬ
- ゆる
- 43 うちに悪玉、外には人目、またの御げんも、ままならぬ
- 44 たとへ逢はずと、心はぬしに、情をたてるが、わしがいぢ
- 45 たとへやもめで、くらせばとても、いやなお方と、添はりやうか
- 46 ままになるやうで、ままにもならぬ、人の恋路も、かうかいな
- 47 思ふお人を、まがきへまたせ、座敷するもの、うはのそら
- 48 心つくして、おさきにされて、こんなつまらぬ、事はなし
- 49 顔にや迷はぬ、姿にや惚れぬ、たつた一つの、心意気
- 50 小僧ごろの、果敢なさつらさ、胸に思へど、口にでぬ
- 51 たとへどのやうに、遠ざかるとも、かはる心は、な

- いわいな
- 52 誠しんじつ、情あるならば、ままになるまで、待た  
しやんせ
- 53 野暮なお方の、情あるよりも、意気で邪見が、わし  
や可愛
- 54 人の異見で、切れやうならば、初手にや心は、つく  
しやせぬ
- 55 ふつと意気ぢやと、思うたからに、義理もいとはず、  
浮き名たて
- 56 酔ひが醒めたら、顔あげさんせ、しんの話が、ある  
わいな
- 57 いつそ格子へ、来さんすけれど、人目おほくて、ま  
まならぬ
- 58 切れて未練と、いはんすけれど、義理にせまつて、  
切れたのさ
- 59 朝な夕なの、身じまひさへも、主の浮気で、おそく  
なる
- 60 心がらとは、わしやいひながら、どうか話も、耳に
- つく
- 61 主のうはさの、ある其の時は、わしが気ままの、茶  
わん酒
- 62 わしは此のやうに、こがれてゐても、主は知るやら、  
知らぬやら
- 63 どうで添はれぬ、悪縁ならば、香のけぶりと、なる  
わいな
- 64 篠をたばねて、つくやうな雨に、濡れて来たのに、  
かへさりよか
- 65 勤めする身と、空とぶ鳥は、どこが定まる、国ぢや  
やら
- 66 花の盛りを、勤めてくらす、末の落葉は、たがひら  
ふ
- 67 思ひきれとは、邪見な事よ、思ひ切りよか、今さ  
らに
- 68 硯ひきよせ、する墨よりも、音を忍びの、ちらし書  
き
- 69 沖の棧橋に、腰打ちかけて、たよりききたや、きか

- 70 お神様さへ、色恋なさる、まして勤めの、身ぢやも  
 せたや  
 のを
- 71 ままにならねば、浮世を捨てて、髪をおろして、尼  
 となる
- 72 どうでまかせた、わたしがからだ、死ぬもいきるも、  
 主しだい
- 73 二世とかはせし、妻さへ替はる、まして当座の、花  
 ぢやもの
- 74 みせのすががき、役所のつとめ、思ふお人と、こむ  
 らさき
- 75 何がなんでも、あの人さんに、そうて苦勞が、して  
 みたや
- 76 切れてしまふと、硯にむかひ、又も未練で、かへし  
 がき
- 77 舟ぢやまだるし、かごではおそし、ほんに気のせく、  
 四つの鐘
- 78 潮来すくよな、浮気なお前、諸事に心が、のりやす  
 いたこ  
 うはま  
 しよじ
- 79 主を思へば、このやうにやつれ、琴の爪さへ、まに  
 い  
 あはぬ
- 80 髪も結はずに、ただうかうかと、やつれしだいに、  
 情たてる
- 81 主の口癖、わしや聞き覚え、それをいうては、笑は  
 れる
- 82 雪のふる夜も、氷の上も、主と思へば、いとやせぬ  
 将棋盤なら、逢うてもやろが、内が碁盤で、目がお  
 しやうま  
 ばん  
 こばん
- 83 ほうい
- 84 年と今宵を、引き替へほしや、長し短し、ままなら  
 ぬ
- 85 主をかへして、二階へ上がり、胸をおさへて、茶わ  
 ん酒
- 86 忘れ草とて、引く三味線も、しんのいたこで、また  
 ふさぐ
- 87 そばに居ながら、ものいふ事も、ならぬやうには、  
 誰がした

- 88 部屋の遊びに、眉毛をかくし、女房ぶりして、笑  
ひ顔がほ
- 89 心うれしや、ゆふしの客は、利あげぐらゐは、ひけ  
そうだ
- 90 しんくお前は、かんざしさへも、思はず落ちる、た  
たみ算
- 91 難儀なんぎ硯すずりの、海山越えて、苦勞する墨、するわいな  
うて聞かそか、いはずに置いて、永く知らして、  
楽しもか
- 92 主は政宗、わしやなまくらよ、主は切れても、わし  
や切れぬ
- 93 切れた当座たうざの、其の四五日は、思ひ出しては、袖し  
ぼる
- 94 たまに首尾しゆびして、格子かぢ子の御見み、しれてかへして、茶  
碗酒
- 95 主とわたしは、妹山いもやま背山せやま、かはとかはとに、へだて  
られ
- 96 きのふきがら茶、けふあひみる茶、あすはなるみの、
- 97 88 紅べにしほり
- 98 かはる心は、男のならひ、思ひ過ぎては、又ふさぐ
- 99 これさまたんせ、まだ年ねんあるに、年ねんがあければ、主  
のつま
- 100 切れたお人に、途中で逢へば、塵ちりも這入はいらぬ、眼めを  
こする
- 101 切れて未練で、わしやなけれども、暑さ寒さを、と  
うてくれ
- 102 連れて行かねば、世間せけんがたたぬ、わしも行かねば、  
身がたたぬ
- 103 かねがあるなら、居ゐつづけさんせ、かへらしやんす  
な、わしや知らぬ
- 104 かうは誰たれした、半狂人に、みんなお前の、なすわざ  
よ
- 105 日暮れ日暮れにや、あなたの方を、見てはくよくよ、  
物思ひ
- 106 わしを真実しんじつ、思はんすなら、ながい年季ねんきを、待たし  
やんせ

- 107 ちらりちらりと、ふる雪さへも、つもりつもりで、  
深くなる
- 108 主とわたしは、羽織の紐よ、むねにしんくを、結び  
さげ
- 109 にくや待たせて、来ぬ夜の酒は、二日酔ひして、ゐ  
るわいな
- 110 辛い勤めも、今日此の頃は、酒でまぎれて、居るわ  
いな
- 111 嘘も商売、いはねばならぬ、それも其の夜の、客  
による
- 112 これさなきやるな、訳をいはず、ないちや理も非  
も、わかりやせぬ
- 113 未練いふのも、気のもめるのも、堅い証拠の、ない  
ゆゑに
- 114 其の日ぐらしの、朝顔さへも、かきにもたれて、日  
をくらす
- 115 かけるかけると、いはんすけれど、いうたお前に、  
かけられる
- 116 今朝も今朝とて、内証で異見、なんのやめましよ、  
今更に
- 117 これさなきやるな、はてやかましい、長く勤めは、  
させはせぬ
- 118 人目忍んで、おくりし文を、主は浮気で、枕紙
- 119 あんなお人と、いはんすけれど、顔と心は、雪と墨
- 120 主の心と、小杉の紙は、すこしもめると、切れたが  
る
- 121 主の来たこと、茶屋から知らせ、ほかの座敷は、上  
の空
- 122 逢ふはたまさか、通ふは夜ごと、逢はでかへすは、  
幾度か
- 123 年のあく日を、指をりかぞへ、未は添はうと、たの  
しみに
- 124 主を思へば、引く三味線の、ばちもしどろで、手に  
付かず
- 125 泪ながらに、硯にむかひ、ぐちとうらみを、書き尽  
くす

- 126 昔<sup>さき</sup>馴染<sup>なみ</sup>と、紅<sup>べに</sup>花<sup>はな</sup>染<sup>ぞめ</sup>めは、紅<sup>べに</sup>はさめても、香<sup>か</sup>が残<sup>のこ</sup>る
- 127 染<sup>ぞめ</sup>めてくやしき、江<sup>え</sup>戸<sup>と</sup>むらさきよ、もとの白<sup>しろ</sup>地<sup>ぢ</sup>に、  
してほしや
- 128 髪<sup>かみ</sup>も結<sup>むす</sup>ふまい、顔<sup>かほ</sup>をもせまい、主<sup>ま</sup>の機<sup>か</sup>嫌<sup>げん</sup>の、なほる  
まで
- 129 無<sup>む</sup>理<sup>り</sup>をいうたり、いひわけしたり、深<sup>ふか</sup>うなるほど、  
愚<sup>ぐ</sup>痴<sup>ち</sup>になる
- 130 逢<sup>あ</sup>うて間<sup>ま</sup>もなく、はや東<sup>しの</sup>雲<sup>のう</sup>に、にくや鳥<sup>かす</sup>が、つげわ  
たる
- 131 逢<sup>あ</sup>うて別<sup>わか</sup>れて、また逢<sup>あ</sup>ふまでは、文<sup>ふみ</sup>のたよりを、た  
のしみに
- 132 しんくさんすか、お顔<sup>かほ</sup>のやつれ、みんなおまへの、  
あるゆゑに
- 133 日<sup>ひ</sup>々に思<sup>おも</sup>ひの、わしやまさるとも、思<sup>おも</sup>ひ切<sup>き</sup>る気<sup>き</sup>は、  
ないわいな
- 134 いやなお人に、ちよちよらをいふも、みんなお前<sup>まへ</sup>の、  
あるゆゑに
- 135 人<sup>ひと</sup>のわる口<sup>くち</sup>、きた山<sup>やま</sup>しぐれ、くもりなき身<sup>み</sup>は、晴<sup>は</sup>れ
- 136 はでな浮<sup>う</sup>き名<sup>な</sup>が、わしや嬉<sup>うれ</sup>しくて、人<sup>ひと</sup>のそしりも、  
てゆく
- 137 世<sup>よ</sup>の義<sup>ぎ</sup>理<sup>り</sup>も
- 138 人<sup>ひと</sup>目<sup>め</sup>なりやこそ、隔<sup>へ</sup>ててくらす、かはらしやんすな、  
替<sup>か</sup>はりやせぬ
- 139 ひさしぶりにて、ゆふしの御<sup>ご</sup>見<sup>けん</sup> 無<sup>む</sup>理<sup>り</sup>をいうたり、  
なかせたり
- 140 鹿<sup>か</sup>の巻<sup>ま</sup>筆<sup>ひ</sup>、小<sup>こ</sup>杉<sup>すぎ</sup>の紙<sup>かみ</sup>へ、思<sup>おも</sup>ひ参<sup>まゐ</sup>らせ、候<sup>さう</sup>と
- 141 かはるまいとて、ほりものほらせ、またもうたがふ、  
恋<sup>こ</sup>の欲<sup>よく</sup>
- 142 なみだ眼<sup>め</sup>に持<sup>も</sup>ち、三<sup>さん</sup>味<sup>み</sup>線<sup>せん</sup>とれど、なかぬふりして、  
忍<sup>しの</sup>び駒<sup>こま</sup>
- 143 ままにならねば、互<sup>たが</sup>ひに顔<sup>かほ</sup>を、みても見<sup>み</sup>ぬふり、腹<sup>はら</sup>  
がたつ
- 144 文<sup>ふみ</sup>にくりごと、書<sup>か</sup>いてはやれど、まことよまんす、  
事<sup>こと</sup>ぢややら

- 145 思ふお人の、一座がくれば、うれしながらも、また  
ふさぐ
- 146 ままにならねば、壬生狂言よ、しかたばかりで、目  
でしらす
- 147 よしやわたしが、悪いにさんせ、日々に逢はれる、  
身ではなし
- 148 つらい勤めも、おまへがたより、それに邪見な、事  
ばかり
- 149 せじで笑うて、勤めて居ても、思ひだしては、涙ぐ  
む
- 150 西も東も、他人の中に、独りふさいで、居るわいな  
宵の口説くどまに、あしたの雨は、晴れぬ思ひを、居続け  
に
- 152 ゆふし御見ごけんで、また逢ひたさは、添はざやむまい、  
此の癖は
- 153 問はず語りに、わしやいひ出して、浮き名たつほど、  
惚れてくる
- 154 聞けば聞くほど、心もすまず、逢へば因果いんぐわに、くる
- 155 めらる  
けふよあすよと、楽しむ中は、この手柏てがしらの、うらおもて
- 156 思ふまいぞや、思うたとても、ままに逢はれる、身  
ではなし
- 157 顔が見たさに、用なき前まえを、ゆきつもどりつ、立ち  
どまり
- 158 酒と煙草たばこを、ひとつに飲めば、思ひだしたり、忘れ  
たり
- 159 死んでまた来る、道さへあらば、死んでみせたや、  
つらあてに
- 160 起請きじゆかいても、添はねばならぬ、じやうは互ひの、  
胸にある
- 161 つくなつきやるな、八まん鐘を、たまに首尾した、  
一夜ひとよさを
- 162 人の噂も、七十五日しちじふごにち、ないて過ぎ行く、ほととぎす
- 163 其の日其の日の、朝顔あまがはさへも、咲いて見せたり、ふ  
さいだり

- 164 明けにやあきらめ、帰りもするが、ままにならぬは、  
くれの鐘
- 165 明けの鳥は、にくむといへど、うちのお首尾を、知  
らせ鳥
- 166 飲めよさわげよ、今宵がかぎり、あすは逢ふやら、  
逢はぬやら
- 167 用がおつすと、まがきへ呼んで、ひとめしげけりや、  
せじばかり
- 168 芸者する身は、粹ぢやといへど、しんの話にや、愚  
痴になる
- 169 人のいやがる、道楽肌を、すいた私が、身の因果  
髪はむしられ、しのぎは折られ、どこで立てましょ、  
わしが顔
- 170 主があるゆゑ、うちのものに、きげんきづまを、  
とるわいな
- 171 主をかへして、其の跡見れば、どちら向いても、夜  
着の袖
- 172 かはるまいとて、髪まで切らせ、延びぬ其の間に、
- 173 切れるとは
- 174 はやく年あけ、廓をはなれ、娘来たかと、いはれた  
い
- 175 火鉢ひき寄せ、灰かきならし、主の名をかき、涙ぐ  
む
- 176 雉子もなかずば、うたれもせまい、わしも逢はずば、  
思ふまい
- 177 いやと思へば、姿も顔も、おぼろ月夜の、影もいや  
床もききやれよ、枕も聞きやれ、若い身そらで、ひ  
とりねる
- 178 あまり辛さに、れんじへ出でて、月を詠めて、三下  
がり
- 179 いろぢやいろぢやと、浮き名をたてて、枕ならべた、  
夜半もなし
- 180 いふに云はれぬ、我が胸の中、それにわからぬ、事  
ばかり
- 181 祝ひさざめく、若松さまよ、きみもさかえる、御万  
歳
- 182

- 183 居ゐるにや居ゐられず、帰かへるにつらい、心知しらずの、今朝けさの雪
- 184 いまは枯かれ木の、えだにもさんせ、こころ根ねがありや、花はなが咲さく
- 185 花はなはいろいろ、五色ごしきに咲さけど、主むすにまさりし、花はなはない
- 186 箱根箱根越こえても、そはねばならぬ、明日あしたはなにはに、およぶとも
- 187 春はるは世よに出いる、草木くさきもあるに、わたしや枯かれ野のの、きりぎりす
- 188 堀ほりの舟ふねやど、田町たまちの茶屋ちやも、客きやくをまつちの、山やまのしゆく
- 189 鳥とりにやうたはれ、鐘かねにはせかれ、夜着よぎにもたれて、思案しあんがほ顔かほ
- 190 鳥とりもなくなよ、鐘かねをもつくな、可愛かわい男おとこに、逢あふ夜よさ
- 191 茶屋ちやの娘むすめと、将棋しょうぎのこまは、金かねにならねば、歩ああしらひ
- 192 千歳ちとせ逢あはずに、暮くらしたとても、情じやうはたがひの、胸むねにある
- 193 主むすの身振みぶを、朋輩ほうばいしやう衆しゆが、真似まねてわたしを、なぶらんす
- 194 主むすの事ことゆるゑ、役所やくしよにゐても、こぼす涙なみだで、文字もんじをか
- 195 主むすに大門だいもん、わしや楽しみたのしみに、もはやくるかと、格子かうし先まへ
- 196 主むすと私わたくしは、ふうりん蕎麦そばよ、切きれてゐながら、のびたがる
- 197 主むすのうはさを、潮来うたごでひけば、こけがはやして、うれしが
- 198 主むすのかたみの、いれぼくろさへ、今は果敢はかない、灸まきのあと
- 199 主むすに逢あふとて、海河かいが越こゆる、恋こひは思案しあんの、帆ほかけ舟ふね
- 200 ぬしと添そはねば、わしやいつ迄いたも、ねぐら定めぬ、やめめ鳥とり
- 201 逢あうて別わかれが、なければよいが、逢あはぬつらさを、

- かへりみよ
- 202 お前つりぎを、わしや池の鮎よな、つられながらも、またかかる
- 203 逢うていひたき、其のかずかずを、顔かほにかくして、たたみ算
- 204 思ふ客衆は、待てども見えず、待たぬ客衆の、しげしげに
- 205 わたしや相模まがみで、おまへは上総かづさ、じやうのないのは、あたりまへ
- 206 わしが手管てくだを、車にのせて、野暮やぼなお客に、ひかせたや
- 207 わたしや三囲みかほぬしや白髭しろひげよ、ねんのあくのを、待まち乳山ちやま
- 208 わしが思ひの、こい花色を、主かじは浅黄あさぎに、おもはんす
- 209 わしとおまへは、竹やら木やら、人は縄やら、ゆひたがる
- 210 顔かほに紅葉もみぢを、ちらすが無理か、腹が龍田の、ふたごころ
- 211 宵よるの口説くどきの、そのむり酒を、さます夜中の、袖そでの梅
- 212 宵よるにちらりと、三日月男せきつきおとこ、後のちに来るとは、嘘うそばかり
- 213 夜の八やつには、木かやもねるに、勤めする身と、ほととぎす
- 214 四谷ぢやとんびの、糸目が切れて、いまはあげるに、あげられぬ
- 215 たとへどのやうな、風吹けばとて、きれてくれるな、とんびだこ
- 216 積もる話は、わしや初会はつわいから、とけていはれぬ、雪の水
- 217 勤めする身と、萌黄もえぎの蚊帳かやは、客につられて、夜を明かす
- 218 つつみかくせど、奥山すすき、いつか穂にでて、あらはるる
- 219 年ねんはあけても、他国はいやよ、山谷田町さんやか、町のうち

- 220 梅うめの苔こけと、おまへの文ふみは、開ひらくうちから、待まちちかね  
る
- 221 梅うめも八重やへさく、桜さくらも八重やへに、なぜに朝顔あさがお、ひとへさ  
る
- 222 梅うめに手てがありや、来きる鶯うぐいすも、あだな初音はつねを、だすわ  
く
- 223 うそか美うつくか、まことかうそか、殺ころし文句ぶんこうで、迷まよはせ  
る
- 224 松まつにほのほの、夜よは明けあけの春はる、笑顔えがほつくるや、福寿ふくじゆ  
草くさ
- 225 ふたりうち連れ、うれ椎しほの木の、春はるをみめぐり、す  
み田川
- 226 富士ふじの山やまほど、浮うき名なは立たてど、露つゆのまほども、そ  
ひもせぬ
- 227 恋こひにこがれて、なく蟬せみよりも、なかぬ蛍ほたるが、身みをこ  
がす
- 228 ころがらとは、わしや云いひながら、ひよんな苦勞くろう  
を、するわいな
- 229 声こゑちやよばれず、手てちやまねかれず、歌うたのこころで、  
さとらんせ
- 230 こぬにあまたの、山やまほととぎす、ふるはむらさめ、  
わがなみだ
- 231 こひの痴話ちわ文ぶん、鼠ねずみにひかれ、主ぬしのこんたん、棚たなにあ  
る
- 232 手鍋てなべさげると、口くちではいへど、実まは乗りたや、玉たまの  
興きん
- 233 明あけて正月しょうげつ、やるはつ文ぶんは、くぜつ文句ぶんこうの、うそは  
じめ
- 234 逢あはぬつらさを、こがれしよりも、逢あうて別わかる、  
うき涙
- 235 あまの捨すて舟ふね、寄よるべもしらで、ひとりなみだに、  
ふし沈しづむ
- 236 あまりつらさに、潮来うたてをひけば、なまじいたこで、  
思おもひだす
- 237 三味さんみの糸いとさへ、三筋みつぢにわかる、なぜにわからぬ、主ぬし  
の気きは

- 238 主は松虫、わしや鈴虫よ、逢ふも別れも、なくばか  
り
- 239 さいた盃さいたさかづき よく見てあがれ、なかに鶴亀つるかめ、五葉ごえふの松
- 240 さてもやさしや、蛍あせの虫は、しのぶ座敷へ、火をて  
らす
- 241 きれたきれたと、なげくな年増としま、水に浮き草、根は  
たえぬ
- 242 きれる盃さかづき、蒔絵まきゑの夷あま、笑ひ顔わらほして、眼めに涙
- 243 夢になりとも、お顔かほが見たや、夢ぢや浮き名も、た  
ちやせまい
- 244 夢かうつつか、枕まくらの下で、可愛おまへの、声がする
- 245 実じつをつくして、しゆかうの文ふみも、当座たうざすぎれば、ま  
くら紙
- 246 人目ひとめ忍んで、相染あひやめ衣ぎぬの、みずに一ふで、かきつば  
た
- 247 すずみさしきで、思はずころび、あせになる身の、  
染め浴衣ゆかた
- 248 ものものはずに、ふんだり蹴かたり、壬生みぎの踊まぢや、
- 249 あるまいし  
お前まへ松虫、わしやきりぎりす、おなじ勤とめの、籠かごの  
鳥
- 250 夢でこがれて、うつつでないて、さめて悲しき、床とこ  
の内
- 251 人がどのよに、云いはうとままよ、わしが心こゝろは、五大ごだい  
力ちから
- 252 おまへ思へば、照る日もくもる、さえた月夜つきよも、や  
みになる
- 253 浮き名立うきなたちてられ、添そはねばならぬ、主ぬしも立つまい、  
わしが身みも
- 254 梅うめにうぐひす、紅葉もみぢに鹿かよ、わしとおまへは、魚うおと  
水みづ
- 255 ままになるなら、さざ浪なみよせて、主ぬしをほにあげ、わ  
しは舟
- 256 にげて日陰ひかげの、身みとなるよりも、こころ定さだめて、末すえ  
をまつ
- 257 いとふまいぞや、主ぬしゆゑならば、石いしの枕まくらに、針はりの床とこ

- 258 寝ては忘れる、物とはいへど、なんの忘らりよ、う  
つつにも
- 259 しんの話も、人ゆゑゑんりよ、むだでわかれて、あ  
とくやむ
- 260 眼には涙を、わしや持ちながら、いやな座敷の、せ  
じ笑ひ
- 261 女心と、蛍の虫は、くちで云はずに、身をこがす  
妹背山では、たがひに思ふ、わたしやせ山で、かた  
思ひ
- 262 主を待つ夜は、人こそ知らね、時をかぞへて、たた  
み算
- 263 かどにたてたる、女松に男松、なかを取りもつ、し  
めかざり
- 264 さつき五月雨、よもぎに菖蒲、わしはおまへに、の  
ぼりぎを
- 265 すみとすずりの、こひなかなかを、たれがしよにん  
に、水をさす
- 266 淀のくるまは、水ゆゑまはる、わたしや主ゆゑ、気  
に、水をさす
- 267 寝ては忘れる、物とはいへど、なんの忘らりよ、う  
がまはる
- 268 ひるはうかうか、まぼろし心、夜は夢見て、あひの  
山
- 269 せんじ御見が、別れとならば、神も仏も、ないかい  
な
- 270 君の心は、かりがね燕、来ると思へば、はやかへる  
君の心は、うすがきなれど、わたしやくよくよ、松  
葉色
- 271 人の目顔を、忍ぶの里よ、わしが願ひは、かくれ顔  
人は夏瘦せ、するとはいへど、わしはおまへが、し  
やくの種
- 272 ころろばかりを、かよはせおいて、せみのぬげがら、  
身はここに
- 273 わしが黄菊を、まだ白菊の、主にまことは、なしの  
花
- 274 ままよ義理をも、世の誠をも、しよせん浮き名の、  
たつ上は
- 275 ふさぎ姿で、鏡にむかひ、なみだもらして、うす化

- 278 粧しやう ゆふし御見ごげんで、又なつかしく、死なざ止むまい、この癖くせは
- 279 すこしやすまうと、うたたねすれば、主ぬしの夢見て、又ふさぐ
- 280 空とぶ鳥が、ものいふならば、たよりききたや、きかせたや
- 281 年ねんに一度いちどの、七夕たなばたさへも、はれて逢はれる、夜半よなもある
- 282 しらを切るのも、とほけているも、先にしよにんの、あるゆゑに
- 283 けふもけふとて、おまへの噂うはさき、日にはいくせの、思ひやら
- 284 夢で逢うては、うつつで別れ、ほんに果敢はかなや、わしが身は
- 285 見れば見るほど、なぜこのやうに、心がらとて、顔かほのやせ
- 286 朝な夕なに、おまへの方を、見ては思はず、袖しほ
- 287 はなればなれの、住居すまひをすれば、またもうたがふ、ことばかり
- 288 たまに鳥渡とわたの、御見ごげんをすれば、むねの思案しあんも、あとやさき
- 289 二世にせいとかはせし、御見ごげんもほんに、つらや果敢はかなや、水の泡
- 290 しばし逢はねば、心でないて、人目多けりや、笑ひ顔
- 291 とめて置きたや、今宵こよひもあすも、ままになるなら、いつまでも
- 292 ももとせ逢うても、まだ飽きたらず、千とせ寝てみん、恋こひのよく
- 293 かどにさしたる、豆ひいらげは、おにとしよにんを、よけるため
- 294 あひたうてあひたうて、夜のめも寝ずに、やくやもしほの、身もこがしつ
- 295 目に見えて、手にはとられぬ、あの月と星、こがる

- る此の身は、ままならぬ  
 296 まつら佐用姫、石にもなろが、わしが思ひは、水の泡
- 障子明くれば、卯のはなかをる、月がないたか、ほととぎす  
 297
- 主の夢見て、笑うて起きて、あたりみまはし、ひとり言  
 298
- 主は書く筆、わしや半切よ、かかれながらも、のびてゆく  
 299
- 人にや人鬼、ないとは云へど、しよ人よる人、みな鬼ぢや  
 300
- いつそ便の、ないのもましか、ひらく文より、ふさぐ胸  
 301
- 思ふお方と、一座をすれば、むねはたがひに、ふさぎどし  
 302
- もはやたがひに、心もわかり、末のかためで、またふさぐ  
 303
- 夢のやうなる、御見ごけんに別れ、今に心が、うかうかと  
 304
- ぬれぬさきこそ、露をもいとへ、やぶれかぶれに、なるからは  
 305
- けふもつくづく、おまへの噂うはさ、いうてとどかぬ、身のつらさ  
 306
- すいた水仙、乱菊柳、こころ石竹、気は紅葉  
 307
- 異見されては、返事はすれど、胸にたえぬは、主の事  
 308
- むかふ鏡の、其の中みれば、主のお顔が、ちらちらと  
 309
- 逢へば逢ふとて、御主を案じ、逢ひが遠けりや、また苦勞  
 310
- かはい男に、をだまきつけて、よせておきたや、我がそばへ  
 311
- 仇ぢや浮気と、いはんすけれど、胸の鏡は、五大力  
 312
- 実はあれども、見さんす通り、役所すま居で、是非がない  
 313
- 心間違や、実なる異見、鬼か鬼神の、やうにきく  
 314
- 身を恨み、ふさぐやさきへ、来たよと云はれ、つら  
 315

316 さ忘れて、笑ひ顔  
潮時しほどき考へ、よう暇ひまかいて、なにを目あてに、来るも  
のか

317 親の為とて、この年までも、金がかたきの、引き肩  
毛

Q 新編常陸国誌 所収「潮来節」〔略称・常〕

- 1 しだり柳やなぎに、桜さくらをさかせ、梅うめの匂におひを、もたせたや
- 2 逢あうたうれしき、別わかれのつらさ、逢あはぬ昔むかしが、まし  
かいな
- 3 嶺みねの桜さくらに、谷間たにまの紅葉もみぢ、梢すずまたか高たかさに、届とどかねば、御お  
顔見かほみながら、儘ままならぬ
- 4 今日けふの日ひもたち、又明日またあすの日ひも、氣きを紅葉もみぢばの、龍たつ  
田川たがは、流れはかなき、勤つとめの身み
- 5 涙なみださき立ち、ただ一言ひとことも、いはで別わかれた、胸むねの内うち  
染そめてくやしき、ある紫むらさきも、本もとのしら地ぢが、わしや  
恋こいし
- 7 日暮ひぐれれがたには、ただ茫然ぼうぜんと、空そらを詠なめて、涙なみだぐむ
- 8 夢ゆめの浮世うきよに、みるゆめさへも、みるが憂うれき世よの、な  
らひとて
- 9 行ゆくくも帰かへるも、忍しのぶのみだれ、かぎりしられぬ、我わ  
が思おもひ
- 10 陰かげになりたや、おまへの陰かげに、離はなれがたなき、わし  
が身みは
- 11 浮うき草くさの、今日けふは昔むかしの、岸辺きしべに咲さきて、日々ひびの心こころも、  
飛鳥川あすかがは
- 12 ちらりちらりと、降ふる雪ゆきさへも、積つもり積つもりて、  
深ふかくなる
- 13 年としに一夜ひとよの、棚機たなはたさまも、わしが思おもひに、益ましやし  
よまい
- 14 なまじなまなか、始はじめまりなくば、かほどこがれば、  
せぬわいな
- 15 逢あうた夢見ゆめみて、笑わらうてさめて、あたり見廻みまはし、涙なみだぐ  
む
- 16 思おもひ切りても、日ひの暮くれ暮ぐれは、思おもひ返かへして、独ひとり  
泣なく

- 17 あまりつらさに、出でて山見れば、雲のかからぬ、  
山もなし
- 18 柳よ柳、すぐなる柳、いやな風にも、靡かんせ

R 潮来図誌 所収「潮来節」(略称:図)

- 1 柳よ柳よ、直ぐなる柳、いやな風にも、なびかんせ
- 2 きみは三夜の、三日月さまよ、宵にちらりと、見たばかり
- 3 わしが心が、竹にもあらば、わつて見せたや、このむねを
- 4 さまよかしまに、神あるならば、あはせたまへや、今一度
- 5 いたこ出島の、十二のはしを、行きつもどりつ、しあん橋
- 6 恋にこがれて、なくせみよりも、鳴かぬ蛩が、身をこがす
- 7 いたこ出島の、まこもの中に、あやめ咲くとは、つゆしらず
- 8 恋のちわぶみ、風にひかれ、ねずみとるよな、猫ほしや

## S 音曲神戸節 (略称…音)

- 1 いろの恋のと、扱きやかましい、人のせぬ事、するぢ  
やなし
- 2 いちこそはうと、二世迄かけて、てうしあはする、  
三下きんさがり
- 3 いまのおきやくに、誠があれば、たてしはしらに、  
花が咲く
- 4 いきとはりなりや、わしや淀川よどがはの、水みづの流れも、と  
めて見しよ
- 5 いはばいはんせ、かきねにしをり、くさり繩なはとも、  
思おもやせん
- 6 いやなおかたに、むりとはゆはぬ、きれてよければ、
- 7 いやよあいたぞ、此この家のつとめ、はやうねんあき、  
ぬしのつま
- 8 いやな男おとこに、なびかうよりも、きれぬえにしを、き  
るがまし
- 9 いろでやせるか、しんくがますか、ただしつとめが、  
くに成るか
- 10 いかにわたしが、いたらぬとても、かうはなさるる、  
はずがない
- 11 いきで初心まごころで、男おとこもよいが、情じやうのないのが、玉たまにき  
ず
- 12 いやなおきやくも、ぬしどうぜんに、しゅびをつく  
ろふ、そのつらさ
- 13 いつそやぼなりや、のらうちやせまい、やほでない  
から、のらをうつ
- 14 いろがくろうて、気がきくならば、御茶屋がらすは、  
やほでない
- 15 いやな座ざしきに、ゐる夜のながさ、なぜかこよひの、

- みじかさは  
 16 らうかづたへに、ぬけてはきたが、こすにこされぬ、  
 かべひとへ
- 17 六十むくにで、そはれぬ時は、唐へいてなと、そう  
 てみしよ
- 18 花といふじで、さかぬもくやし、さけばみがなる、  
 はづかしや
- 19 はらが立つかえ、是しき事に、かほにもみぢを、ま  
 きちらす
- 20 橋のうへから、文とりおとし、水にふたりが、名を  
 ながす
- 21 はおりかた手に、帳面さげて、かよひづとめは、  
 一つの事
- 22 はらのたつ時は、けんくわもするが、後であやまる、  
 ほれ証拠
- 23 はやうやめたや、かいどりづまを、ぬしのおそぼで、  
 はりしごと
- 24 はやう此の家を、めでたくかしく、女房がほして、
- くらしたい  
 25 はやうこのやを、めでたくかしく、つまよきたかと、  
 ゆはりたい
- 26 はやう此の家を、めでたくかしく、こはいさとぢや  
 と、ながめたい
- 27 二世とかはせし、つまさへかはる、ましてつとめの、  
 身ぢやものを
- 28 にしも東も、南もやめて、わしがおもひは、北の  
 た
- 29 西にさくはな、南でひらく、北に一こゑ、ほととき  
 す
- 30 にくいやらうめは、夜昼かよふ、すいたたれかは、  
 ままならぬ
- 31 にげる思案も、手立てもつきた、もはやしぬより、  
 外もなし
- 32 女房さらずと、わたしものかず、ぎりとせけんの、  
 たつやうに
- 33 女房されとは、わしやゆはなんだ、ほかにしやう

- 34 女房にようぼう去るよな、うは気な人に、すゑのやくそく、  
が、ないのやら  
なる物か
- 35 女房にようぼうたたきだし、子はふみころし、あとのごさい  
は、是これここに
- 36 女房にようぼうよばねば、親への不孝ふこう、よべばたれかへ、ぎ  
りたたず
- 37 女房にようぼうあるのも、子のある事も、しようちしながら、  
腹はらがたつ
- 38 女房にようぼうあるのも、承知しょうちでほれた、とどのつまりは、  
どう成ると
- 39 ほれてみせるは、つとめのならひ、それをうちこし、  
女房にようぼうがほ
- 40 ほかにます花、有るのも承知しょうち、おさきながらも、す  
ゑながう
- 41 ほれたしようこにや、おまへのくせが、みんなわた  
しが、くせとなる
- 42 ほれたしようこにや、あひたうてならぬ、外ほかに巨細こさい
- 43 ほれたしようこにや、とめとてならぬ、かへらしや  
は、ないわいなあ  
んすが、ぬしのため
- 44 ほれてゐながら、氣づよい事を、いうていなして、  
あとくやし
- 45 ほれたかほすりや、ふんだりけたり、まりのけいこ  
ぢや、有るまいし
- 46 ほれたかほすりや、ふんだりけたり、誠まことほれたら、  
ころす氣か
- 47 ほれてほれられて、あひほれとやら、とどのつまり  
は、どうなさる
- 48 ほれてみやんせ、かねこそなけれ、金のかはりの、  
こころいき
- 49 ほれてつまらぬ、他国の人に、すゑはからすの、な  
きわかれ
- 50 ほれてつまらぬ、ものとはしれど、いろはしあんの、  
外ほかとやら
- 51 へだてられたる、海川うみなはよりも、こすにこされぬ、か

べひとへ

52 返事まつ身は、日にせんたびも、みせやうかに、  
たちくらす

53 としは卯のとし、其の名はささぬ、あはせおくれよ、  
今いちど

54 としは廿七にじふしち、その名はささぬ、ままになるみが、  
もたせたい

55 としは三十さんじゅうだい、其の名はささぬ、ひろいどこかに、  
ただひとり

56 となり座しきで、ひく三味しゃみせんは、わしをまよはず、  
五ご大だいりき

57 とふにおちいで、かたるにおちる、あくじせんと、  
しれやすい

58 とかくうき世が、ままなるならば、いとしおまへに、  
かねもたせ

59 とどのつまりを、あんじるやうな、浅いほれやうは、  
せぬわいな

60 とのごもつなら、廿四にじゅうしか五六、つづやはたちは、う

はのそら

61 とてもそはれん、あく縁えんならば、髪をおろして、あ  
ま寺へ

62 とらは千里の、やぶさへこすに、越すにこされぬ、  
かべひとへ

63 どうでこよひは、つぶきにやならぬ、すゑでおかほ  
は、たててみしよ

64 どこかがよひを、とめよもむりか、わしがたてつく、  
人ぢやなし

65 どてのかはづの、なくのも道理、水にあはずに、あ  
るからは

66 どこの土場どばでも、長半ながなかばでも、さらし手拭てぬぐひ、こちの  
人

67 ちわのこたつに、なさけのふとん、いろをひきだす、  
ちやわん酒

68 ちやうのはかまの、ひだとるよりも、ぬしの心が、  
とりにくい

69 ちわも悋りん気も、くぜつくぜつのあまり、明けのからすが、

## 仲なほり

- 70 りん気せまいぞえ、はらたちやせまい、どうで女  
房ばうに、成るぢやなし
- 71 りこうだてすな、さしでやしやんな、人がかれこれ  
いふぞいし
- 72 ぬしのくる夜は、よひからしれる、しめたしごきが、  
しやらどける
- 73 ぬしをかへして、その跡見れば、どちらむいても、  
よぎのそで
- 74 ぬしにはあはぬ、手管てくだとやらも、ぐちなわたしが、  
あるゆゑに
- 75 ぬしはわたしを、他人のやうに、へだてさんして、  
さまといふ
- 76 ぬしにようにた、ややでも産んで、川かはといふじで、  
ねてみたい
- 77 ぬしはわしゆゑ、わしやぬしゆゑに、人にうらみは、  
ないわいな
- 78 ぬしはたち鳥、ぬしある花よ、思ひなほして、後のちの

## 花

- 79 ぬしのこぬ夜は、はやねてゆめに、逢うて思ひが、  
はなしたい
- 80 ぬしがあるゆゑ、おきやくはたえた、ままとおもへ  
ば、なんのその
- 81 ぬしのかんしやく、ひごろの氣しつ、夫それを苦にする、  
わしぢやない
- 82 ぬしのおいでを、いつぢやと聞けば、おそて此の月、  
すゑつかた
- 83 るらうさすのも、みなわたしゆゑ、あはせたまへよ、  
むすぶがみ
- 84 るいは有るまい、どこかにひとり、おせのたかさよ、  
齒はのしろさ
- 85 親もたいせつ、此の身もだいじ、けれどたれかにや、  
かへられぬ
- 86 おもしろいときや、おまへとふたり、くらうする時  
は、わしひとり
- 87 おもひだすまい、とはおもへども、いろはしあんの、

- 88 おつと承知承知、五三の桐は、どこの紺屋が、そめ  
たやら
- 89 親もとくしん、此の身もしようち、ねんがじやまし  
て、そはしやせん
- 90 おまへそのやうに、雪花菜をくうて、のどのつまり  
は、どうなさる
- 91 おもひさそより、ころしてしまへ、死ねばどこかの、  
つちとなる
- 92 おまへ前髪、とらんすならば、わしもとめましょ、  
ふり袖を
- 93 男ぢくしやうな、いぬよりおとり、いぬは尾もふる、  
あとも見る
- 94 おまへひとりを、たてよとすれば、岩やつるぎの、  
中にすむ
- 95 をとこみやうりか、いんぐわのはしか、偶にほられ  
ば、女房ある
- 96 お竹しの竹、心のやたけ、むねにあり竹、あかした
- 97 おもふわたしに、思はぬおまへ、思はせうとは、わ  
しがむり
- 98 あうて嬉しき、わかれのつらさ、あうてわかれが、  
なかよかる
- 99 あうてうれしき、わかれのつらさ、夫にじやけんな、  
事ばかり
- 100 あうた夢みて、わらうてさめる、あたり見まはし、  
泪ぐむ
- 101 おもふまいとは、思ひはすれど、またもみれんで、  
返す書き
- 102 思ひ出す程、泪がさきへ、おちてながるる、いもせ  
川
- 103 おつるこのはにや、かぎりもあるが、かぎりないぞ  
え、我がおもひ
- 104 親のいけんも、聞かないわしが、ぬしにゆはれて、  
あらたまる
- 105 男よいのに、ほれたぢやないが、ぬしの持ちまへ、

## 諸事万事

- 106 あうて嬉しき、わかれのつらき、わたしや心が、ぐちになる
- 107 あうて咄はなさうと、思うてるたに、あうてなま中、むねせまる
- 108 あうて間もなく、はやしののめの、にくやからすが、つげわたる
- 109 男ぢくしやうな、ふたみちかけて、つとめすりやこそ、聞きわける
- 110 思ひきれとは、しねとの事か、しねば野山の、つちとなる
- 111 おもひきれきれ、あのきりぎりす、おもひきれきれ、きれとなく
- 112 思ひきれきれ、きらねばならぬ、かねのくさりも、きりやされる
- 113 あふはたまさか、かよふは毎夜まよ、あはで帰かえすは、いく度たびか
- 114 おまへへやずみ、わしや年の内、天井てんじやうつかへて、
- 115 おまへへやずみ、わしやねんのうち、人目ひとめ堤つみが、ままならぬ
- 116 わけのあるだけ、もの猶なほいはず、あらたまるほど、かんがつく
- 117 わしとおまへは、はおりのひもよ、しかとむすんで、むねにある
- 118 わしはあふみで、恋こがるれど、おまへあはづの、気まま酒
- 119 わしが事かえ、志賀から崎の、ひとつ松とは、たよりない
- 120 わしとおまへは、よるふる雪よ、人にしらすさず、ふかうなる
- 121 わしはひとへに、さく花なれど、つとめすりやこそ、やへにさく
- 122 わしがけんしは、此の町ちやうにやないぞ、二丁ちやうも三丁ちやうも、かみの丁ちやうに
- 123 わしがおもひは、あの森下の、おつる木の葉の、か

- ずよりも
- 124 わしがきものを、鼠にそめて、おまへ猫にして、飛  
び付かせよ
- 125 わしは七つななに、いなねばならぬ、内をいはずと、そ  
の羽おり
- 126 わしがとのごで、ほめるぢやないが、色の小黒い、  
背のひくい
- 127 わしによう似た、あのほととぎす、ないてあかして、  
居ゐるわいなあ
- 128 わしが思ひと、そら飛ぶとりは、どこどこのいづくに、  
とまるやら
- 129 わしはどどいつでも、まぎれもせうが、さぞや御ご  
帳ちやう合あひ、お気づまり
- 130 わしがむねでは、火をたくけれど、けむりださねば、  
ぬしやしらぬ
- 131 わしが思ひは、是これより西に、ながいのれんの、その  
なかに
- 132 わしとおまへは、あひおひの松、月を画まにして、か
- へり酒
- 133 わしが事かえ、川ばた柳、水の流れを、見てなげく
- 134 わしはぬしない、野にさく花よ、をらばをらんせ、  
ちらぬさき
- 135 わしはおまへに、おまへはわしに、ほれたげなぞえ、  
あひほれに
- 136 わすれ草にと、三味しやみせんひけば、歌のもんくで、思  
ひだす
- 137 かねて手くだと、わしやしりながら、だまされてさ  
く、むろの梅うめ
- 138 かはいかいなの、いれぼくろさへ、今ははかない、  
灸きのあと
- 139 かはす枕が、ものいふならば、わたしやはづかし、  
とこのうち
- 140 風がうは気か、柳があだか、かはりやすきは、ひと  
ごころ
- 141 かみもゆふまい、みじまひすまい、いとしたれかが、  
あるぢやなし

- 142 かみもゆふまい、夜化粧よげしやうもせまい、こんどおまへに、  
あふまでは
- 143 かねがなるかえ、しゆもくがなるか、かねとしゆも  
くの、あひがなる
- 144 かづき木綿もめんの、じやうなしをとこ、よくもだました、  
だまされた
- 145 かきののれんに、何やとそめて、ふたりくらすは、  
いつの事
- 146 かきののれんに、何やとそめて、なかで帳とやうあひ、こ  
ちの人
- 147 かぎりある身の、かぎりをしらで、甲斐かひもなき世を、  
うちなげき
- 148 かねがゐもりの、くろやきならば、おもふ男を、ま  
まにする
- 149 かへらしやんせと、いうたがむりか、あけの大須おほすの、  
一番いちばんだいいこ
- 150 かはゆけりやこそ、七しちりもかよへ、にくて七里が、  
かよりはりよか
- 151 かみはばらばら、いろ青あきざめて、やつれすがたも、  
ぬしゆゑに
- 152 かほでわらうて、心で泣いて、いやなぎしきに、居ゐ  
るばやい
- 153 かへしともない、わたしが心、かへらしやんすが、  
ぬしのため
- 154 よひはまぎれて、くらしもしやうが、もはや九ここのつ、  
なんとしよう
- 155 よさへ明あくれば、はやきぬぎぬの、にくやからすが、  
つげわたる
- 156 よごとよごとに、まくらがかはる、枕まくらかはらぬ、つ  
まほしや
- 157 よこに車くるまな、おまへの心、それをかざとる、身のつ  
らさ
- 158 よひがさめたら、かほあげさんせ、しんなはなしが、  
あるわいな
- 159 ためになるきやく、またほれたきやく、ふたりきた  
夜の、そのつらさ

- 160 たとへかりんの、どうなるとても、だいてねじめの、  
 たがやさん
- 161 たとへせかれて、ほどふるとても、えんとじせつの、  
 すゑをまつ
- 162 竹にすずめは、しなよくとまる、とめてとまらぬ、  
 我がおもひ
- 163 たてよたてよの、月日はたたで、あだなうき名が、  
 先へたつ
- 164 たてよたてよの、月日はたたで、たたせともない、  
 きやくがたつ
- 165 だまの御げんに、逢ふ其の夜さは、嘶するもの、あ  
 とやさき
- 166 たつはかみそり、たたぬはしんしやう、あるはしや  
 くせん、ないはかね
- 167 たとへいづもで、むすんだえんも、むすびなほして、  
 すいたどし
- 168 たてばしやくやく、すわればぼたん、あるくすがた  
 は、ゆりの花
- 169 たとへまさむね、めいさくぢやとて、わしとたれか  
 の、仲きれぬ
- 170 たれもしるまい、ふたりがなかは、懸子硯の、筆が  
 する
- 171 たたみざんして、待つ夜のながさ、ぬしと寝る夜の、  
 みじかさは
- 172 れん中じやけんに、おまへのうは気、じよしに心は、  
 ゆるされぬ
- 173 れんがはいかい、茶の湯のけいこ、あだな月日は、  
 送りやせん
- 174 れんりひよくと、ちぎりし事も、あだし枕の、うき  
 涙
- 175 そふにやそはれず、きれるもいやよ、どうかはてし  
 の、つくやうに
- 176 其の日ぐらしの、朝がほさへも、かきにもたれて、  
 しあんがほ
- 177 そめてくやしや、江戸むらさきに、もとのしらぢに、  
 してほしい

- 178 そはれまいとは、そりや気がよはい、石にたつ矢も、  
あるわいなあ
- 179 そうてくらうは、世上のならひ、そはぬ先から、苦<sup>く</sup>  
勞<sup>ろう</sup>する
- 180 つとめする身と、帆かけたふねは、人目らくさうで、  
くはたえぬ
- 181 つとめする身に、誠をいはせ、うそはおまへに、せ  
んこされ
- 182 月はさゆれど、心はぬしに、まよひがちなる、しん  
のやみ
- 183 つとめする身と、さげしましやんな、諸国諸大名は、  
みなつとめ
- 184 つとめする身と、お庭<sup>には</sup>のとうろう、ばんにやたがき  
て、とほすやら
- 185 つとめすりやこそ、あのやろめにも、おきやくさま  
ぢやと、手をさげる
- 186 つとめつらのかは、三味<sup>まみ</sup>ねこのかわ、のたりおきや  
くは、こけのかは
- 187 つれてゆかねば、はてしがつかぬ、どうでぎりづく、  
ゆかりやせん（そはりやせん）
- 188 つらい中にも、おまへがあれば、わたしやくらうも、  
わすれ草
- 189 月もながれに、その身をまかせ、くるわがよひの、  
うかうかと
- 190 つらいつとめも、ぬしさんたより、夫<sup>まへ</sup>にうは気な、  
事ばかり
- 191 月夜がらすは、夜にまようてなく、わしはおまへに、  
まようてなく
- 192 つらいけふしを、ながらへるも、すこしたくみの、  
有るゆゑに
- 193 ねてはかんがへ、おきてはしあん、かうもやるせの、  
ないものか
- 194 ねんの内から、女房<sup>にやうぼう</sup>ぢやけれど、なぜかだんなさ  
んと、いひにくい
- 195 ねてはかんがへ、起きてはふきぎ、何をたよりの、  
うきつとめ

- 196 ねんをゆびをり(第二句以下欠)
- 197 ないてくれなよ、うたがひはれた、かはゆけりやこそ、むりもゆへ
- 198 なんのいんぐわで、他人がいとし、そだてられたる、おやよりも
- 199 なくな庭鳥(にはどり)、お茶屋のからず、なくも其の夜の、きやくによる
- 200 何がなんでも、そはねばならぬ、そうてくろうが、してみた
- 201 なんぎ硯(すずり)の、海やま越して、くろうするすみ、男(おとこ)いし
- 202 何がふそくで、枕をなげた、なげた枕に、とがはない
- 203 ながい月日に、みじかい命、なんのあくしよが、やめられやう
- 204 ながしみじかし、ふたこしきめて、どこかがよひの、りりしきよ
- 205 何のいんぐわで、わしやしやばへきた、いきてそは
- 206 なせかけふしは、あひたうてならぬ、いつにおろかるる、身ではなし
- 207 なんのかのとて、口先ばかり、ころしもんくに、こりた物
- 208 泣いてくらすと、いうてはわるい、おじで暮らすと、ゆておくれ
- 209 なんほおまへが、浮気ぢやとても、しんにほれたが、しれぬかえ
- 210 ながのねんきを、一まいがみに、ふうじこめたる、身のいんぐわ
- 211 ながいのれんに、何屋と書いて、中で帳合(ちやうあひ)、こちの人
- 212 なんぢやおかんせ、其の手ぢやゆかぬ、だましこまれた、わしぢやもの
- 213 何がなるぞえ、くがいの身には、じつをいうても、茶にせられ
- 214 らんぢやさわぎぢや、かうなるからは、どうで此の

- 215 家は、かりのやど  
むりなくぜつを、わしからしかけ、ねさすまいとて、  
夜もすがら
- 216 窓のはな  
むすぶいもせの、したひもといて、ぐちなせりふも、
- 217 娘したがる、その親たちは、させて見たがる、しゆ  
すの帯
- 218 腹がたつ  
むかふかがみに、わしやいひわけの、心がらなりや、
- 219 すきの道  
胸になみだを、わしや持ちながら、あいそづかしも、
- 220 ずりは男をとこの、つねとはいへど、かうはなさりやう、  
はずがない
- 221 梅はやへさく、桜はななへ、なぜにあさがほ、ただ  
ひとへ
- 222 梅はいろよく、咲いてはるれど、うぐひすがなか、  
をかしかる
- 223 むかしぢやわたしも、花とも見たが、今はかれ木の、
- 224 枝えだとみる  
むねとむねとを、むすんでおいて、しらぬかほすり  
や、猶なほいとし
- 225 うちはかんだう、くるわはせかれ、どこに身をおく、  
しまもなし
- 226 うは気さんすな、せけんの人が、浮気物ぢやと、い  
ふわいなあ
- 227 うでに我が名を、いれさせおいて、夫つまにつまらぬ、  
むりばかり
- 228 浮き名たてられ、そはずにゐては、ぬしも立つまい、  
わしは猶なほ
- 229 うそぢやないのに、茶にするおまへ、ほんにわたし  
は、エエ、じれつたいわいなあ
- 230 うちでせくのは、しやうばいからよ、きやくのせく  
のが、わしやつらい
- 231 うき名たつとて、いまきられやうか、すゑのとど  
かぬ、恋しても
- 232 うちで大目おほめに、見やんすからは、すゑのつまらぬ、

- 241 いけんするほど、こんじやうがまがる、つりやす  
もいや
- 242 のめやうたへや、今宵<sup>こよひ</sup>がかぎり、あすは出舟の、風  
をまつ  
るとも、きれはせぬ
- 243 いつそあはねば、かうした事も、ほんに有るまい、  
うさつらさ
- 244 のちに逢はうと、わかれた儘で、待てどくらせど、  
便りない
- 245 いまの今迄、たがひのくろう、くろうしたのも、水<sup>みづ</sup>  
の泡  
をりわるい
- 246 おもひ出すぞえ、どこかの座しき、今にわするる、  
ひまはない
- 247 いきなおかたと、おもうてほれて、後<sup>あと</sup>で情<sup>じやう</sup>がなか、  
をかしかる
- 248 おもひだすのは、わすれるからよ、思ひ出さずに、  
わすれずに
- 249 いとし誰かは、どこかにおいて、わしは此<sup>こゝ</sup>の家の、  
うきつとめ
- 250 逢うてたつ名が、たつ名の内か、あはでこがれて、  
浮き名たつ
- 251 一の鳥居こし、二のとりゐこして、もはやあつたも、  
ちかくなる
- 252 くがいする身は、浦山ぶきの、花はさけども、みは  
ならぬ
- 253 いせぢでるときや、涙<sup>なみだ</sup>ででたが、今は吹き来る、風  
もいや
- 254 くれのかねなら、千里もひびけ、聞かせたうもない、  
明けのかね
- 255 ぐちがかうじて、せなかと背中、あけのからすが、

- 259 自棄とでかけて、のむ酒よはで、たまにあひする、  
あるゆゑに
- 258 自棄とでかけて、のむひや酒も、すこしたくみの、  
あとのに見て
- 257 やがて行くぞえ、どこかをさして、いやな此のさと、  
あとに見て
- 256 ぐちな女子の、心としらで、しんとふけたる、かね  
のこゑ
- 255 まつばかり  
くにもところも、へだててすめば、夢のごげんを、
- 254 むりばかり  
ぐちはゆふべの、くぜつの残り、こよひまたきく、
- 253 おもへども  
くもにかけはし、かすみにちどり、およびないとは、
- 252 しあんがほ  
くるかくるかと、ゆふつげ鳥の、飛ぶをながめて、
- 251 仲直り  
くらうする墨、身はすみぞめの、ぬしに命を、かけ  
すずり
- 268 やげぢやどやげぢや、あふまでかよへ、すゑでそふ  
やみあがり
- 267 やつれさんした、三日月さんよ、おまへそのはず、  
つぶしやせん
- 266 やほなやうでも、まさかの時は、ぬしのおかほは、  
と、ゆておくれ
- 265 やぼめ手なしと、いはんすよりも、いやぢやあひた  
できやせまい
- 264 やろめしやれるな、じたばたするな、下駄の工面も、  
家に、ゐるぢやなし
- 263 やげぢやどやげぢや、呑みをれさわけ、どうで此の  
とらしやせん
- 262 やほなやうでも、まさかの時は、ぬしにちじよくは、  
て見しよ
- 261 やほなやうでも、まさかの時は、水の流れも、とめ  
茶わんざけ
- 260 やめておくれよ、ばくちと酒を、わしもやめましよ、  
酒に酔ふ

- 269 やら、そはぬやら  
やがてみやんせ、せかれた人に、物の見事に、そう  
てみしよ
- 270 ままになるなら、何しにぬしを、人にだきねは、さ  
せはせぬ
- 271 ままよるなかも、又すみよかろ、ぬしとふたりで、  
くらすなら
- 272 ままになる身か、なんぞのやうに、きては泣いたり、  
なかせたり
- 273 松の葉のやうな、こまかい気をもつな、ひろいばせ  
うばに、気をもちやれ
- 274 ままにならぬは、承知でほれて、まい夜逢ふとは、  
わしがむり
- 275 まてばあはるる、身をもちながら、せいてせけんを、  
せまくする
- 276 まつがつらいか、またるるよりも、うちのしゆびし  
て、でるつらさ
- 277 まつがつらいか、煙けぶりがういか、しん気まくらの、そ
- 278 まつがつらいか、わかれがういか、まつはたのしみ、  
わかれうい
- 279 まぶとやぼとを、ならべて見れば、ちがふ物かえ、  
ゆきとすみ
- 280 ままにあはんす、人さんがたを、見るにつけても、  
はらがたつ
- 281 ままに気ままに、あはるるならば、ぐちやみれんは、  
いひはせぬ
- 282 まてどくらせど、便りのないは、思ひきれとの、し  
らせかえ
- 283 源げんはみなもと、藤とうはふぢとよむ、なぜに吉きちのじ、よ  
しとよむ
- 284 けふはひとしほ、あひたうてならぬ、いつにおろか  
は、なけれども
- 285 ふじの山でも、のぼれば下くだる、それにわたしは、の  
ほりつめ
- 286 ふじの山ほど、のぼらせおいて、今はつるべの、さ

- 295 これしおまへと、かうなるからは、すゑはめをとぢ
- 294 こんの前だれ、松ばのちらし、松にこんとは、わし  
やつらい
- 293 かうはたがなす、半氣ちがひに、みんな誰かが、な  
すわざよ
- 292 心ばかりを、かよはせおいて、せみのぬけがら、身  
はここに  
ら紙
- 291 心つくして、かいたる文も、ぬしは茶にして、まく
- 290 こしにやたてを、帳ちやうめん面もちて、かよひづとめは、  
いつの事
- 289 こよひこよひと、まつ夜はあけて、今朝はむかしの、  
かねのこゑ
- 288 こころぼそさを、すいりやうさんせ、木にもかやに  
も、ぬしひとり
- 287 ふつと目がさめ、だきしめ見れば、ぬしとおもへば、  
夜着よぎのそで
- かおとし
- 296 恋にこがれて、かほ三井寺みいでうの、かねがわかれか、ま  
まならぬ
- 297 恋にこがれて、なくせみよりも、なかぬほたるが、  
身をこがす
- 298 ござれはな嘶なしましよに、松の木のもとの、松の葉のや  
うに、こまやかに
- 299 こことどこかが、かごぬけならば、ぬけてあはうも  
の、いま一度
- 300 こんののれんに、何屋とそめて、なかにゐさんす、  
かほ見たい
- 301 こんなわかれを、せうとはしらず、偶なまの御ごげんに、  
なくばかり
- 302 こいでこいでと、まつ夜はこいで、またぬ夜にきて、  
かどにたつ
- 303 五ご大だい力りきでは、わしやないけれど、えんとじせつの、  
すゑをまつ
- 304 爰こゝはてるとも、どこかはくもれ、いとされたれかが、

- 305 ひにやける  
 ごうど伝馬丁てんまぢやうに、ふた瀬ふたせがござる、思ひ切る瀬と、  
 きらぬせが
- 306 えんはいなもの、是あぢなもの、遠とほい三河みかはと、いせ  
 産うまれ
- 307 栄えいはさかゆる、弥やはいよとよむ、なぜかたれかは、  
 よみがない
- 308 てい女ぢよたてても、わかれてゐれば、うはきするかと、  
 うたがはれ
- 309 てんのほしほど、お人はあれど、月とみるのは、ぬ  
 しひとり
- 310 あきもあかれも、せぬそのなかを、人のくちゆゑ、  
 とほざかる
- 311 あだとじやけんを、車くるまにのせて、どこの誰かに、つ  
 なひかせ
- 312 あぢな所で、かんしやくおこし、夫つまを手てにして、き  
 れる気きか
- 313 朝あな夕ゆふなに、まくらがかはる、枕まくらかはらぬ、つまほ
- 314 しゃ  
 明けあのからすと、には鳥とりにくい、かはい男おとこの、目を  
 さます
- 315 あさぎ千筋せんすぢ、あるびろどの羽織はおり、あれがわたしが、  
 けんしぞや
- 316 朝あのかへりに、袖そでひきとめて、しんぼうさんと、  
 目めになみだ
- 317 あんな男おとこに、どうしたものぢや、ほれた誰たれかが、気  
 がしれぬ
- 318 あんな男おとこと、ゆびさされても、ほれたやまひは、な  
 ほりやせん
- 319 ありがたいやの、すずしのかやで、中なかでするがや、  
 永えいらくや
- 320 あさの六むつから、やたておこしに、さいごあるきは、  
 こちの人
- 321 あるはいやなり、おもふはならず、ままにならぬが、  
 腹はらがたつ
- 322 あへば名ながたつ、あはねばゆかし、しらぬむかしが、

- 331 あるが中にも、へだてのふすま、あるにかひなき、  
またふさぐ
- 330 あへば嬉しい、かほ見るけれど、わかれおもへば、  
またふさぐ
- 329 あひたさにくる、見たさにかよふ、すがたかくしの、  
きりがふる
- 328 あひたみたさは、とびたつけれど、かごの鳥かや、  
ままならぬ
- 327 あひた見たさは、飛びたつばかり、みては泣いたり、  
なかせたり
- 326 あすのわかれば、いつよりつらい、あうてなま中、  
物おもひ
- 325 あへばたがひに、すてばちいふて、あはざこがれて、  
泣くであらう
- 324 あめはしきりに、ふれどもはれる、わしが思ひは、  
いつはれる
- 323 あくしよぐるひの、なるだけなされ、どうで此の家<sup>や</sup>  
は、かりのやど
- 322 ましであらう
- 332 さぞやさぞさぞ、さぞいまごろは、淋<sup>さみ</sup>しやかたに、  
捨<sup>す</sup>て小舟<sup>こぶね</sup>
- 333 酒をのむなと、御いけんなれど、酒はつとめの、う  
さばらし
- 334 咲いてくやしや、せんぼん桜、鳥もかよはぬ、山お  
くに
- 335 酒やたばこで、わすれるやうな、浅いほれやうは、  
せぬわいなあ
- 336 三味<sup>さんみ</sup>のみすぢで、まぎれてゐれど、歌の唱歌<sup>しやうか</sup>で、思  
ひだす
- 337 酒はさかやに、よい茶は茶やに、ぬしはどこかの、  
どこやらに
- 338 三<sup>さん</sup>のいとより、きれよい人に、心つくして、今くや  
し
- 339 酒ちやおもひ出し、たばこぢやわすれ、とかくたば  
こは、わすれぐさ
- 340 さいた桜に、なぜ駒つなぐ、こまがいさめば、花が

- 349 きれてゐたとて、何にくかろぞ、あつさ寒さも、と
- 348 きしやうせいしは、ほぐにもなろが、入れたほくろは、どうなさる
- 347 きれてみれんで、又たちかへり、こんどあふのは、命がけ
- 346 菊にませがき、ゆひとめられて、今はしのぶに、しのばれず
- 345 きれたおきやくに、とちゆうで逢うて、ものもいはずに、なみだぐむ
- 344 きせるかたてに、ひぎたてなほし、わしがむりかと、目に涙
- 343 きれてゐたとて、何にくかろぞ、いやでわかれた、仲ぢやなし
- 342 さん里山みち、式<sup>し</sup>り半かけて、お茶をひことて、かよやせん
- 341 三味<sup>き</sup>のいとさへ、みずぢにわかる、なぜにわからぬ、ぬしの胸
- 340 木にもかやにも、おまへがたより、夫<sup>おれ</sup>にじやけんな、うてやる
- 339 きれてくりよなら、きれてもやろが、いちどごげん
- 338 ほりやせまい
- 337 きじもなかずば、うたれはせまい、わしもでやねば、聞<sup>き</sup>くつらさ
- 336 きやくのおちるも、いとひはせぬが、後でよしあし、聞<sup>き</sup>くつらさ
- 335 きやくのきれるも、いとひはせぬが、内でよしあし、此<sup>こ</sup>のつとめ
- 334 ぎりもせけんも、いとはぬならば、なんのよしみに、腹<sup>はら</sup>がたつ
- 333 きれてしまへと、みな人さんが、いけんするほど、
- 332 ぎりもしらない、わたしといはうが、ぎりもせけんも、いとやせん
- 331 きりやうのよいのと、すがたにやほれぬ、人はみめより、ただころ
- 330 事<sup>こと</sup>ばかり

- 367 ゆうておくれよ、ことづけしたと、ないてくらすと、
- 366 あるわいな  
ゆふぢやなけれど、たしなましやんせ、あぢな噂が、
- 365 いろいろと  
ゆはれまいとは、おもひはずれど、おまへゆゑには、
- 364 仲となり  
ぎりのかすがひ、なさけのくさり、ひくにひかれぬ、
- 363 ついの櫛くし  
菊とききやうは、どちらがいもと、同じいしやうに、
- 362 もん所  
聞いておそろし、おにつたなれど、つけてやさしき、
- 361 すずり水  
きれてしまはうと、硯すずりにむかひ、おつるなみだが、
- 360 いきわかれ  
ぎりをわきまへ、せけんを思ひ、死よりせつない、
- 359 その  
の、そのうへで  
ぎりといふじが、是こゝないならば、あんな男に、何の
- 376 めでもものいふ、座しきのばあひ、かほでかくふみ、
- 375 ないわいなあ  
めにはみねども、あなたのすがた、むねにみぬ日は、
- 374 むねくもる  
ゆうておまへの、心がはれりや、きいてわたしが、
- 373 おなじ水みづ  
雪やこほりと、へだてはあれど、とけておつれば、
- 372 みての事  
ゆうてこまそか、いはずにおこか、さきのしうちを、
- 371 むねでとけ  
ゆふなかるな、いろへもだすな、やねでふる雪、
- 370 むりばかり  
ゆふにゆはれぬ、わがむねのうち、夫それにわからぬ、
- 369 物おもひ  
夕ゆふし御ごげんは、うれしいけれど、なまじあしたの、
- 368 たたみざん  
ゆておくれ  
夕ゆふし御ごげんは、けんくわでわかれ、あとはずじうら、

- 385 みれんながらも、いはねばならぬ、ぐちとおもはば、
- 384 水の流ながれと、身の行くすゑは、どここのいづくに、と  
まるやら
- 383 水みづにはなれぬ、おし鳥さへも、なれしつばめに、袖  
しぼる
- 382 水の流ながれは、おろかな事よ、どこかがよひも、とめ  
て見せよ
- 381 みてもみあかぬ、せんたび見ても、たてしかがみと、  
ぬしのかほ
- 380 み月つき四月は、袖でもかくす、もはやなな月、なんと  
せう
- 379 みれば見わたす、さをさしやとどく、なぜにとどか  
ぬ、我がおもひ
- 378 みたいあいたい、山ほととぎす、すがたならずば、  
こゑなりと
- 377 めしも喰ふまい、たばこもいやよ、爰こゝでひや酒、二  
つ三つ
- 386 しんのやみにも、まよはぬわたし、まよひますぞえ、  
おもはんせ  
ぬしゆゑに
- 387 しんでくれなよ、わづらうてくれな、つとめさすの  
も、今しぼし
- 388 しんばうしやんせ、しばしの内ぢや、やがておまへ  
の、ままになる
- 389 しんばうしなよと、口ではゆへど、朝のかへりにや、  
ばんにきな
- 390 しんばうしやうより、どろばうさんせ、くびのない  
のも、いきな物
- 391 しかとだきしめ、かほうちながめ、かうもかはゆく、  
成るものか
- 392 しばしあはねば、すがたもかほも、かはるものかえ、  
ころろまで
- 393 しんで花みは、さかぬといへど、いきて実のなる、  
身ではなし
- 394 しんきしんくの、心のたけを、書いておくれと、か

- ただより  
 395 思案しあんしかへて、のく気はないか、しよせんそはるる、  
 みではなし
- 396 しんぢゆうしましよか、かみきりましよか、かみは  
 はえもの、身はだいじ
- 397 したはおきせん、二かいはおきやく、のぼるはしご  
 は、しでの山
- 398 じつも誠も、みないひつくし、まくらならべて、か  
 ほとかほ
- 399 しよてははづかし、中ごろゆかし、縁のきれめは、  
 つらにくや
- 400 しゃうじ明くれば、もみぢの座敷、もはやお客も、  
 龍田川
- 401 じつも誠も、よにあるときよ、かはりやすきは、人  
 ごころ
- 402 しよせんあふ事は、ままにはならぬ、文ふみの便りを、  
 まつわいな
- 403 しよせんうき名が、たつからままよ、せいだおかた
- と、そうてみしよ  
 404 しようき大じん、とこのまのかけじ、いやなおきや  
 くを、はらいたまへ
- 405 しようき大じん、とこの間のかげじ、すいたお客を、  
 まねきたまへ
- 406 ゑじのたく火と、ほたるのむしは、やくやもしほの、  
 みをこがす
- 407 えんとじせつを、まてとはいへど、じせつ所か、か  
 たときも
- 408 ひとがいふなら、ひとまづきれて、あとはたがひの、  
 むねにある
- 409 人はちよいと見て、ちよいとほれなさる、わしはし  
 んそこ、みにやほれぬ
- 410 人のいやがる、だうらく男おとこ、ほれたわたしは、又い  
 んぐわ
- 411 人がいふなら、ひとまづきれて、かはるまいぞや、  
 胸とむね
- 412 人のそしりも、せけんのはぢも、おまへゆゑなりや、

- いとやせん  
413 人のいひなし、北山しぐれ、くもりなき身は、晴れてゆく
- 人をたのんで、かうぢやとゆはうか、ただし打ちあけ、咄さうか  
414
- 人がしらぬと、おもふかしやれか、今はりこうで、めでさとする  
415
- 人のとのごで、ほめるぢやないが、おせのたかさよ、はのしろさ  
416
- 人はうらめし、いろよい花よ、わしは日がけの、うすもみぢ  
417
- 人にやしたたか、くらうをさせて、捨てておまへは、あだばかり  
418
- 人のいけんも、わるくはきかぬ、色はしあんの、ほかぢやもの  
419
- ひぐれひぐれに、あなたのそらを、見ては思はず、袖しほる  
420
- ひぎにもたれて、かほうちまもり、ものもいはずに、  
421
- めになみだ  
422 ひろいやうでも、どこかはせまい、誰にあかさん、人もなし
- ひろいせかいに、わしやすみながら、せまうたのしむ、すきのみち  
423
- ひにちまいにち、おかほはみれど、物もいはれぬ、ぎりときり  
424
- もはやおまへも、秋風なれば、すすき尾花を、まつばかり  
425
- もしも道中で、雨ふるならば、わしが涙と、おもはんせ  
426
- もとはうは気で、あゐそめ川の、ふかうなるほど、あひにくい  
427
- もんにつけたや、何かの紋を、つけて見たなら、さぞやさぞ  
428
- もんの中でも、何かがすきぢや、すいたたれかの、紋ぢやもの  
429
- もんは何かを、つけてはるれど、いやなお客と、ね  
430
- 431

- 439 せん両万両の、かねもちよりも、わしはおまへの、  
 氣にほれた
- 438 せじでわらうて、心で泣いて、いやなざしきに、る  
 ばやい
- 437 せじでわらうて、心でないて、しゆびをつくろふ、  
 そのつらさ
- 436 せかれてもまた、かうあひたいは、神のぼちかえ、  
 あくえんか
- 435 せいであはさぬ、あのみせばんに、あだなかしくが、  
 きかせたい
- 434 せいであはさぬ、その親かたに、恋のしよわけが、  
 しらせたい
- 433 せ田でわかれて、あはづの此の身、いつかおかほを、  
 三井みつゐのかね
- 432 もとのおこりは、みなわたしゆゑ、人に恨みは、な  
 いわいなあ
- 431 もとは五ほんの、此のゆびなれど、(第三句以下欠)  
 るつらさ
- 448 追加  
 つらやはかなや、勤めの身なりや、おぼえない事、
- 447 すいたおかたと、そはれぬ時は、すみのころもで、  
 あまでらへ
- 446 すいな水仙、わしや藤ふぢの丸、心まよはず、つたのも  
 夜や
- 445 すゑのやくそく、心の儘ままに、はなすまもなき、夏の  
 エエ、じれつたいわいなあ
- 444 すそをとらへて、これ聞かしやんせ、実じつぢや誠ぢや、  
 またふさぐ
- 443 すこしやすまうと、うたたねすれば、ぬしの夢見て、  
 み
- 442 すいた桜や、梅うめさへあるに、なぜに柳は、みだれが  
 たり、きかせたり
- 441 せん里はしるやうな、虎の子がほしい、たよりきい  
 に、およぶとも
- 440 せきしよこえても、そはねばならぬ、あすはなはめ

- 449 うたがはれ  
くるかくるか、と、沖へ出て見れば、はまの松風、音ばかり
- 450 もみぢふみわけ、鳴く鹿の毛は、恋の文かく、筆と  
なる
- 451 ひとり来たぞえ、あの山中を、谷でつま呼ぶ、鹿の  
声
- 452 すずり墨とは、おもうてくれな、なきの泪で、書い  
た文
- 453 硯墨とは、わしやおもやせん、まつよ涙で、よむ  
わいなあ
- 454 つれて返かんせ、東都のかたへ、道の路銀は、胸に  
ある
- 455 月夜烏に、ふと眼が覚めて、さぞや今頃、寝てであ  
ろ
- 456 いとしかはゆの、しょうこは今に、残す目黒の、ひ  
よく塚
- 457 かはゆがらるる、お客はいやで、あたまはらるる、
- 458 ぬしの側  
せめて一日、つがいの女夫、人のうはさも、身のね  
がひ
- 459 かどに立たんす、悲しさつらさ、ぬれて寒かろ、つ  
めたかろ
- 460 そらを見さんせ、鳥さへつがひ、わしは独りで、夜  
もすがら
- 461 ぬしをおもうて、ふさいで居れば、日々とうといと、  
笑はんす
- 462 心がらとは、わしやいひながら、やぼな親御の、御  
かんろふ
- 463 せくな親方、なせしよて出した、しよてに出さねば、  
ほればせぬ
- 464 つらいなんぎな、峠を越して、なんのかはろぞ、今  
更に
- 465 わしはうたがふ、ぬしやつつまんす、中をとりもつ、  
歌と三味
- 466 ぬしは水仙、わしや玉椿、ふたり根の、床の花

- 476 あまりつらさに、山へ出て見れば、霧のからかぬ、  
も
- 475 ひなら九十日、月なら三月、まうすまいぞえ、何事  
嬉しさは
- 474 いはにせかるる、わしや湍川の、われて逢ふ夜の、  
嬉しさは
- 473 苦界しらねば、あの歌聞くな、(第三句以下欠)
- 472 あひを隔てて、わしや居るけれど、心ばかりは、ぬ  
しのそば
- 471 やもめどり
- 470 ぬしにそばねば、わしやいつ迄も、ねぐら定めぬ、  
末をまつ
- 470 しんばうしてまた、そばれぬ時は、やもめ暮らしの、  
末をまつ
- 469 さんぽおもうても、お庭の桜、垣の外から、見るば  
かり
- 468 おちよ半兵衛ぢや、わしやなければども、親がそばさ  
にや、死ぬかくご
- 467 人のそしりも、せけんのがりも、捨てておまへに、  
情たてる
- 485 山のおくでも、そばねばならぬ、落ち葉薪に、し  
てらす
- 484 お月さまさへ、りん気が深い、しのぶ其の夜は、猶  
よい
- 483 お客日照りが、百日しても、いとし誰かに、出れば
- 482 月夜恨めし、やみならよかろ、御手を引き合ひて、  
が咲く
- 481 しんで花実が、咲くものならば、比よく塚にも、花  
が咲く
- 480 せかれてもよい、かう成るからは、ぬしもしあんが、  
有るであろ
- 479 むかし松の葉、ふたりも寝たが、今は芭蕉葉に、唯  
独り
- 478 いやなお客の、情に落ちて、ひくにひかれぬ、義理  
となり
- 477 いとしあなたも、小藪の雀、なくも落つるも、人し  
らず

- てなりと
- 486 いとしかはいの、雪駄せうたの音ねは、もしや夫まへかと、気に  
かかる
- 487 逢うてわかれりや、夢見たやうな、夢の浮世に、夢  
を見て
- 488 人目いとふも、斯かうならぬ先、今は浮き名も、たた  
ばたて
- 489 いかな悪あく日にち、くろ日ひの日でも、ぬしに逢ふ日は、天てん  
赦しよにち日にち
- 490 綾あややしきで、巻まかるとても、いやな枕まくらが、かは  
さりよか
- 491 たとへ縁えんなき、ふたりが仲も、じつとじつとして、  
そうてみせよ
- 492 嬉うれし恋こひしの、かさなるうへは、つらやしんくな、事  
ばかり
- 493 ちゑのつるべが、みじかいゆゑに、ぬしの心が、く  
みにくい
- 494 なまじなま中、あはねばかほど、今の思おもひは、ある
- まいに
- 495 じつなおまへの、せけんの噂うわさ、惚おぼれたわたしは、は  
かられぬ
- 496 いつでもじやけんな、あの明あけ鳥がす、偶なまに逢ふ夜を、  
知りもせず
- 497 ぐちをゆはずと、よく聞きわけよ、あはぬ此この身は、  
猶なほつらい
- 498 恋こひの淵ふち瀬せと、世上よこのぎりと、つらい勤こめと、三さんつの  
いと
- 499 文ぶんでこまごま、かいてはやれど、あへば嬉うれしき、口  
へ出でぬ
- 500 文ぶんは手て管くだと、ゆはんすけれど、胸むねにない事、書かきは  
せぬ
- 501 ぬしがありやこそ、故郷こきやうをはなれ、今ははかなき、  
しらぬさと
- 502 雪ゆきはちらつく、咄はなしはつもる、今朝けさの寒ささに、帰かえさり  
よか
- 503 女房にようぼう有ある身みに、惚おぼれなといふは、どこのやぼめが、

- 512 すいな人さへ、恋路にまよふ、ましていたらぬ、わ  
につかぬ
- 511 えんがほれたか、ほれたが縁か、花もみぢも、手  
にたい
- 510 枕ならべて、寝る時よりも、かげのそしりが、聞か  
せたい
- 509 思ひ染め川、わたらぬ先は、かほど深いと、露しら  
ず
- 508 ほかへ心を、うつしてみれど、いつかおまへの、事  
ばかり
- 507 ぬしを待つ夜は、人こそしらね、時をかぞへて、昼  
ざん
- 506 あうた其の夜は、誠とおもひ、後はうたがふ、恋の  
欲
- 505 女房ばかりか、殊更子迄、何を頼みに、ほれたや  
ら
- 504 つみな事ぢやが、まかせぬにつけ、先の女房が、  
にくうなる
- 513 しぢやもの  
お客つとめか、一座のなかで、心見らるる、いたこ  
ぶし
- 514 月はまん丸、ひえてはいれど、心さえねば、いつも  
やみ
- 515 まさか思ひを、汲みわけさんせ、やほなおまへぢや、  
有るまいし
- 516 すいもぶすいも、其の身になれば、人をやほぢやと、  
わらはれぬ
- 517 あいそづかしも、誠のたねよ、何の思はぬ、人とい  
はう
- 518 くらうくるしみ、憂き艱難も、昔語りと、成るわい  
なあ
- 519 物や思ふと、問ふ人あらば、せめて頼まん、ぬしの  
事
- 520 酒でつらさを、しのぐと知らで、呑むなやめよと、  
心ない
- 521 月は傾く、夜はほのぼのと、もはやせきなき、いと

- 522 ま乞ひ  
おもひ出だせば、去年のけふし、すゑの事迄、いひ  
かはし
- 523 こがれこがれて、待つ甲斐ながき、あへばひぞりの、  
捨て詞
- 524 ぬしの事ゆゑ、内証へ呼ばれ、又もいけんの、其  
のつらさ
- 525 とても添はれざ、三途の川へ、浮き名沈めて、情た  
てる
- 526 大事がらるる、お客はいやで、ぶたれ叩かれ、主の  
側
- 527 御げんする度、思ひがまして、けふも逢ひたい、あ  
すの夜も
- 528 人に野菊と、わしやわらはれて、操守りて、ひと  
へ咲く
- 529 花にたんざく、付けなもよいが、ぬしの有る枝、手  
折るまい
- 530 ぬしはする墨、わしや硯水、恋も涙も、ぬしの胸
- 531 人の恋路の、枝折る人は、なさけしらずの、山あら  
し
- 532 ないた顔見りや、まんざらうそも、とかくみれんに、  
ひかさるる
- 533 いけんまじりに、はぢしめられて、顔をそむけて、  
目に涙
- 534 岩にせかるる、わしや滝川の、われて逢ふ夜の、嬉  
しさよ
- 535 ぬしは何所かに、わしや此の町に、花ぢやなけれど、  
ちりぢりに
- 536 うらみますぞえ、いづもの神を、縁のむすびが、ち  
がうてある
- 537 はやうわたしに、眉毛をとらせ、おらがお源と、い  
はしやんせ

## T 賤が歌袋(略称: 賤)

## 初編

- 1 いそぐまいぞや、御縁の道は、まては待ち得る、よ  
い妻を
- 2 往去往去と、三年ならず、いぬるいなばが、遠いげ  
な
- 3 路次の踏み石、誰がふみならし、かたい娘に、浮き  
名たつ
- 4 腹の立つとき、暫く死んで、長い浮世と、おもふま  
い
- 5 西も東も、南もいやよ、おれを思はば、きたがよい  
6 仏をがまば、親様をがめ、親にまさされる、ほとけな
- 7 臍の下裏、不滅のみやこ、主心お婆々の、住み所  
し
- 8 年の寄りたる、親さまいとし、いつも六十で、御座  
らいで
- 9 父よ母よと、泣く子を連れて、いつか行きつこ、湯  
の島へ
- 10 愀気する人、押しつけ置いて、そばで花やりや、面  
白い
- 11 主と己との、仲さへよけりや、親は糸瓜の、だん袋  
留守といはれぬ、己が心、よきもあしきも、覚えあ  
ろ
- 12 女さましや、明日出る今日まで、ならぬ世帯の、し  
ほめする
- 13 若い御人の、ひわかい人の、ものを理づめに、いは  
ぬもの
- 14 可愛がらんせ、今度の可々さ、腹のいとない、子に  
かかる
- 15 よかれが南とて、退いてもみたが、今に掘りやるが、

よしの根を

17 旅の殿さん、こんどやこんど、袖のふりあひ、又こ

んど

18 連理はなれぬ、比翼の契り、むすぶ親さま、ありが

たや

19 そうて嬉しや、別れのつらさ、わかれ思はば、そは

じもの

20 月にむら雲、そのままれば、やがて袂たもとに、光りま

す

21 寝たやねむたや、ねた夜はよかる、さまとねた夜は、

猶なほよかる

22 なんと十七じよしち、覚えはないか、つれて諸国を、しよぢ

やないか

23 薬を薬をと、思ふなおかた、らくにや苦がそふ、何

がらく

24 室むろのおやま見て、内の嘖かかみれば、千里奥山の、古ふる

狸だぬき

25 ういぞつらいぞ、いぬるぞ檀那だんな、替かはり尋たずねて、置お

け長男おとな

26 野にも山にも、子を産み置きやれ、子ほど宝は、世

にもない

27 思ひがけない、吉原が焼けた、女郎ぢやうろうは可愛かほいや、小屋

がけに

28 来るか来るかと、川かはしも見れば、河原蓬かはらよもぎの、影かげば

かり

29 病やまひやむ人、いとしうてならぬ、己おれがとのが、やむ

からに

30 まてどくらせど、かへらぬさまは、鳥はふるすに、

ねにもどる

31 まうしかねます、おまへの裏うらの、一つ所望しよぼう所望しよぼう、し

ら菊を

32 いとし殿さへ、おまへにかすに、なんのしら菊、を

しかるぞ

33 けちなおやまは、御客を腹へ、のせて無むしんを、い

はしやんす

34 舟は出て行く、帆かけて走る、宿の娘は、出てまね

- く、まねけど磯へは、よらばこそ、思ひきれとの、  
風がふく
- 35 来いで来いでと、待つ夜にやこいで、またぬ夜あけ  
の、門にたつ
- 36 家観自大事は、密夫間鍋、盗み血おろし、詞かず
- 37 縁ぢや妻ぢやと、定めてからは、いかな美人も、目  
にやかけぬ
- 38 寺の坊さまと、あの土橋は、人をたすけて、わが落  
ちる
- 39 あさま起きては、井筒にもたれ、身をもなげよかと、  
思ひそよ
- 40 酒は呑みたし、酒代はもたず、酒屋はやしを、見て  
とほる
- 41 来てはふりふり、又きてはふり、しぐれあめかや、  
我がさまは
- 42 ゆけばもどれと、戻れば行けと、おれをさんよに、  
迷はしやる
- 43 目には見まいと、思うてみても、ゆくは目でそよ、
- そのかたへ
- 44 みめがよいとて、根性が人か、大坂でこのぼうで、  
頬ばかり
- 45 死んでまた来て、親にあはるなら、腹のたつときや、  
しなうずもの
- 46 人のよいのが、我がのにやならぬ、子持ちこちよれ、  
寝てかたろ
- 47 背戸の小路は、かじけば失せる、立ちし浮き名は、  
身の一期
- 48 すいた殿御に、何いはれても、水に萍、根にやもた  
ぬ
- 49 京の泰平楽、泰平楽の身に、不足おもふは、皆えよ  
う
- 二編
- 50 ゐなの笹原、風ふかぬまも、君におもひは、ありま  
やま
- 51 ろとも權とも、私子は船ごころ、いかな浦へも、寄  
せたまへ

- 52 花にこころを、うかうか寄せて、今は身にふく、秋  
のかぜ
- 53 新田足利、確執なれば、君も震襟、やすからず
- 54 誉めるそしるも、二品ござる、実にほめると、そら  
ほめと
- 55 へんばみつちやも、心の外の、聞はあやなし、目に  
やみえぬ
- 56 とるておそしの、恋路のふみは、見る目こぼるる、  
胸の波
- 57 智恵は我が身の、垣とはしらで、利口だてして、し  
かられた
- 58 悋氣ふかいは、もと色深い、是非に心が、さもとな  
い
- 59 主の示しの、私子や女郎花、誰と伏見の、野べにね  
よ
- 60 留守とおもへば、心にぴんと、錠に淋しい、胸のう  
ち
- 61 岡目八もく、私子や恥づかしや、劫も弛張も、人が
- 62 わしに五十の、春咲く花の、まこと聞き得る、身ぞ  
みる
- 63 嬉し
- 64 鏡みるとも、心を見やれ、あはなこころが、はやう  
つる
- 65 よそに心を、うかうかよせな、色ぢやござらぬ、す  
ぎはひも
- 66 他人ごころが、わしや頬憎い、ひたと寄り添へ、こ  
らやかに
- 67 恋慕涕泣、愛別離苦は、余所に見る目も、いたはし  
や
- 68 空に心が、わしやあこがれて、仕事するのも、手が  
かるい
- 69 つらいかなしい、わしや恥づかしい、うき目みるの  
も、君故に
- 70 寝るも起きるも、天下の御おん、行くも戻るも、親  
の恩
- 70 茄子歯の苦も、しばしの程よ、やがてくろぐろ、鉄か

- 71 漿ぬつける  
 乱舞らんぶ歌道かどうに、心をとられ、しまひましたよ、親のあ  
 と
- 72 むねの鏡は、曇らぬ物を、うつるうつると、浮き名  
 たつ
- 73 ういと思ひし、むかしの夢を、今は寢覚めに、また  
 みたい
- 74 井手いであの山吹、さまざまし草、一期いちごちぎりて、花がさ  
 く
- 75 野辺の白菊、やさしいけれど、宿よぐの籬かきにや、うるに  
 くい
- 76 落ちる涙が、人目に見えて、とはれそめにき、我が  
 心
- 77 国の掟おきてに、背そむかぬやうに、後生ごじやう大事を、わすれまい  
 病やまひやむのも、親への不孝ふかう、浮き名たてしも、身の恥ち
- 78 辱じよく  
 79 まめな娘の、菩薩かほの顔に、親は仏の、ゑみ含む  
 80 怪我けがぢや怪我けがぢやと、心にゆるす、ゆるすまいぞや、
- 81 我がこころ  
 ふみは思ひの、道芝みちしばの露、濡れりやぬれるほど、猶なほ  
 通かよふ
- 82 心がらこそ、身は賤しけれ、人に替かめられ、毀こらる  
 る
- 83 縁えんのほどこそ、はづかしござれ、人がわらへば、な  
 ほ可愛かほい
- 84 天下はれたる、妹背いもせの仲も、きるは一重ひとへの、よしの  
 紙
- 85 あすか川かや、我が君さまは、きのふの瀬かたが、  
 今日けふの淵
- 86 酒と色とは、欺たぶきの種子たねと、しらで溺おぼるる、身の不  
 覚さしやう
- 87 起請きじやう誓紙は、いつはりの種、ほしいほしいは、な  
 いからよ
- 88 夢の浮世に、邯鄲かたんとく枕まくら、とかく思ふは、夢のまよ  
 89 目には遮まへる、無常むじやうの姿、耳をつらぬく、虎の声  
 90 見ずばおもひも、あるまい物に、渡りかねます、中なか

- 91 死出の山坂、三途の川を、ともにゆきましょ、携へ河を
- 92 絵がく姿に、心を移し、あだな思ひに、身をやつす
- 93 平野暮雪も、ちらちら見える、三井の晩鐘の、なる時分
- 94 もしも御縁が、ござんすならば、此の世へだてて、後の世で
- 95 せめておまへに、己が此の心、しらせませたい、露ばかり
- 96 不好事をと、ひぞつて見せつ、粹な殿ぢやと、うかせたり
- 97 京も田舎も、日をあだな草、一期むなしく、すぐすかや
- 98 一世ばかりの、身のあやまりか、末世末代、名のけがれ
- 99 二階座敷へ、梯をあげて、いつか話そや、しつぽりと
- 100 三味の調子も、しらけたふしも、色でまろめた、茶屋女子
- 101 四五の二十なら、簪さしやれ、五六三十で、妻もちやれ
- 102 五里や三里が、何がつらかるぞ、ともに逢ふ夜の、うれしさに
- 103 六趣四生の、岐に迷ひ、限りしられぬ、わしが身を七にやるまい、姑ばさま、あるにあまらぬ、古鉄よ
- 104 八八六十四の、さまよしあしも、夫婦仲よい、外はない
- 106 九九の八十一、世のよすぎ、十方とてつに、やかましい
- 107 十に口偏、叶ふとよめば、手をば合はする、心もて
- 108 百になりての、恋路はいざや、九十九髪では、業平を
- 109 千の蔵より、我が子はたから、しかるばかりか、みめぢやない
- 110 万の長者の、燈よりも、貧女こころの、髪をきる

- 111 億は千疊と、心をひらく、しまり内儀の、やりばなし
- 三編
- 112 いつもそふやうに、思うたりしたり、うどんげの花、今ばかり
- 113 六十六部が、きんごにまけて、おびも鉦鼓も、水晶の数珠も、質にとられて、なむあみだ
- 114 腹がたつかや、おまへのはらは、朝の出口から、入り日まで
- 115 にくいにくいと、おもうたる念が、此の世ばかりか、未来まで
- 116 ほしかもらやれ、二人の親に、おれはふたりの、親しだい
- 117 へんねしいのは、もと短気から、忍へ性のない、虫ゆゑに
- 118 とろりとろりと、駒追ひかけて、はるはござれよ、伊勢さまへ
- 119 地獄極楽、たが見て来たら、ぢごくごくらく、わが
- 120 惚気さんすな、わがかみさまよ、りんきやいとまの、むねに  
本でそよ
- 121 若い人ぢやに、骨をしみやるが、死ねば鳥辺の、灰となる
- 122 可愛がらんせ、からすも鳴くに、にくいにくいと、人の子を
- 123 嫁になりたや、雪駄屋のよめに、よめも姑も、しやらしやらと
- 124 竹にすずめは、品よくとまる、とめてとまらぬ、色の道
- 125 蓮華ひらけて、待つ人さまを、誹る我が身は、火の車
- 126 連れて行かんせ、何国へなりと、仮令しほやで、しほ汲もと
- 127 寝ては念仏、起きては陀羅尼、とかく此の世は、かりのやど
- 128 何をいふても、白川夜船、さまは夢やら、うつつや

- 129 楽うたしよ楽うたしよと、おもふな御かた、らくにや苦がそ  
ら  
ふ、何がらく
- 130 胸むねに蛇じゆしん身の、火を焚たくけれど、烟けぶりたたねば、人しら  
ぬ
- 131 生まれ来たりし、古いにしへとへば、何もおもはぬ、此のこ  
ころ
- 132 野辺かばたに蛙かはづの、鳴く声きけば、すぎしむかしが、思は  
るる
- 133 お主しゆにかかれば、朝起き夜づめ、汲くまでかなはぬ、  
お茶の水ちう
- 134 寝たかねさんせ、午時ひるまでなりて、お主しゆにかかりた、  
身ではなし
- 135 御前おまへひとりりを、やしなひかねよか、木切き柴しば売うり、  
してなりと
- 136 思ひあうたが、今日に見えた、空そらで煙けぶりが、よれてた  
つ
- 137 曇りない身に、くもりをかけて、とこではらそや、
- 138 此こののくもり  
病やまなりとも、煩わづらうてみたや、さまによいかと、問とは  
れたい
- 139 松のみどりは、我が身をしらで、たかき空から、み  
を投なげる
- 140 申しこれもし、是まう申しなもし、紙かみが落ちます、鼻紙はながみ  
が
- 141 富士の山ほど、いはるとても、おれは淀川よどがは、気が  
ひろい
- 142 こいと言葉の、かからぬ方かたへ、行ゆくも戻るも、いな  
ものよ
- 143 縁ぎでつれば、座頭ざとうの坊ぼもいとし、ともに負おひまし  
よ、琵琶びわばこを
- 144 あへばじやらじやら、あはねばふりる、そではない  
ぞや、浮世うきよでは
- 145 さまはしんくの、もつれの糸いとよ、とけぬ心が、にく  
うござる
- 146 ききのふの晩ばん迄、ものいうたさまが、今朝けさは北野きたのの、

- 野のけぶり
- 147 夢にみた夜は、かならず逢ふと、あはぬふしぎや、  
ゆめちがひ
- 148 面にかぶつて、世間はならぬ、よこすまいぞや、欲  
の皮
- 149 水の中でも、墨すりや濁る、二人ねたもの、にごろ  
いで
- 150 忍び得たとて、御ゆだんめすな、しのびえた夜は、  
なほ大事
- 151 しのびはじめ、あたりのよさや、重ねぶとんの、う  
へに寝た
- 152 かさね蒲団は、またそりやおろか、綾や繻珍の、中  
にねた
- 153 人にかかると、おもうたら不覚、五尺たらずの、身  
にかかる
- 154 人の事なら、上げ下げいやる、何ぞ吾が身が、器用  
なよに
- 155 雪駄買うてやりや、足袋かうてくれと、妻はもつま
- い、世話なもの
- 156 粹な水仙、すかれた柳、こころ石竹、気は紅葉
- 157 十七八は、ねむいもの、梅の木の、さがりし小枝を、  
枕に枕に
- 四編
- 158 伊勢の千尋の、私子や沖の石、干く間もない、君ゆ  
ゑに
- 159 ろ權とらずに、高背で登る、都伏見の、淀の川
- 160 はんやどれどれ、猿引き見やれ、猿も世を見る、人  
の代を
- 161 二世の縁まで、結びしものを、おもひきれとは、本  
意もなや
- 162 ほかへ心の、ちり行くさまを、おもひそめしは、身  
の因果
- 163 下手な渋柿、熟れてもしぶい、をさな馴染みの、気  
は退かぬ
- 164 徳と位を、備へし君も、終に北野の、土となる
- 165 智恵のある身も、愚かな己も、法の筏で、彼の岸へ

- 166 利発才智の、名を揚げたとて、かりのやどりは、たのみない
- 167 ぬれてほすまも、ない我が袂、あだしあだなみ、う羅びかね
- 168 るりか玉かと、おもひし子にも、後れ先立つ、世のならひ
- 169 教へおほかる、その中にしも、おいを安んじ、孤を恵め
- 170 われと言ふ字を、はなれてみれば、心やすらか、身もらくな
- 171 かくしがくしも、人さま知るや、今は主在る、身とぞなる
- 172 よしに分け入れ、難波の小船、あしの障りを、漕ぎ退けて
- 173 高うおもひし、恋路の文は、かいて下すや、浮名川連歌俳諧、暮や双六に、心うちこむ、家をうる
- 175 そよやみかどの、けいしやうういも、有為のてんべん、世のならひ
- 176 罪も障りも、根のきれ草や、みだの誓ひの、法の水寝ても覚めても、忘れぬおもひ、あはれ君さま、些おもへ
- 177 ながめふりしく、夕べの夢は、けさのあやめを、見るしらせ
- 178 楽な御国の、親君さまにや、たのめたすけん、御誓願
- 180 むかへ渡して、たすけん為に、みだの御ぐわんも、四十八度
- 181 有為のてんべん、身の為す業よ、こころとめずと、ただうたへ
- 182 るどの上に、むくのき植ゑて、しのびよづまを、葉でかくそ
- 183 野にも山にも、山にも野にも、親の御恩の、はてはなし
- 184 おほく草木の、名をしるもよし、すきの道とて、生け花を
- 185 苦にもならぬか、親君さまの、いけんあるとて、是

- 非がない
- 186 山とおもひの、積み行くさまに、しらせましたい、  
後世ごせの道
- 187 松まつの青葉あおばも、ふりしく雪で、つつむ心や、恋こひの道
- 188 けん嘩けんわ口論くわろん、せらるるものか、上かみの掟おきてを、守るなら
- 189 ふるの都の、ならはせずくに、新たまり行く、御代みよのはる
- 190 こひすてふこひすてふ、吾わがが名は立ちて、流れはづかし、浮名川うながは
- 191 えにしありなば、又寝なの床とこで、つもるおもひは、ともなきこ
- 192 敵てきも身かた、人にはあらず、とかく油断あせりが、てきとなる
- 193 あたらからだに、浮き名をたてちや、人とうまれし、かひもなし
- 194 ささめごとというて、通ひし道の、草のかれ葉の、にも宇羅美うらみ
- 195 菊きくに添そへ竹、御方おかたもしりやれ、みだしや乱るる、吾
- 196 夢ゆめに夢見て、さむるとおもふ、今も夢かや、うつつがこころ
- 197 身をば染そめにし、契ちぎりの水みづは、人のいけんに、かはさやせぬ
- 198 鹿かの角つのぐむ、桜さくらのはなを、誘さそふ春風はるかぜ、庭にはの面おも
- 199 廻まわ向むか成就じゆじゆの、親君おやぎみさまにや、変へん成じやう男子なんしの、ぐわんもあり
- 200 鄙ひなの旅路たびぢも、都みやこの町も、直すぐな道芝みちぢ、直すぐにふも
- 201 もつれはてしや、心の糸いとの、長く短く、とりそろへ
- 202 世界せかいみだれて、忠臣ちゆうしんしれる、しれた仕事しごとは、誰たれもする
- 203 須磨すまや明石あかしの、月見つきみはおろか、朧おぼろ月夜げつよの、門かどゆかし
- 204 経きやうの功力くりきにや、病やまひも癒いゆる、罪とがも障さりも、消きえはてる
- 五編
- 205 色いろに迷まよへば、身しん上じやうもかまども、いらぬよ、身しん上じやうど

- ころか、命がけ
- 206 命かけよまにや、爛鍋かんべちろりをかけて、酒のかんして、呑むがまし
- 207 今の浮世うきよに、媒酌なひどはいらぬ、出合であひまち逢あひ、ころびやひ
- 208 腹が立つとて、まくらをなげな、枕まくらとがない、いつとても
- 209 箱根八里はこねは、馬うまさへ越すに、こすにこされぬ、大井川おほい
- 210 西に妻もち、東にすめば、晩の入り日にや、西しこひし
- 211 鳥に恨みが、かずかずござる、更けて待つ夜と、きぬぎぬと
- 212 近い一家いっけに、むごいを見れば、あかの他人は、おそろしや
- 213 律義りちぎなる子を、しばしばしかり、不実者ふじつしやとは、親がする
- 214 女おんなさましや、十五じよごになれば、しらぬ他国の、部屋住ぶつ
- 居い
- 215 忘れ草わすれくさなら、一本ひともとほしや、植うえてそだてて、見てわすれよ
- 216 若いときとて、二度ふたたびあるか、花が枯れ木に、二度にどさこか
- 217 可愛かほい可愛かほいは、憎にくいのうらよ、何がかはゆかる、人の子
- 218 嫁よめがにくいか、姑婆しよとめばさま、よめは末期まつごの、水みづくれる
- 219 他所たしよに妻もちや、御世話おせわなせわな、とんとやめましよ、他所たしよの妻
- 220 抱かかいて寝ねもせず、いとまもくれず、つなぎ去ぎりとは、おれがごと
- 221 何と君さん、菜種なづなの中は、油臭あぶらくさいぢや、ござらぬか
- 222 楽たのな御国おくにへ、嫁入りしたが、心一つで、みだ頼たのめ
- 223 むかしおもへば、夕ゆふべの夢よ、とかく浮世うきよは、皆みなうそぢや
- 224 うたへ十七じよしち、声こゑはりあげて、こゑのよいまに、若い

- 235 まに  
野街の柳の、たゆたふを、あれ春風が、吹くわいな、  
わたしが心の、やるせなさ、かはい殿御に、しらせ  
たや
- 226 おれは眞実、義経なれど、こなた梶原、二二心  
おなつなつなつ、なぜ髪とかぬ、櫛がないかや、油  
がないか、くしもあぶらも、かけごにあれど、親に  
や離れる、清十郎にや別れ、何のいさみに、髪とか  
うぞ
- 228 おもやすれども、だかれて寝まい、今にをりふし、  
名のたつに
- 229 親といふ字を、さま絵に書いて、膚の守りと、身に  
そへん
- 230 おもうてかよへば、千里も一里、あはずもどれば、  
また千里
- 231 起きていかんせ、東もしらむ、やかたやかたの、鳥  
もなく
- 232 親に七度、売られたけれど、今は七階、蔵の主
- 233 おれが殿御を、誉めるぢやないが、凡そ御家中にや、  
ござるまい
- 234 蔵のまどから、糟はまだおろか、今朝も諸白、二  
升もろた
- 235 やるせ涙に、口説くはほんの、男訛しと、見えに  
けり
- 236 待つがういかや、忍ぶがういか、まつもしのぶも、  
同じ事
- 237 けさの寒さに、笹山越せば、露に羽織の、すそ濡れ  
ん
- 238 恋で九つ、情で七つ、合はせ十六の、つまたもれ
- 239 こいといはず、手ぢやまねかれず、歌の文句で、  
悟らんせ
- 240 心短気で、髪切り捨てて、破れ障子か、かみほしや
- 241 こいというたのは、言葉の品よ、行けば納戸に、錠  
がおりる
- 242 ごされ此の町へ、沽間物売りに、ござりや見もする、  
買ひもする

- 243 江戸へ江戸へと、皆行きはてる、江戸はせまかろ、  
えど島は
- 244 縁ぢや御えんぢや、よくよく縁ぢや、廿をとこに、  
二十一は
- 245 寺へ参りやれ、御鐘のなるに、やがて死ぬもの、後  
生願はう
- 246 赤穂の荻屋を、一期とおもうて、植ゑて置いたよ、  
五葉の松
- 247 あひが遠けりや、おもうてもならぬ、今は嬉しや、  
軒ならび
- 248 麻布田組は、鼠か猫か、百姓物種、みなにする
- 249 佐渡と越後は、いよ筋むかひ、橋をかけよやの、舟  
ばしを
- 250 さまのやうなやうな、よい氣にそへば、ついて心が、  
よなりそよ
- 251 さまが真実、誠の氣なら、いつも朝宵の、露ふみわ  
けて、おれもしんじつ、通ひましょ
- 252 君が心の、いたらぬからに、人にいはしやる、そし
- 253 らしやる  
君に逢うたら、もつれた糸の、とけぬ心を、火にく  
べた
- 254 夢になりとも、遇はせてたもれ、ゆめに浮き名は、  
立ちやせまい
- 255 夕べ別れて、まだ今朝逢はにや、ものの五年も、あ  
はぬよな
- 256 目出度目出度が、三つかさなれば、鶴が御庭に、巢  
をかける
- 257 道の小草は、枯れても芽だつ、親にや二度、あはれ  
まい
- 258 仕事せぬ者は、親でも子でも、忍びづまでも、つら  
にくい
- 259 自慢しやるな、庄屋殿娘、庄屋と代官、替はりも  
の
- 260 自慢しやるな、紺屋のむすめ、あるの出花も、ひと  
盛り
- 261 人の王ぢやげな、人筋ぢやげな、一度腹たつ、ふり

- 271 270 京の三条、呉服屋の娘、姉は十八、妹は十五、諸国  
 関の地蔵に、振袖させて、奈良の大仏、むこにとろ  
 きこずもの
- 269 千里走るやうな、虎の子がほしや、さまの便りを、
- 268 門で設けて、此の子が出来て、名をば則ち、門之助  
 門之助
- 267 一人とりやるか、五反田の草を、二人とります、水  
 かげと
- 266 人をつかへば、朝日のまねび、いつも朝日は、うら  
 やかな
- 265 人の事かと、立ち寄りきけば、扱はよしない、我が  
 事を
- 264 人の事なら、いふまい大事、かげかひなたへ、ちよ  
 とまはる
- 263 人のいひなし、北山時雨、曇りなければ、晴れての  
 く
- 262 人がわるいと、思うたら不覚、乱れ車や、輪がわる  
 もせぬ  
 い
- 272 諸大名は、弓矢で殺す、姉と妹は、目でころす  
 一夜寝てみて、ね肌がよくば、つまと定めて、寝に  
 ござれ
- 273 一合呑もかよ、夜鷹を買はうか、爰が思案の、廿四  
 文

U 淡路農歌 (略称・淡)

- 1 よいぞよそろよ、嫌いとならよそろ、わごれうも俺おれも、  
 いやでそよ
- 2 月は東に、昴すぼるは西に、御館おやかたさまは、中央まんちゆうに
- 3 殿様とのさまござりや、百姓ひやくしゆうの弱よはり、松本日雇ひやくにひの、飲よるび  
 よ
- 4 伊之助いのすけ殿は、今帰いまりぞや、若宮わがみや殿に、鈴すずの音
- 5 伊之助いのすけ殿は、去いぬなら去いにやれ、我等われらは爰こゝに、夜よを  
 明あかす
- 6 志知しちの御城おしろは、夜半よなかに落ちる、栗原山くりはらに、陣ぢんびらき
- 7 藁わらで髪結かみむすうた、小田衆せだしゆうぢやないが、足半履あしなみいて、爪つま  
 立たてて
- 8 小田せだへ往ゆくなら、言伝ことづつてしましよ、大竹藪おほたけの、将しやう  
 監げん様へ
- 9 感応堂かんのどうの城は、緯とざなし機はたよ、建たてて拵こしらへて、居をりも  
 せず
- 10 塩田しほた五郎ごろうは、西国陣せいこくぢんに、墓所はかどころは撫養むやの、官山くわんざんよ
- 11 いかな陣ぢんでも、陣ぢんの小口こぐちでも、綾あやの鉢巻はちまき、宮内みやうち様
- 12 さても見事みごとな、御殿おどのの城しろよ、北きたは長池ながいけ、東あづまは川原かわはら、  
 南蓮台なんれんたい、西にしはつづきと云いはん
- 13 栗くりがはじけて、長田ながたへ飛とんで、戻かへりにや土井どいの、柵くわ  
 田たよ
- 14 土井どいの柵くわ田た、茂惣次もそうじの門かどに、犬いぬが居ゐるぞよ、人囃ひとばしみ  
 が
- 15 褐帷子かちんかぢろは、掃守かもりあし衆しゆうの衣裳いしやうよ、赤あかい手拭てぬぐいは、委文しどろしやう衆しゆう  
 よ
- 16 葦毛あしげの駒こまに、桃紫ももむらさきは、あれこそ八太はちたの、伊之助いのすけ
- 17 志知しちの城主じゆうしゆに、桃山錦ももやまにしん、あれこそ殿どのの、宝物たからもの
- 18 天神てんじんの馬場うまばに、立たてたる石いしは、ありや伊勢いせ之丞のぢやうが、  
 首くびの代しろ

- 19 姉は生穂、十八土器、妹は郡家、二十土器
- 20 憂いぞ辛いぞ、中島の振り粉、水は増せども、粉は増さぬ
- 21 深山桂よ、西や奥谷よ、音に聞こえし、榎の木よ
- 22 殿は深山へ、かい隠れたよ、見えたは弓の、筈ばかり
- 23 塔下に地蔵が、三体ござる、中のおれが、甥の妻
- 24 山田入野の、交合岩の本で、貰うたよ奈良の、手拭
- 25 大戸初尾で、鳩の羽拾うた、嬉しや殿の、矢に矧が
- 26 委文通れば、長田も恋し、殊に長田は、水所
- 27 四国西国、及びはないが、せめては国の、巡礼なと
- 28 往のとも連れよ、戻ろとも連れよ、鳥飼山の、蓑越
- 29 建てたも建てたが、経所の塔よ、あつたら塔に、  
榊が足らぬ
- 30 鮎屋の滝は、八万地獄、往き来る道は、野辺の道
- 31 摩耶へ参りて、兵庫を見れば、心は兵庫、身は摩耶
- 32 淡路島から、小豆島見れば、水巻く竜か、布引きよ
- 33 志筑の浜は、名所でござる、後ろは川よ、前は海
- 34 爰は釜口、飯屋迄一里、あれへ見えたは、伊勢の森
- 35 塩尾と志筑と、一所ならよかろ、間の碁石山、無い  
かよかろ
- 36 土井と長田と、一所ならよかろ、間の碁場が、無い  
かよかろ
- 37 広田はひろし、金屋は名所、ぢきない千草、山中よ
- 37' ぢきない千草、山中なれば、色よい花は、山に咲く
- 38 花の絵島が、唐糸であれば、たぐり寄せよもの、皆  
宿へ
- 39 爰は降ろとも、鮎屋河内は降るな、爰し殿御の、萱  
刈りに
- 40 洲本見よとて、賀茂迄往たら、洲本隠しの、霧が降  
る

- 41 娘遣らうなら、賀茂へやれ親父、賀茂は田所、米所
- 42 山へ往かぬか、八坪の山へ、びしよきの柴の、枝折りに
- 43 あすは疾うから、井笹の山へ、千生ひなけれど、笹苳りに
- 44 習うた習うたよ、しよんが節習うた、去年机の、普請場で
- 45 遠田横なで、早魃所、娘を遣るな、響にとるな
- 46 由良の湊に、唐船造る、柏原山に、大鋸の音
- 47 広田の池は、七度切れた、八木皿池は、未代よ
- 48 由良が勝かよ、洲本が勝か、由良が勝ぢやよ、船着きぢや
- 49 佐野の常満寺に、蛇が居る居ると、蛇ぢやげな、大きな蛇ぢやげな
- 50 己が若い時にや、小田迄通うた、小田の川原で、夜が明けた
- 51 福良港は、入りようて出ようて、女郎に情の、ない港
- 52 見目のよいのは、南辺寺地藏よ、ほろりと迷ひ、迷はれた
- 53 上郡節を、買うても習へ、尻刃声に、おだやかな
- 54 志筑女郎衆に、水くれと云うたら、呉れる真似して、呉れなんだ
- 55 志筑女郎衆は、茶碗の湯漬、色は白ても、水くさい
- 56 何に譬へん、自凝島は、松に日の出の、山ならば
- 57 大きな木が有りや、小鳥もとまる、港があれば、舟も入る
- 58 磯の蛤、鳴門の若布、阿那賀の目張魚、鱗なし
- 59 情ないぞや、雲笠に着て、丹後我が城、よそに見る
- 60 千光寺山の、銀杏の葉を見やれ、風が吹かうとて、裏返す
- 61 千光寺山の、一本薄、ゑいやと引けば、手が切れる
- 62 殿は陣立て、谷川の城に、御迎へ船は、木津川に
- 63 百目出しても、私しや見たうござる、殿の大坂の、

- 川入りを  
 64 新し舟に、帆を巻き上げて、紀伊国灘を、そよそよ  
 と  
 65 西そよそよに、南風そよそよと、吹けがな大坂、川  
 口へ  
 66 又と参るまい、草加の明神、山田太郎四郎、見る  
 からは  
 67 市原条で、百姓は誰ぞ、平野や佐竹、和田殿よ  
 68 巨孫之丞の、水牢見れば、親重代の、田も嫌よ  
 69 横坂藪にや、大事がかかる、上なる山は、漬えかか  
 る  
 70 鮎の原なる、善三が藪は、ありや殿様の、御留藪  
 71 横坂藪は、善左が藪か、ありや国君の、留藪ぢや  
 72 又も籠もらば、千光寺様よ、花の洲本を、見下ろ  
 して  
 73 今宵は佐野の、東の堂ぢや、翌日は遠田の、西の堂  
 ぢや  
 74 帯に短し、襷にや長し、山田薬師の、鐘の緒は  
 75 育波室津に、かかりし舟は、あれは三原の、塩舟か  
 76 汗たらたらと、半田の山を、今むし上がる、片こし  
 き  
 77 安坂いもじは、鐘鑄に上手、息子踏鞴に、踏み上手  
 78 七日喰はずと、七年着ずと、添ひて居りたや、親様  
 に  
 79 茜もくがひ、尺有る牛は、何処へ出しても、三百目  
 80 物を知らずば、歌聞いて悟れ、歌は世界の、理を分  
 ける  
 81 花の画島は、唐見てあらば、たぐり上ぐるもの、身  
 は宿へ  
 82 小野小町と、名護屋の城と、幾夜攻めても、落ちや  
 しよまい  
 83 扱も見事な、岩屋の画島、根から生えたか、浮き島  
 か  
 84 親は此の世の、行灯の光、親様なけりや、光ない  
 85 三十過ぎての、親御の異見、彼岸過ぎての、麦の肥  
 86 育波蟹の穴、室津は名所、国の尾崎は、墓所

- 87 恋に好んで、船乗りももけて、今は由無い、独り寝る
- 88 お寺風で、けさ喰たままぢや、日照り木履で、齒も濡れぬ
- 89 鮎は瀬にすむ、鳥や木にとまる、人は情の、陰に住む
- 90 夜込みすりには、往きたいけれど、今宵は蔵の、番でそよ
- 91 わしが身は、唯算盤粒よ、思案してみる、置いてみる
- 92 こなた百姓で、馬が無うてなるか、馬買うて持ちやれ、阿波の駒
- 93 庄屋の庭に、榎の木植ゑて、諸奉行が来れば、ところと
- 94 いとし可愛子に、庄屋どもさすな、諸奉行の前で、土かふる
- 95 どの何国で、庄屋しよとままよ、百姓と肌を、合はしやれよ
- 96 庄屋が庄屋がと、名はよいけれど、庄屋は百姓の、文使ひ
- 97 百姓は鼠ぢや、庄屋殿は猫ぢや、百姓めがけて、ところと
- 98 面白いぞよ、頭も白い、今宵の月は、猶白い
- 99 お月様さへ、黒雲かかり、ましておれらは、御主がかり
- 100 木曾の山へ行きや、其の年戻る、薩摩嫌ぞや、二年越し
- 101 お江戸戻りか、御色が黒い、麻の布なら、晒そもの
- 102 山へ遣るまい、夏柴刈りに、山が茂れば、身が細る
- 103 乞ひに好んだ、竜骨車なれど、花の八月、飽きが来た
- 104 せまい心や、柳の葉程、心広う持て、芭蕉葉程
- 105 是の屋敷に、茗荷や蓼や、冥加目出度や、落繁昌
- 106 万事頼むぞ、日和佐の大工、殊に日和佐は、板所
- 107 躑躅椿は、陰山照らす、城の小姓衆は、町照らす
- 108 お月の様に、まん丸て丸うて、角のないこそ、添ひ

- よけれ  
 109 夫婦喧嘩と、夜北の風は、宵に吹いても、夜半に風  
 ぐ
- 110 人は悪うない、世は兎に角に、破れ車で、わが悪い  
 山椒胡椒より、辛い物がござる、ならぬ世帯が、辛  
 うござる
- 111 船の碇と、女の身とは、どこが居所とも、定まらぬ  
 112 わしは山鳥、子にこそ迷へ、子が無くば、何に迷ふ  
 ぞ
- 113 船に乗るとも、高帆を引くな、風に情は、ない程に  
 114 何故に遅いぞ、大黒丸は、大坂川口、船留めか  
 115 後生願ひやれ、浮世も思へ、身は朝顔の、花の露  
 116 鳴門鳴門は、数多けれど、阿波の鳴門は、物すこい  
 117 大坂堺の、三本けぬき、喰はずと着すと、親と居  
 ろ
- 118 寝ては寝髪を、絞ると儘よ、親とは辛苦、語るまい  
 119 さすが土、くはねど楊枝、鷹は死んでも、穂は摘ま  
 ぬ
- 120 朝寝する人は、世間の鐘よ、朝のお飯を、昼食うた  
 121 是の内室、塩屋の育ち、立ちても居れど、しほらし  
 い
- 122 長の夜を寝て、昼寝する人は、子細が無うて、叶ふま  
 い
- 123 牛や馬こそ、四歳や五歳、人に子細が、有るものか  
 124 何としたやら、わしや此の頃は、生木の筏、木が浮  
 かぬ
- 125 阿波の鳴門に、身は沈むとも、様の御意なら、背く  
 まい
- 126 声はすれども、姿は見えぬ、様は深野の、郭公  
 127 嫁は譏るまい、嫁にこそかかれ、娘の末は、人の子  
 よ
- 128 忍び夫程、さま夜妻程、親を思はば、後世よから  
 129 他所で妻持ちや、破れ菅笠よ、いかな着もせず、捨  
 てもせず
- 130 いつもあれかよ、湊の叶堂、十九を連れて、夜籠  
 りに

- 131 阿波あはに妻持つまち、讃岐さぬきに住めば、鶉鳥うづらかや、粟恋あはこひし
- 132 洲本外町すもと、素麵まいうめん所ところ、空そらが曇くもれば、ならぬ職しやく
- 133 福良ふくら出る時とき、ほろほろ泣ないた、洲崎すざき越えたら、小歌せうか  
 ぶし
- 134 撫養むやの岡崎おかざき、吹上ふきあげの小砂こすな、すだれ柳やなぎの、葉はにとまる
- 135 宵よにごさるは、砂川すながはお馬あかづき、暁あかつきごさる、土井どいの和子わこ
- 136 土井どいの和子わこ様さま、ほうろくめいだ、ほうろく戻もせ、土井どいの和子わこ
- 137 安乎あひが孫太郎まごたろう、氣きの誤あやりよ、尾崎おしざきのちよんぼ、心こころがら
- 138 小山こやまかつらに、西奥谷おくたによ、音おとに聞きこえし、榎えんの木きよ
- 139 千光寺せんくわうじ参まゐりの、下向げかうせば奇あやりやれ、身みは内膳ないぜんの、栢かやの森もり
- 140 朝日あさひさす、夕日ゆふひ輝かがく、木この下もとに、黄金千両おうごんせんりやう、有明ありあけ  
 の月つき
- 141 天地あめつちの、開ひらき初はじめる、山やまなれば、大慈大悲だいじだいひの、月つきぞ  
 さやけき

収録歌謡集  
解題

## A 盤珪『白引歌』（略称：白）

『白引（挽）歌』と呼ばれる歌謡は本来、白引きという日常の労働に伴う労作歌謡であり、日本全国の各地に伝承されたものである。しかし、ここに取り上げる盤珪『白引歌』は、江戸時代前期に播磨国揖西郡浜田村（現、兵庫県姫路市網干区浜田）の龍門寺に出た臨済宗の高僧盤珪永琢（元和八年（一六二二）〜元禄六年（一六九三））が創作して、人々に示した教訓的歌謡をいう。すなわち、盤珪は人々が日常生活の中で口ずさむことのできる歌謡を創作したわけである。盤珪は不生禪を説いたことで知られるが、その教義に伴って庶民教化を積極的に行い、多くの女性からも信仰を集めた功績が高く評価される。盤珪は庶民教化の一端として、自ら歌謡を創作して巷間に広めたが、これが後代まで一種の流行歌として伝承されるに至った。本書でも取り上げる民謡・流行歌謡集『延享五年小哥しやうが集』や『絵本倭詩経』に、盤珪『白引歌』と重なる歌や、盤珪作と銘打たれた歌謡が散見することも、この盤珪『白引歌』が人々にとってどれだけ魅力的であったか、そして空間的・時間的にどれだけ強い伝播力を持っていたかを端的に示している。

盤珪『白引歌』は後に会翁自得斎なる人物の編によって、板本として刊行されるに至った。それは盤珪没後七〇年余を経た明和六年（一七六九）三月、大坂でのことであった。その年は後述する白隠没の翌年に当たる。この出版には白隠の創作歌謡の世上での評判の高さが刺激を与えたものであろう。また、折しも流行歌や民謡の刊行熱の盛んな時期であったので、その一端に連なるものでもあったと考えられる。

今日、盤珪『白引歌』と認定できる歌謡は、板本所収二一首の他、写本『盤珪禪師躍謡』、叢書『片玉集』、随筆『蕉斎筆記』、随筆『卯花園漫録』、『盤珪禪師全集』、『延享五年小哥しやうが集』などに散見し、合計五七首を集成することができる。本書にはその五七首を収録した。

〔参考文献〕 小野恭靖『近世歌謡の諸相と環境』（平成11年・笠間書院）

B 『盤珪『麦春歌』（略称：麦）

『麦春（搗）歌』も『臼引歌』と同様、民衆が日常の労働のさなかに口ずさむ労作歌謡で、日本各地に民謡として伝承されている。しかし、ここで取り上げる盤珪『麦春歌』も、禅僧の盤珪永琢その人の思想を歌謡化したものである。但し、この『麦春歌』は『臼引歌』とは異なり、盤珪自身が直接に創作した歌謡ではない点に注意を要する。伊予国大洲（現、愛媛県大洲市柚木）の如法寺で盤珪の説法を聴聞した俳人の懶石が、盤珪の説法を歌謡化したものという。

盤珪『麦春歌』の伝本はきわめて少なく、『臼引歌』とは異なり刊行もされなかった。これまでに曾我正堂旧蔵の写本と駒沢大学蔵の写本『盤珪禅師躍謡』が知られる。

収録歌謡は後者の二四首に前者の二二首すべてが包含される。本書にはその二四首を収録した。

〔参考文献〕 小野恭靖『近世歌謡の諸相と環境』（平成11年・笠間書院）

C 『延享五年小哥しやうが集』（略称：延）

江戸時代中期に但馬国（現、兵庫県北部、豊岡周辺）で歌われていた民謡や流行歌謡を書き留めた写本一冊の歌謡集。表紙に「延享五年戊辰五月十七日」という書き入れがあり、本文と筆跡や紙質がほぼ一致しているところから、その時期の集成と考えられている（延享五年は西暦一七四八年に当たる）。また、中扉には「美濃国岐阜」云々という書き入れもあり、美濃国岐阜の人が所持していたようであるが、この歌謡集の編者とは別人であろう。おそらく、但馬

国の人が地元の歌謡を集成して成立した後、何らかの経緯で岐阜の人が入手して、近代にまで伝承されたものと考えられる。近代に入つてからは藤田徳太郎の所蔵するところとなり、その時点で翻刻紹介された。

近世を代表する歌謡集『山家鳥虫歌』と共通もしくは類似する歌謡を約六〇首見出すことができるが、『延享五年小哥しやうが集』の成立の方が二〇年以上も早い。この意味できわめて貴重な歌謡集である。

本歌謡集が最初に紹介されたのは、鈴木棠三・白田甚五郎両氏による『民謡研究』昭和12年7月号から翌13年月号までの全文翻刻であった。その後、『続日本歌謡集成』巻三(昭和36年・東京堂出版)にも収録された。

収録歌謡数は重出を含めて五七二首。本書には重出歌を除いた五七〇首を収録した。

〔参考文献〕 須藤豊彦『日本民俗歌謡の研究』(平成5年・桜楓社)

#### D 「おたふく女郎粉引歌」(略称：女)

盤珪永琢と並ぶ江戸期の代表的禅僧で、『臨濟宗中興の祖』とも称された人に、白隠はくいんえかく慧鶴(貞享二年へ一六八五)と明和五年(一七六八)がいた。白隠は駿河国の原という宿場町に生を享け、諸国で修行を続けるうちに大悟した。

その評判は日本全国に広まり、大本山妙心寺からも招請を受けたが、それを断って生涯を郷里の駿河松蔭寺という一禅寺で過ごした。数多い白隠の業績の中でもっとも重要なことは、庶民向けのわかり易い禅を説いたことに他ならない。仮名書きの法語や教訓的歌謡(「粉引歌」や和讃)の創作、さらには庶民向けの禅画(画賛にしばしば歌謡を用いた)の製作によって、多くの庶民に禅の世界へ入る道を切り開くとともに、生き方そのものをも教えたのである。

「粉引(曳)歌」は「白引(曳)歌」とほぼ共通する概念の歌謡で、白を使って麦などの穀物やお茶などを粉にする際の労作歌である。そして、それは庶民生活においては欠かすことのできない身近な歌謡であった。白隠は庶

民が日常生活の中で口ずさむ歌謡を創作して禅へ導き、また日々の生活の心得を説いたのである。これは既に数十年前に盤珪が行ったことであつたが、白隠の『粉引歌』には「おたふく女郎」や「主心お婆々」といった庶民向けのキャラクターが絵入りで添えられていたことが注意される。そして、歌謡内容も「おたふく女郎」や「主心お婆々」が人々に教訓して聞かせるという趣向を採っている。そこでの「おたふく女郎」や「主心お婆々」は禅思想の寓意であることは言うまでもない。

『おたふく女郎粉引歌』は板本が卷子本（主心お婆々粉引歌）も収録、袋綴冊子本として刊行されたが、同時に禅画としても複数の作品が描かれている。それらの諸伝本にはそれぞれ三首から九首の近世小唄調（7へ3・4へ7へ4・3へ7へ3・4へ5）の歌謡が収録されているが、それらを集成すると一一首を拾い上げることが可能となる。なお、伝本によつてはそれらの近世小唄調歌謡に次いで長編の歌謡（7へ8へ7へ8へ7へ8へ7へ8へ7へ8へ）が見えるものがあり、それも『おたふく女郎粉引歌』の一部と混同されてきたが、そちらは白隠没後六三年を経た天保二年（一八三二）に老乞士なる人物によつて追加されたものである。したがって、本書では取り上げず、前掲の一一首を収録した。

〔参考文献〕 小野恭靖『近世歌謡の諸相と環境』（平成11年・笠間書院・芳澤勝弘『白隠禅師法語全集』第一三巻）（平成14年・禅文化研究所）

#### E 『主心お婆々粉引歌』（略称…婆）

白隠作の近世小唄調歌謡には前掲『おたふく女郎粉引歌』の他に、『主心お婆々粉引歌』がある。『おたふく女郎粉引歌』がきわめて平易な歌謡であるのに対し、この『主心お婆々粉引歌』は謡曲「山姥」を踏まえた表現や禅思

想の奥義にかかわる内容の歌を多く含み、きわめて難解である。また、説く対象も農民を中心とした一般庶民に留まらず、武士や僧侶も含まれている。武士や僧侶向けの詞章の歌謡が存在するからである。こういった内容の相逢、また『おたふく女郎粉引歌』に続いて『主心お婆々粉引歌』が置かれる巻子本(板本)の体裁から、『主心お婆々粉引歌』を本編と捉え、『おたふく女郎粉引歌』を本編に導くための前段とする考えも提出されている(芳澤勝弘『白隠禪師法語全集』第一三巻解説)。

『主心お婆々粉引歌』に収められた歌謡は一二一首。本書には全一二一首を収録した。

〔参考文献〕 小野恭靖『近世歌謡の諸相と環境』(平成11年・笠間書院)・芳澤勝弘『白隠禪師法語全集』第一三巻(平成14年・禅文化研究所)

#### F 『春遊興』(略称:春)

孤立道人こと浄土宗の学僧夢庵大我(宝永六年(一七〇九)〜天明二年(一七八二))が編集し、明和四年(一七六七)三月に江戸の藤木久市が刊行した歌謡集。巻末に「春の遊の興に乗じて、古今の童謡をよび和哥を翻訳すること五十余首になりぬ」とあるように、童謡・和歌を掲げ、それらをもとに五言絶句の漢詩を創作した文芸書。ここでの童謡とは「わらべうた」の意ではなく、流行歌謡や民謡のことを指している。これはある意味で歌謡をひとつの文芸作品と認め、それをもとに類想の文芸を翻案したもので、歌謡文学という観点からきわめて意義深い作品の登場と言える。

『春遊興』は国立国会図書館、東京都立中央図書館加賀文庫をはじめ諸図書館に板本が所蔵されている。縦一六・五糎×横一一・〇糎の小型本で全二四丁。この歌謡集は『続日本歌謡集成』巻三(昭和36年・東京堂出版)に収

録されたが、その後『日本歌謡研究資料集成』第七巻（昭和51年・勉誠社）に写真版が収録され、披見し易くなった。収録歌謡数は童謡が三五首、和歌が二一首の合計五六首。童謡三五首のうち二五首が当時を代表する流行歌謡である。本書には全五六首を収録した。また、『春遊興』には末尾に短歌形式の戯歌五首が収められているが、それを補1、補5として併せて収録した。

〔参考文献〕 小松田良平 『日本歌謡研究資料集成』第七巻・解説（昭和51年・勉誠社）

### G 『絵本倭詩経』（略称：絵）

六甲山陰樵夫（馬山樵夫）なる人物が編集した流行歌謡・民謡の注釈書。明和八年（二七七二）に大坂の池田屋岡田三郎右衛門から刊行された。今日、上・中・下三冊の板本が、国立国会図書館、東京芸術大学附属図書館、東北大付属図書館狩野文庫などに所蔵されている。縦二六・七糎×横一八・五糎。上巻一二丁、中巻一一丁、下巻一二丁。各葉見開きの両頁を使って、歌謡一首が散らし書きで、また左右のいずれかに三〇八行の注解が見え、残りの大半部分はその歌謡から喚起される場面の絵が大きく摺られている。収録される歌謡は上・中・下ともに一首の合計三三首。

この書の特徴は、主として教訓的な歌謡を取り上げ、儒教的な観点から「孝」「忠」の道徳を説いている点にある。江戸期に多く見られる歌謡を用いた教訓が行われた書と言える。なお、歌謡詞章自体も教訓的性格が強く、かつて藤田徳太郎が『教化民謡』と総称した歌謡群に属している。しかし、ここに見られるような教訓的歌謡も、『延享五年小哥しやうが集』や『山家鳥虫歌』などに共通する歌が多く、流行歌謡もしくは民謡の一部となっていることは紛れもない。盤珪や白隠の創作した歌謡とともに本書に収録する所以である。

なお、この歌謡集の天明二年（一七八二）の求版本に『樵蘇風俗歌』と題されたものがある。本書には全三三首を収録した。

〔参考文献〕 小野恭靖『近世歌謡の諸相と環境』（平成11年・笠間書院）

#### H 『山家鳥虫歌』（略称：山）

天中原長常南山こと河内国大井村住の中野得信の編による近世を代表する流行歌謡及び民謡の集成。上下二冊から成る板本で、明和九年（一七七二）の刊。全国六八箇国毎に歌謡と『人国記』を踏まえた風俗や人情を掲げる。

書名は中国で俗謡のことを言う『山歌』の音をもとに『山家』とし、『古今集』仮名序以来、歌を詠むとされた『鳥』や『虫』を連ねたものである。この歌謡集中には実際に鳥や虫の名が散見しており、その意味からも書名と符合している。板本とは別に、文政八年（一八二五）の柳亭種彦識語を有する写本（外題「諸国盆踊唱歌」）系統があるが、管見によればこの写本は板本をもとにして成立したものと考えられ、本文的にも板本に劣る。収録歌謡も板本の方が多く、写本の歌謡はすべて板本に内包された関係となっている。

板本は高木市之助旧蔵本が代表的な上下二冊の完本であり、京都大学附属図書館蔵本は上巻のみの零本で、下巻は種彦本系写本の取り合わせ本である。高木市之助旧蔵本によれば、板本の大きさは縦二二・八糎×横一六・二糎で上下合計で四七丁となる。

板本の歌数は挿絵中の画賛歌謡六首を含めると三九八首となる。本書にはその三九八首を収録した。

〔参考文献〕 小野恭靖『近世歌謡の諸相と環境』（平成11年・笠間書院）

## I 『艶歌選』（略称：艶）

烏有子なる人物が編し、安永五年（一七七六）正月に上方で刊行された歌謡集。版元には京都の武村嘉兵衛、大坂の幾竹屋多八と丹波屋半兵衛が名を連ねる。『春遊興』と同様にまず流行歌謡や民謡を掲げ、それらの内容をもとに五言絶句の漢詩を創作した文芸書。但し、こちらは『春遊興』とは異なり和歌は収録していない。また、『春遊興』が意識的であるのに対し、『艶歌選』は直訳的と言われている。

この歌謡集の冒頭に置かれた憑虚甫の序文には「今日の『末学之徒』はしきりに和歌を漢詩に翻訳したが、誦するに値しないものが多い。ましてや我が国の歌謡に至っては、漢詩とはおおいに異なるものであるから、訳することが困難である」と記される。すなわち、当時『春遊興』や『艶歌選』で行われたような漢詩への翻案の試みが、巷の識者の間でブームとなっていたことが知られる。後掲の『潮来絶句』はその題名からしてもわかるように、やはり当時の流行歌謡であった潮来節をもとに翻案した漢詩を取り合せた書であるし、良寛にも歌謡をもとに創作した漢詩がある。なお、出版広告に二編として『五言古詩』『七言絶句』の部が予告されているが、実際に刊行されたか否かについては不詳。

『艶歌選』は国立国会図書館、東京都立中央図書館加賀文庫をはじめ諸図書館に板本が所蔵されている。縦一八・〇横×横一二・五種の小型本で全三三三丁。この歌謡集も『続日本歌謡集成』巻三（昭和36年・東京堂出版）に収録されたが、その後『日本歌謡研究資料集成』第七卷（昭和51年・勉誠社）に写真版が収録された。

収録歌謡数は八四首。それらの大部分が当時を代表する流行歌謡である。本書にはその八四首を収録した。

〔参考文献〕 小松田良平『日本歌謡研究資料集成』第七卷・解説（昭和51年・勉誠社）

## J 『越風石白歌』（略称：越）

田子文（陳煥章子・小田穀山）が越後国に行われた石白唄に漢文の注釈を加えた歌謡書。俗なる歌謡に格調の高い漢文を添える試みは、『春遊興』『艶歌選』などと軌を一にした行為と言つてよからう。『越風石白歌』には安永一〇年（一七八二）三月の序文が施され、同年の刊と考えられる。板本が国立国会図書館、東京都立中央図書館加賀文庫などに所蔵される。

収録歌謡数は三〇首。本書には全三〇首を収録した。

〔参考文献〕 高野辰之『日本歌謡集成』巻一一・解説（昭和4年・春秋社）

## K 『和河わらんべうた』（略称：和）

『和河わらんべうた』は敬斎なる人物が幼少の頃、大和出身の大橋某という老人から贈られた大和・河内両国の民謡集で、大橋翁没後その貴重な形見として、寛政元年（一七八九）秋にまとめた書である。五丁からなる仮綴の板本一冊本で、現在國學院高等学校藤田小林文庫蔵。縦二二・八糎×横一六・〇糎。歌謡は一首一行書で、六四首を収める。

歌謡の内容は『絵本倭詩経』と同じく教訓的なものが多く、『山家鳥虫歌』と重なる歌謡も散見する。

本書には全六四首を収録した。

〔参考文献〕 小野恭靖『近世歌謡の諸相と環境』（平成11年・笠間書院）

## L 『笑本板古猫』（略称：笑）

編者不詳の潮来節歌謡集。成立年代は寛政年間（一七八九〜一八〇二）頃と推定される。写本一冊が大阪大学附属図書館忍頂寺文庫に所蔵されている。中本で全三〇丁。翻刻は『日本歌謡集成』巻一一（昭和4年・春秋社）に収められた。

潮来節は香取・鹿島参詣で賑わった常陸国の水郷潮来を起点とし、江戸の遊里で流行をみせ、その後全国的に伝播した流行歌謡であった。流行の始発時期は宝暦年間（一七五一〜一七六四）頃で、元歌は「いたこ出島の、真孤まこもの中に、あやめ咲くとは、しほらしや」と考えられる。潮来節から出た流行歌謡には、よしこの節、神戸節くまもと、都々逸ととえいの節などがあるとされる。多く近世小唄調（7・3・4）／7・4・3）／7・3・4）／5）の音数律によって構成される短詩型の詞章を採った。

『笑本板古猫』には近世小唄調の潮来節二三五首を収録する。本書には全二三五首を収録した。

〔参考文献〕 高野辰之『日本歌謡集成』巻一一・解説（昭和4年・春秋社）・藤田徳太郎『近代歌謡の研究』（昭和12年・人文書院）

### M「潮来絶句」（略称：絶）

富士唐麿（藤堂良直）著、葛飾北斎画で、享和二年（一八〇二）に刊行された潮来節歌謡集。北斎（宝暦一〇年〜一七六〇）〜嘉永二年（一八四九）は当時新進の絵師であったが、唐麿に抜擢されて美人画を描いた。今日、北斎の描いた数少ない美人画として貴重とされている。「潮来絶句」の内容は、江戸吉原仲の町の難波屋所属の芸妓たちの歌う潮来節の歌詞と、その歌意を汲んだ五言絶句を添えて美人画の画賛としたもので、絵本とも称すべき体裁を採用している。北斎の美人画には見開き右側の頁に掲載された潮来節の歌詞に見合った場面が、女性を主人公にして

描かれている。これは、潮来節が作品内主体を女性とする恋歌であるところから描かれた絵に他ならない。なお、流行歌謡に漢詩を添える試みは、『春遊興』や『艶歌選』の刊行例があるように、当時としてはきわめて一般的なものであった。

この『潮来絶句』は葛屋重三郎を版元として享和二年に上梓されたが、幕府から咎めを受けて発禁処分となり、遂には絶版に至らしめられたという。今日その完本を得ることは困難と言われるが、板本は葛飾北斎美術館、国会図書館、早稲田大学図書館などに所蔵されており、このうち葛飾北斎美術館蔵本は完本と思われる。活字翻刻は『奇書珍籍』第二輯（大正8年11月）に掲載されたものが最初である。

収録される潮来節は三二首。本書には全三二首を収録した。

〔参考文献〕 小野恭靖『絵の語る歌謡史』（平成13年・和泉書院）

#### N 『朝来考』（略称…考）

文化四年（二八〇七）に真折葛<sup>まさきのかぢら</sup>が成稿した潮来節の歌謡集。編者の真折葛は村田了阿かとされる。潮来節の歌詞とともに、和漢書や仏典など数十種の典籍を引用して注釈を施した堂々たる歌謡の考証書である。写本が国立国会図書館、静嘉堂文庫、刈谷市立図書館などに所蔵されている。このうち国会図書館本は縦二七・五糎×横一八・七糎の大型本であるが、編者の自筆稿本と思われる。早く『近世文芸叢書』第一一（明治45年・国書刊行会）に帝国図書館（現、国立国会図書館）蔵本の翻刻が収められた。

収録歌謡は八四首。本書には全八四首を収録した。

〔参考文献〕 玩究隠士『潮来節大全集』（平成13年・太平書屋）

## O 「江戸いたこほん」(略称：江)

川島禾舟旧蔵の写本一冊。表紙の識語から文政六年(一八二三)の成立と推定される。潮来節五九首を収める。写本末尾に「此ぬし、平野お品」云々とあり、忍頂寺務はその手稿本『近代歌謡考説』(天理図書館蔵)の中で「江戸いたこほん」について、深川あたりの芸妓であった「平野しな」という女性が書き留めた歌謡集と推定している。これに従えば、編者は平野しなということになる。『文献志林』第三輯(昭和5年1月)に忍頂寺務の翻刻紹介が収められるが、原本の所在不明で今日披見は叶わない。本書には『文献志林』をもとにして所収される五九首を収録した。

〔参考文献〕 忍頂寺務「潮来わすれ草」(『文献志林』第三輯(昭和5年1月))

## P 「潮来風」(略称：風)

潮来節の歌詞三二七首を収録した歌謡集であるが、編者・成立年代ともに不詳。

『潮来考』と同様、早く『近世文芸叢書』第一一(明治45年・国書刊行会)に紙魚堂朝倉無声所蔵本の翻刻が収められた。現在は国立国会図書館蔵。本書には全三二七首を収録した。

〔参考文献〕 玩究隠士「潮来節大全集」(平成13年・太平書屋)

## Q 「新編常陸国誌」所収「潮来節」(略称：常)

天保年間(一八三〇～一八四四)頃に中山信名が著した常陸国の地誌。写本が国立国会図書館、国立公文書館内閣

文庫、静嘉堂文庫などに所蔵されている。このうち静嘉堂文庫蔵本が自筆稿本と考えられる。明治三四年には単行の活字本が刊行された。

『新編常陸国誌』は潮来節一八首を収める。この歌数は次の『潮来図誌』に収録された八首の倍以上と多く貴重である。本書には『新編常陸国誌』所収の潮来節全一八首を収録した。

〔参考文献〕 中山信名『新編常陸国誌』（明治34年・積善館）

R 『潮来図誌』所収「潮来節」（略称：図）

天保一〇年（一八三九）に井口二峰が編集した二巻一冊の潮来周辺地域の地誌。板本が国立国会図書館、東京都立中央図書館東京誌料文庫などに所蔵されている。その後『奇書珍籍』第二輯（大正8年11月）に活字翻刻が行われた。

集中には潮来節八首が収録される。この地域の地誌としてもっとも有名な赤松宗旦『利根川図志』（安政五年（一八五八））にも同じ潮来節八首が採られているが、それはこの『潮来図誌』からそのまま引用したものと考えるべきであろう。本書には『潮来図誌』所収の潮来節全八首を収録した。

〔参考文献〕 石川巖『奇書珍籍』第二輯・翻刻（大正8年11月）

S 『音曲神戸節』（略称：音）

神戸節くこうせふしは尾張国熱田の遊里であった神戸町に流行した歌謡である。神戸町は享和年間（一八〇一〜一八〇四）に興った遊里と言われる。神戸に隣接する遊里であった築出つきたし（新長屋とも）で、潮来節から派生した「よしこの節」を

元にした近世小唄調（7<sup>3</sup>・4<sup>4</sup>／7<sup>4</sup>・3<sup>3</sup>／7<sup>3</sup>・4<sup>4</sup>／5）の歌謡が寛政年間（一七八九〜一八〇二）末期頃から流行した。文化年間（一八〇四〜一八一八）初め頃この歌謡が神戸にも流入し、さらに隆盛をきわめることとなった。この歌謡はいつしか「神戸節」と呼ばれるようになったという。当時、神戸節の中の一首に「お亀買ふ奴、あたまで知れる、油つけずの、二つ折れ」（お亀）はこの地域の飯盛女の総称という歌謡があり、この末尾には「ソイツはドイツぢやく」という囃子詞が添えられていた。それがいつしか訛って「ドドイツドイ〜、浮世はサク〜」と歌われるようになったが、これが幕末の一大流行歌「どどいつ」の発生であったとされる（小寺玉昇「殿々奴節根元集」による）。したがって、神戸節は潮来節、よしこの節から「どどいつ」（都々逸、都々一、度々一、殿々奴など様々に表記される）への橋渡しをした歌謡と言え、歌謡史上きわめて重要である。

『音曲神戸節』は神戸節五三七首（詞章冒頭の仮名のイロハ順に四四七首、末尾に追加九〇首）を収録する歌謡集で、尾崎久弥旧蔵の写本一冊。外題はなく、内題に「音曲神戸節 高岡斎游覧編集」とある。高岡斎游覧なる人の自筆本と目される。文化年間初めの頃の成立か。縦二三・〇糎×横一六・五糎。墨付三三丁、他に遊紙一丁。活字翻刻は尾崎久弥によって『名古屋叢書』第一六巻（昭和35年・名古屋市）に収録された。本書には前述の五三七首を収録した。

〔参考文献〕 浅野建二『日本歌謡の発生と展開』（昭和47年・明治書院）

#### T 「賤が歌袋」（略称：賤）

文政五年（一八二二）正月から翌年八月にかけて五冊が順次刊行された歌謡注釈書。各冊は第一編から第五編と名付けられており、いずれも二四丁から三〇丁で構成されている。内容は草庵こと播磨国赤穂の医師深沢高直が、

歌謡をイロハ順に掲げ、儒教的観点からの注釈を施したものである。奇数冊に当たる初編・第三編・第五編は巷での流行歌謡や民謡の類を、偶数冊の第二編・第四編は自作の歌謡を扱っている。

板本は大阪大学附属図書館忍頂寺文庫、神戸大学附属図書館などに所蔵されている。活字翻刻としては太田陸郎『播磨民謡攷』（昭和4年・私家版）が最初というが未見。その後、『日本庶民文化史料集成』第五卷（昭和48年・三一書房）に翻刻紹介され、一般に知られるようになった。

収録歌謡数は二七三首。本書には全一七三首を収録した。

〔参考文献〕 『日本庶民文化史料集成』第五卷・解説（昭和48年・三一書房）

#### U 『淡路農歌』（略称…淡）

『淡路農歌』は小杉温邨旧蔵で現在は国立国会図書館蔵の地誌『淡路草』（写本、全八卷）巻一の一五丁分に記された淡路民謡である。この本は温邨が松野真雄蔵本をもとに、人に誂えて書写したものである。ところで、原本の『淡路草』は文政八年（二八二五）に藤井彰民が編集した書であるが、彰民はその際、平野安澄『国風謳歌篇』から淡路民謡「農歌」と銘打って抄録した。祖本である『国風謳歌篇』は今日散逸してしまい披見が叶わないので、その彰民の抄録である『淡路農歌』は、この時期の農耕にかかわる労作民謡としてきわめて貴重な存在となっている。収録歌謡は杵唄、連架唄、からさお樵唄などから構成される。また、多くの歌謡には安澄の注釈が添えられていて解釈上の参考になる。

『淡路農歌』は『続日本歌謡集成』巻三（昭和36年・東京堂出版）に収録され、一般に知られるようになったが、その後『日本歌謡研究資料集成』第七卷（昭和51年・勉誠社）にも写真版が収められ、その全貌を具に披見できるよう

になった。縦二七種×横一九種の大本で、一首一行書き、一面一〇行（一〇首）。

全歌数は重出一首を含む一四四首。本書では重出歌を除く一四三首を収録した。但し37番歌と123番歌は贈答の歌謡であるので、それぞれの返歌を37、123とした。したがって歌謡の通し番号は141番までとなる。

〔参考文献〕 浅野建二『日本歌謡研究資料集成』第七卷・解説（昭和51年・勉誠社）

